

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

新 東 原 遺 跡 d 地 点
池 の 台 遺 跡 e 地 点
池 の 台 遺 跡 f 地 点
一 本 松 前 遺 跡 a 地 点
一 本 松 前 遺 跡 b 地 点
下 宿 東 遺 跡
東 帰 久 保 南 遺 跡
大 山 遺 跡 b 地 点
島 田 込 の 内 遺 跡
南 台 遺 跡 b 地 点
栗 谷 遺 跡 b 地 点
二 重 堀 遺 跡 f 地 点
菅 地 ノ 台 遺 跡 d 地 点
持田遺跡c地点・正覚院館跡d地点

平成16年度

八千代市教育委員会

凡 例

- 1 本書は、八千代市教育委員会が平成15年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、以下のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (調査面積/調査対象面積)	調査原因	調査担当者
1 しんとうはら 新東原遺跡 d 地点	勝田字新東原1259-2の一部、1259-6の一部	平成15年4月7日 ～ 平成15年4月11日	確認調査 上層 144㎡/1,065.39㎡ 下層 4㎡/1,065.39㎡	共同住宅建設	武藤健一
2 いけ だい 池の台遺跡 e 地点	萱田町字池ノ台2244-2他	平成15年4月21日 ～ 平成15年5月6日	確認調査 210㎡/1,579.35㎡ 本調査 50㎡	店舗・共同住宅建設	武藤健一
3 いけ だい 池の台遺跡 f 地点	萱田町字出戸660-1の一部	平成16年2月5日 ～ 平成16年2月10日	確認調査 上層 147㎡/708.00㎡ 下層 4㎡/708.00㎡	共同住宅建設	武藤健一
4 いっほんまつまえ 一本松前遺跡 a 地点	大和田新田字一本松前127-1の一部、128-1の一部	平成15年5月1日 ～ 平成15年6月30日	確認調査 上層 1,852㎡/15,839.00㎡ 下層 62㎡/15,839.00㎡ 本調査 363㎡	宅地造成	伊藤弘一
5 いっほんまつまえ 一本松前遺跡 b 地点	高津字橋土1014-2	平成15年5月26日 ～ 平成15年6月13日	確認調査 338㎡/1,983.47㎡ 本調査 43㎡	宅地造成	伊藤弘一
6 しもじゆ(ひがし) 下宿東遺跡	米本字下宿東2554-1、2555-1の一部	平成15年5月12日 ～ 平成15年5月26日	確認調査 上層 223㎡/1,384.87㎡ 下層 4㎡/1,384.87㎡ 本調査 75㎡	駐車場建設	武藤健一
7 ひがし(かみ)くほ(みなみ) 東 帰 久 保 南 遺 跡	島田台字寅高入790-1の一部	平成15年6月4日 ～ 平成15年6月6日	確認調査 上層 273.5㎡/1,652.90㎡ 下層 4㎡/1,652.90㎡ 本調査 17.50㎡	店舗建設	武藤健一
8 おおやま 大山遺跡 b 地点	米本字大山2380-58	平成15年6月11日 ～ 平成15年6月13日	確認調査 186㎡/528.00㎡ 本調査 28㎡	宅地造成	武藤健一
9 しまだこめうち 島田込の内遺跡	島田字込ノ内996-1	平成15年6月18日 ～ 平成15年6月24日	確認調査 199.5㎡/240.00㎡	資材置場出入り口切 土工事	武藤健一
		平成15年7月15日 ～ 平成15年7月18日	確認調査 170㎡/170.00㎡		武藤健一
		平成15年7月28日 ～ 平成15年8月22日	本調査 184㎡		武藤健一 伊藤弘一
10 みなみだい 南台遺跡 b 地点	保品字栗谷2070-4・-6	平成15年7月8日 ～ 平成15年7月15日	確認調査 130㎡/1,678.00㎡	特別養護老人ホーム 建設	武藤健一
11 くりや 栗谷遺跡 b 地点	保品字中台谷1915-116の一部	平成15年7月9日 ～ 平成15年7月15日	確認調査 157.50㎡/777.11㎡	店舗建設	伊藤弘一
12 ふたえぼり 二重堀遺跡 f 地点	上高野字二重堀1235-1・-5、1236-1	平成15年11月12日 ～ 平成15年11月26日	確認調査 296.50㎡/2,179.00㎡	宅地造成	武藤健一
13 すげも だい 菅地ノ台遺跡d地点	萱田字菅地ノ台441-12・-13	平成16年2月19日 ～ 平成16年3月2日	確認調査 上層 118㎡/480.00㎡ 下層 4㎡/480.00㎡ 本調査 38㎡	共同住宅建設	武藤健一
14 もちだ 持田遺跡 c 地点・ しょうかくいん 正覚院館跡 d 地点	村上字松葉1193-2、1195-2	平成16年3月9日 ～ 平成16年3月18日	確認調査 243㎡/1,242.22㎡	宅地造成	武藤健一

3 整理作業は、武藤健一、森竜哉、秋山利光が担当し、平成16年度事業として下記の期間に実施した。
平成16年10月8日～平成17年3月25日

5 本書の執筆は、武藤健一、森竜哉、秋山利光が行い、編集を秋山が行った。

6 一本松前遺跡の石器鑑定は、国武貞克氏の御教授を得た。

7 遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面、写真等の記録類は八千代市教育委員会が保管している。

8 本書で使用した地形図は、下記のを一部改変して使用している。

第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「佐倉」（平成10年発行）

各遺跡の位置図 八千代市役所発行 1/2,500 八千代都市計画基本図（平成13年発行）

9 本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 遺構実測図中で使用した破線は、推定復元線を示している。

(2) 竪穴住居跡及びその他の遺構実測図中に使用した一点鎖線は、床面の硬化範囲を示している。

(3) 竪穴住居跡のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。



火床



カマド袖・粘土

10 本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。



須恵器



繊維土器

(2) 土器に書かれた墨書の明瞭な部分はべた塗りで表現した。

11 本書の記載方法は以下のとおりである。

(1) 各遺跡の遺構ナンバーは調査の現地において使用したものをを用いている。

(2) 「八千代市教育委員会」の表記は「市教委」とし、「八千代市遺跡調査会」は「調査会」とした。

12 発掘調査から本書の刊行に至るまで、以下の諸機関・諸氏にご指導、ご協力いただいた。記して感謝するしだいである。(敬称略)

(宗) 正覚院, (株) 蛭間興業, 千葉県教育庁教育振興部文化財課, 村田一男 (八千代市立郷土博物館長)

本文目次

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

I 調査に至る経緯	1
II 各調査の概要	7
1. 新東原遺跡 d 地点	7
2. 池の台遺跡 e 地点	10
3. 池の台遺跡 f 地点	13
4. 一本松前遺跡 a 地点	14
5. 一本松前遺跡 b 地点	23
6. 下宿東遺跡	25
7. 東帰久保南遺跡	29
8. 大山遺跡 b 地点	31
9. 島田込の内遺跡	33
10. 南台遺跡 b 地点	46
11. 栗谷遺跡 b 地点	48
12. 二重堀遺跡 f 地点	50
13. 菅地の台遺跡 d 地点	52
14. 持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点	56

図 版

報告書抄録 巻末

挿 図 目 次

第 1 図 平成15年度市内遺跡調査位置図	5	第 2 図 新東原遺跡位置図	7
第 3 図 新東原遺跡 d 地点トレンチ配置図	8	第 4 図 新東原遺跡 d 地点出土遺物	9
第 5 図 池の台遺跡位置図	10	第 6 図 池の台遺跡 e 地点遺構検出状況図	10
第 7 図 池の台遺跡 e 地点遺構実測図	11	第 8 図 池の台遺跡 f 地点トレンチ配置図	13
第 9 図 池の台遺跡 f 地点出土遺物	13	第10図 一本松前遺跡位置図	14
第11図 一本松前遺跡 a 地点遺構配置図	14	第12図 一本松前遺跡 a 地点4区遺物出土状況	15

第13図	一本松前遺跡a地点4区出土遺物(1)	16	第14図	一本松前遺跡a地点4区出土遺物(2)	17
第15図	一本松前遺跡a地点1区遺構検出状況図	18	第16図	一本松前遺跡a地点土坑(1)	19
第17図	一本松前遺跡a地点土坑(2)	20	第18図	一本松前遺跡a地点土坑(3)	21
第19図	一本松前遺跡a地点グリッド出土遺物	22	第20図	一本松前遺跡b地点遺構検出状況図	23
第21図	一本松前遺跡b地点1号土坑	23	第22図	一本松前遺跡b地点出土遺物	24
第23図	下宿東遺跡位置図	25	第24図	下宿東遺跡遺構検出状況図	25
第25図	下宿東遺跡1号土坑	26	第26図	下宿東遺跡出土遺物	27
第27図	東帰久保南遺跡位置図	29	第28図	東帰久保南遺跡遺構検出状況図	29
第29図	東帰久保南遺跡遺構・遺物	30	第30図	大山遺跡位置図	31
第31図	大山遺跡b地点遺構検出状況図	31	第32図	大山遺跡b地点遺構・遺物	32
第33図	島田込の内遺跡位置図	33	第34図	島田込の内遺跡確認調査	33
第35図	島田込の内遺跡遺構配置図	35	第36図	島田込の内遺跡3号住居跡	35
第37図	島田込の内遺跡3号住居跡出土遺物	36	第38図	島田込の内遺跡4号A B住居跡	38
第39図	島田込の内遺跡4号A住居跡出土遺物	39	第40図	島田込の内遺跡4号B住居跡出土遺物(1)	40
第41図	島田込の内遺跡4号B住居跡出土遺物(2)	41	第42図	島田込の内遺跡5号住居跡	44
第43図	島田込の内遺跡5号住居跡出土遺物	44	第44図	島田込の内遺跡1号土坑	45
第45図	島田込の内遺跡出土遺物	45	第46図	南台遺跡位置図	46
第47図	南台遺跡b地点トレンチ配置図	46	第48図	南台遺跡b地点出土遺物	47
第49図	栗谷遺跡位置図	48	第50図	栗谷遺跡b地点トレンチ配置図	48
第51図	二重堀遺跡位置図	50	第52図	二重堀遺跡f地点トレンチ配置図	50
第53図	二重堀遺跡f地点溝状遺構	51	第54図	菅地ノ台遺跡位置図	52
第55図	菅地ノ台遺跡d地点遺構配置図	52	第56図	菅地ノ台遺跡d地点遺構実測図	54
第57図	菅地ノ台遺跡d地点出土遺物	55	第58図	持田遺跡・正覚院館跡位置図	56
第59図	持田遺跡c地点・正覚院館跡d地点遺構検出状況図	56			
第60図	持田遺跡c地点・正覚院館跡d地点溝状遺構	57			
第61図	持田遺跡c地点・正覚院館跡d地点出土遺物	58			

表 目 次

第1表	新東原遺跡d地点出土遺物観察表	9	第2表	池の台遺跡e地点遺構一覧表	12
第3表	池の台遺跡f地点出土遺物観察表	13	第4表	一本松前遺跡a地点4区遺物観察表(1)	16
第5表	一本松前遺跡a地点4区遺物観察表(2)	17	第6表	一本松前遺跡a地点遺構一覧表	18
第7表	一本松前遺跡a地点土坑内出土遺物観察表	21			
第8表	一本松前遺跡a地点グリッド出土遺物観察表	22			

第9表	一本松前遺跡 b 地点遺構一覧表	24	第10表	一本松前遺跡 b 地点出土遺物観察表	24
第11表	下宿東遺跡遺構一覧表	27	第12表	下宿東遺跡出土遺物観察表	28
第13表	東帰久保南遺跡遺構一覧表	30	第14表	東帰久保南遺跡出土遺物観察表	30
第15表	大山遺跡 b 地点遺構一覧表	32	第16表	大山遺跡 b 地点出土遺物観察表	32
第17表	島田込の内遺跡確認調査遺構一覧表				34
第18表	島田込の内遺跡3号住居跡出土遺物観察表				37
第19表	島田込の内遺跡4号 A 住居跡出土遺物観察表(1)				37
第20表	島田込の内遺跡4号 A 住居跡出土遺物観察表(2)				39
第21表	島田込の内遺跡4号 B 住居跡出土遺物観察表(1)				42
第22表	島田込の内遺跡4号 B 住居跡出土遺物観察表(2)				43
第23表	島田込の内遺跡5号住居跡出土遺物観察表				43
第24表	島田込の内遺跡出土遺物観察表	45	第25表	南台遺跡 b 地点出土遺物観察表	47
第26表	菅地ノ台遺跡 d 地点遺構一覧表	53	第27表	菅地ノ台遺跡 d 地点出土遺物観察表	55
第28表	持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点出土遺物観察表				58

図 版 目 次

図版 1	新東原遺跡 d 地点／池の台遺跡 e 地点	図版 2	池の台遺跡 e 地点
図版 3	池の台遺跡 f 地点／一本松前遺跡 a 地点	図版 4	一本松前遺跡 a 地点
図版 5	一本松前遺跡 a 地点	図版 6	一本松前遺跡 b 地点
図版 7	下宿東遺跡	図版 8	東帰久保南遺跡／大山遺跡 b 地点
図版 9	島田込の内遺跡	図版10	島田込の内遺跡
図版11	島田込の内遺跡	図版12	島田込の内遺跡
図版13	島田込の内遺跡	図版14	南台遺跡 b 地点／栗谷遺跡 b 地点
図版15	二重堀遺跡 f 地点／菅地ノ台遺跡 d 地点		
図版16	菅地ノ台遺跡 d 地点／持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点		

I 調査に至る経緯

八千代市は、首都圏のベッドタウンとして開発が進んだ地域であり、平成8年4月の東葉高速鉄道の開業以来、さらにこの性格を強めている。そうした状況の中、八千代市教育委員会では千葉県教育委員会の指導のもと、開発事業者からの「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会（以下「照会」と略）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち発掘調査が必要と判断される遺跡については、国庫と県費の補助を受け市内遺跡発掘調査事業として調査を実施している。

以下は平成15年度に市内遺跡発掘調査事業として発掘調査を実施した遺跡の調査に至る経緯である。

新東原遺跡 d 地点

平成15年1月10日、木川満氏より市内勝田字新東原1259-2他の1,652.00㎡（後日1,065.39㎡に変更）について共同住宅建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が駐車場であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、1月23日その旨回答した。その後、この回答に沿って木川満氏と協議した結果、3月3日文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事のための発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出され、準備が整った4月7日に調査を開始した。

池の台遺跡 e 地点

平成14年12月2日、有限会社ソエダより市内萱田字池ノ台2244-2他の1,615.67㎡（後日1,579.35㎡に変更）について店舗・共同住宅建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が宅地と駐車場であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、12月18日その旨回答した。その後、この回答に沿って有限会社ソエダと協議した結果、平成15年4月10日土木工事の届が提出された。既存家屋の解体工事中ではあったが、準備が整った4月21日に調査を開始した。

池の台遺跡 f 地点

平成16年1月20日、宮坂三吉氏より市内萱田町字出戸660-1の一部他の1,209.63㎡について共同住宅建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が荒蕪地と道路であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地の荒蕪地部分は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。道路部分については過去に一度照会が提出され、試掘の結果遺跡無回答がされているため、今回は荒蕪地部分708㎡につい

でのみ確認調査が必要と判断し、1月27日その旨回答した。その後、この回答に沿って宮坂三吉氏と協議した結果、1月27日土木工事の届が提出され、準備が整った2月5日に調査を開始した。

一本松前遺跡 a 地点

平成15年1月21日、興真乳業株式会社より市内大和田新田字一本松前127-1の一部他の15,839.00m²について宅地造成のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が荒蕪地及び山林であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、2月12日その旨回答した。その後、この回答に沿って興真乳業株式会社と協議した結果、2月26日土木工事の届が提出され、準備が整った5月1日に調査を開始した。

一本松前遺跡 b 地点

平成15年4月7日、大和住宅株式会社より市内高津字橋土1014-2の1,983.47m²について宅地造成のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が山林であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、4月21日その旨回答した。その後、この回答に沿って大和住宅株式会社と協議した結果、4月23日土木工事の届が提出され、準備が整った5月26日に調査を開始した。調査は進行中であった西側に隣接する a 地点の調査と併行して実施した。

下宿東遺跡

平成15年1月28日、清田哲也氏より市内米本字下宿東2554-1他の1,384.87m²について駐車場建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況は畑地及び荒蕪地で、土師器等の遺物の散布を観察することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、2月4日その旨回答した。その後、この回答に沿って清田哲也氏と協議した結果、2月13日土木工事の届が提出され、準備が整った5月12日に調査を開始した。

東帰久保南遺跡

平成15年4月28日、立石英明氏より市内島田台字寅高入790-1の一部の1,652.90m²について店舗建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況は畑地で、縄文土器等の遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり、遺物の散布も確認できることから、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、5月7日その旨回答した。その後、この回答に沿って立石英明氏と協議した結果、5月12日土木工事の届が提出され、準備が整った6月4日に調査を開始した。

大山遺跡 b 地点

平成15年5月15日、株式会社大相より市内米本字大山2380-58の528.00㎡について宅地造成のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が荒蕪地であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、5月26日その旨回答した。その後、この回答に沿って株式会社大相と協議した結果、5月27日土木工事の届が提出され、準備が整った6月11日に調査を開始した。

島田込の内遺跡

平成15年5月23日、有限会社寿興産より市内島田字込の内の3,024.00㎡について資材置場建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が資材置場であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、5月28日その旨回答した。その後、この回答に沿って有限会社寿興産と協議した結果、地山掘削を伴う資材置場出入口部分の240㎡についてのみ調査を実施することとなった。6月2日土木工事の届が提出され、準備が整った6月18日に確認調査を開始した。確認調査終了後、計画変更により170㎡について追加で確認調査を実施することとなった。7月7日土木工事の届が提出され、準備が整った7月15日に第2次確認調査を開始した。確認調査終了後、2回の確認調査の結果を受け有限会社寿興産と協議した結果、確認調査を実施した410㎡のうち184㎡について本調査を実施することとなり、準備が整った7月28日に調査を開始した。

南台遺跡 b 地点

平成15年5月13日、社会福祉法人悠久会より市内保品字栗谷2070-4他の1,678.00㎡について特別養護老人ホーム建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が駐車場であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、隣接する畑地においても縄文土器等の遺物の散布を確認することができることから、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、5月26日その旨回答した。その後、この回答に沿って社会福祉法人悠久会と協議した結果、5月29日土木工事の届が提出され、準備が整った7月8日に調査を開始した。

栗谷遺跡 b 地点

平成15年6月16日、佐々木慶子氏より市内保品字中台谷1915-116の一部の777.11㎡について店舗建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況が荒蕪地であったため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、6月25日その旨回答した。その後、この回答に沿って佐々木慶子氏と協議した結果、6月27日土木工事の届が提出され、準備が整った7月9日に調査を開始した。

二重堀遺跡 f 地点

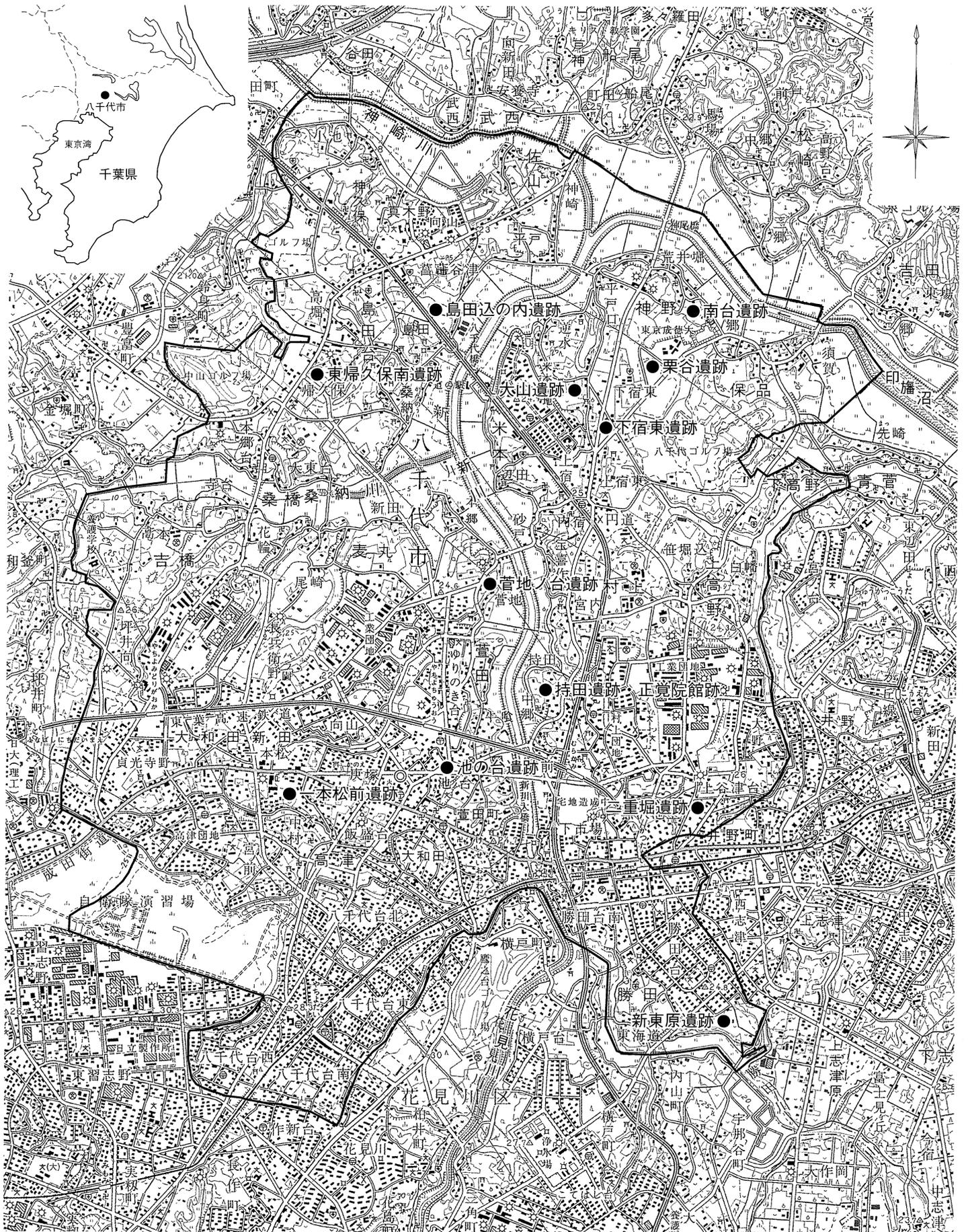
平成15年10月27日，協和不動産株式会社より市内上高野字二重堀1235-1他の2,179.00㎡について宅地造成のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ，現況が荒蕪地であったため，遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし，照会地は周知の遺跡の範囲内であり，過去の周辺の調査実績から，遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，10月31日その旨回答した。その後，この回答に沿って協和不動産株式会社と協議した結果，11月6日土木工事の届が提出され，準備が整った11月12日に調査を開始した。

菅地ノ台遺跡 d 地点

平成15年9月1日，松倉一雄氏より市内萱田字菅地ノ台441-12他の898.59㎡について共同住宅建設のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ，現況は宅地と畑地で，土師器等の遺物の散布を確認することができた。照会地の一部については過去に確認調査を実施し，集落跡が検出されている。また土師器等の遺物の散布も確認できることから，これ以外の区域についても遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，9月11日その旨回答した。その後，この回答に沿って松倉一雄氏と協議した結果，12月24日土木工事の届が提出され，すでに確認調査が終了している地区を除く480㎡について準備が整った平成16年2月19日に調査を開始した。

持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点

平成16年2月13日，株式会社おゆみ野住宅より市内村上字松葉1193-2他の1,242.22㎡について宅地造成のための照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ，現況は荒蕪地で，土師器等の遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡及び館跡の範囲内であり，また，遺物の散布も確認でき，過去の周辺の調査実績から遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，2月20日その旨回答した。その後，この回答に沿って株式会社おゆみ野住宅と協議した結果，3月1日土木工事の届が提出され，準備が整った3月9日に調査を開始した。



第1図 平成15年度 市内遺跡調査位置図 (1/50,000)

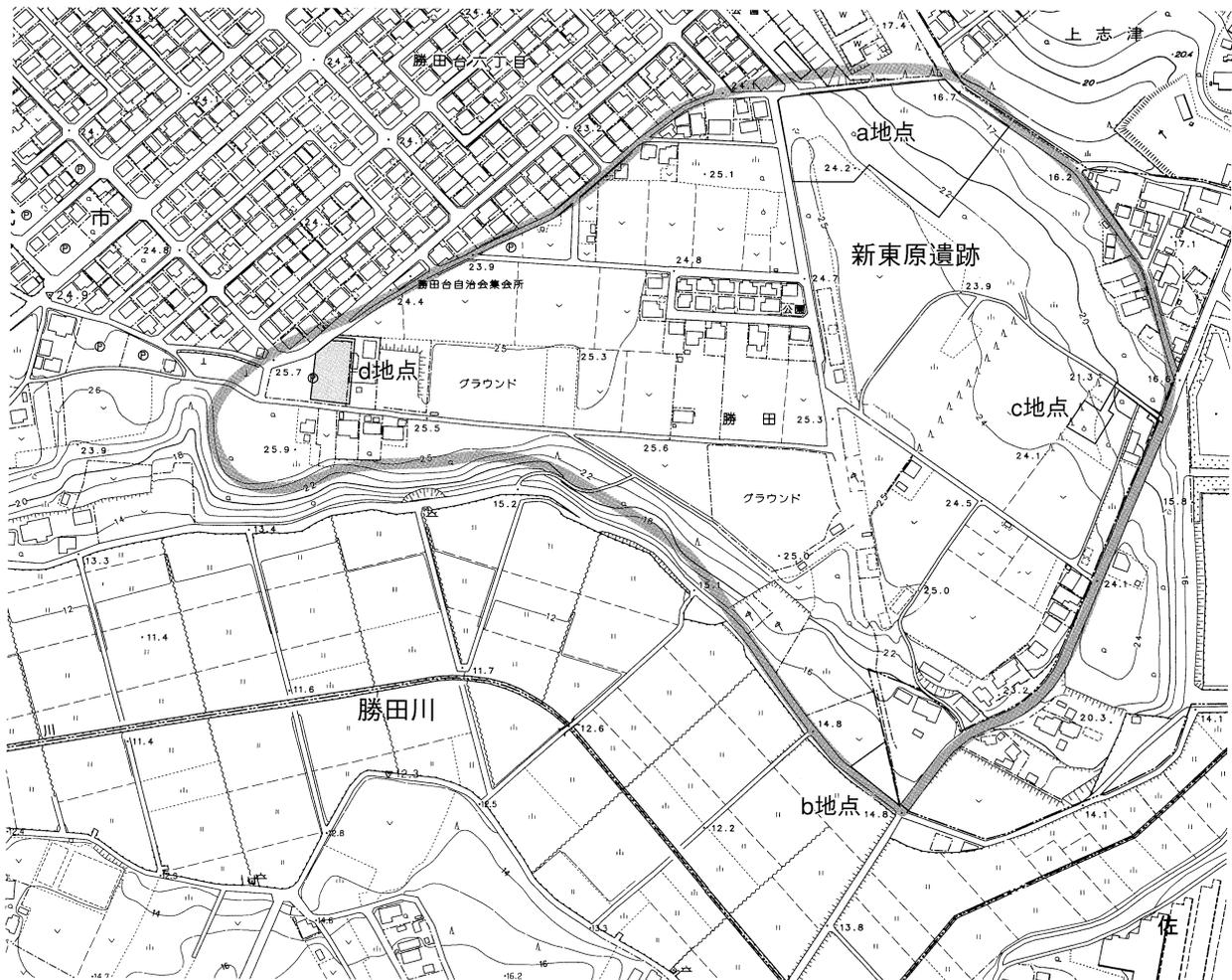
Ⅱ 各遺跡の概要

1 新東原遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

新東原遺跡は、八千代市南東部の佐倉市及び千葉市との市境付近、勝田川の北岸の舌状台地上に立地している。この舌状台地は南側を勝田川、東側から北側にかけて勝田川の支流から入り込む谷津によって開析されている。遺跡の広がり、台地上平坦部を主体として緩斜面から低位段丘まで及んでいる。台地上の標高は約22m～25m、低位段丘の標高は約15m～18mである。

新東原遺跡では、これまでに3地点において調査が実施されている。a地点は新東原遺跡の北端、勝田川の支流から入り込む谷津を臨む台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。平成13年度に市教委によって確認調査、平成15年度に本市遺跡調査会によって本調査が実施され、縄文時代後期加曽利B期の土坑群と近世以降の土坑が検出されている(注1)。b地点は新東原遺跡の南端、勝田川を臨む低位段丘上に位置している。平成14年度に市教委によって確認本調査が実施され、縄文時代前期後半の住居跡1軒が検出されている(注2)。c地点は新東原遺跡の東端、台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。平成14年度に市教委によって確認調査が実施され、遺構は検出されなかったものの、縄文時代後期と思われる土器片



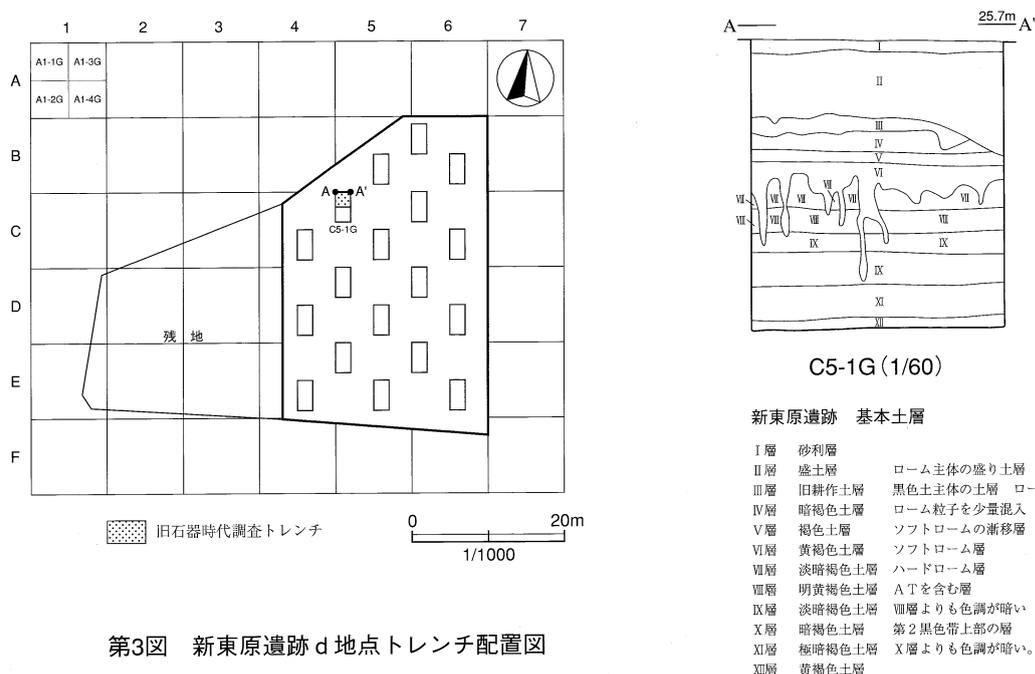
第2図 新東原遺跡位置図 (1/5,000)

が数点出土している（注3）。

今回の調査区はd地点である。d地点は新東原遺跡の西端、標高25m前後の台地上平坦部に位置している。水田面との比高差は約14m前後である。調査区の現況は砂利敷きの駐車場であった。そのため現地踏査においては遺物の散布を観察できる地点はなかったが、周辺の畑地において非常に稀少ではあるが縄文土器の散布が確認されている。過去の調査結果と現地踏査の結果から、今回の調査では縄文時代の遺構の存在が想定された。

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組み、これに平行する形で2m×4mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に144㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。また、旧石器時代の調査トレンチを



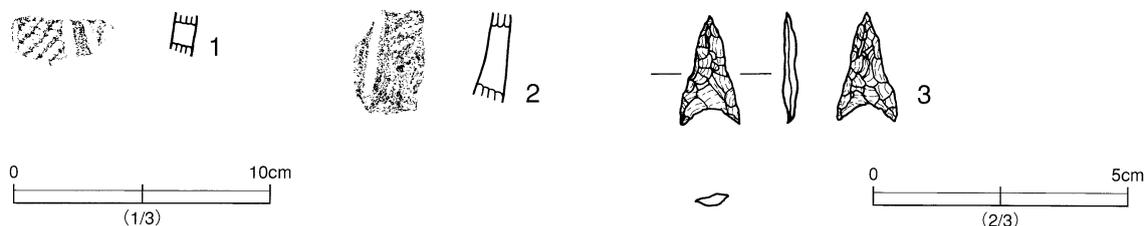
1箇所を設定し、掘削を行った。

調査期間は平成15年4月7～11日である。4月7日器材搬入、トレンチ設定、7・8日重機によるトレンチ表土除去作業、7～9日遺構検出作業、9・10日人力による旧石器時代調査トレンチ掘削作業、実測・撮影等記録作業、11日重機によるトレンチ埋め戻し作業、器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の現況は砂利敷きの駐車場であったが、基本土層としてI層が砂利層、II層が盛土層、III層が旧耕作土層、IV層が暗褐色土層、V層がローム漸移層、VI層がソフトローム層と分層された。II層の盛土層が1m程あり、さらにその下に旧耕作土の残存が確認されたため、ソフトローム上面を遺構確認面として調査を行った。調査区域内は、駐車場造成時に行われた廃材の廃棄用の大きな攪乱が数ヶ所見られたが、全体的には良好にロームが検出されている。しかし、遺構は確認できなかった。遺物は縄文土器片2点と石鏃1点が出土している。

旧石器時代の確認作業は、C5-1グリッドにおいて行ったが、遺物等の検出はみられなかった。調査は盛土層が厚かったこともあり2m30cm程の掘削を行った。



第4図 新東原遺跡 d 地点出土遺物

第1表 新東原遺跡d地点出土遺物観察表

遺物 No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) 〈復元〉〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	—	—	懸垂文と単節斜縄文	B6-4	
2	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	—	—	懸垂文と縄文(乾燥段階に施文)不明により、構成	B6-4	
3	石器	石鎌	—	縦2.1cm	横1.2cm	厚さ3mm	重さ0.5g	—	完形。無茎でやや挟りがある。両面において押圧剥離が見られる。	B6-4	頁岩か。

調査のまとめ

新東原遺跡は遺物の散布が希薄な地域で、遺物の表採も容易ではない遺跡である。今回の d 地点周辺の畑地等における表採で数点の縄文土器が見つかったのみであり、今回の調査区においても遺構の検出が見られなかったものの、縄文時代の土器や石鎌などわずかながら資料が得られた。この遺跡の一端を知る手がかりとなった。

(注1) 八千代市教育委員会 2003 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』

八千代市遺跡調査会 2004 『千葉県八千代市新東原遺跡 a 地点発掘調査報告書 一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査一』

(注2) 八千代市教育委員会 2004 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』

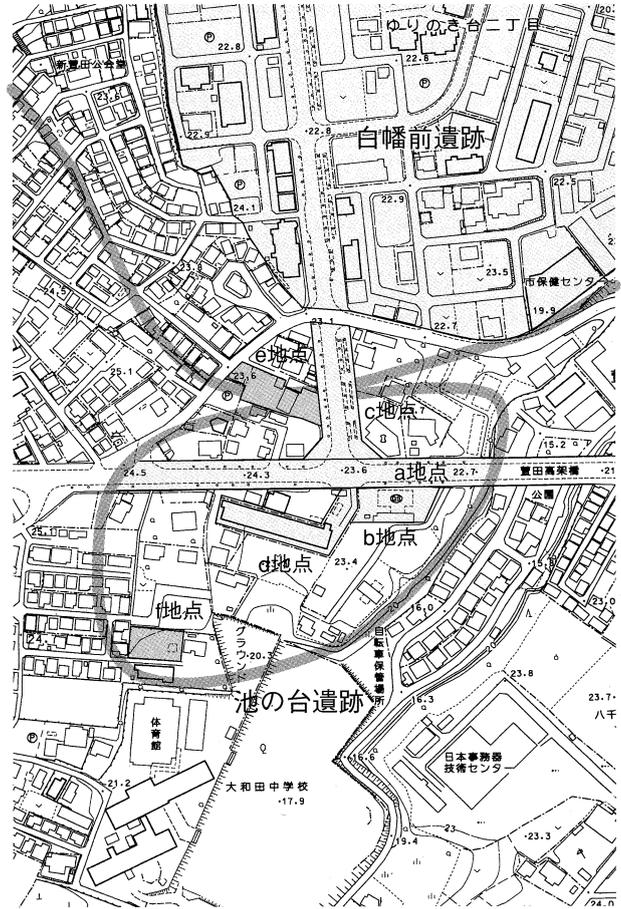
(注3) 注2と同じ

2 池の台遺跡e地点

遺跡の立地と概要

池の台遺跡は八千代市の南部、新川の村上橋付近から南西に入り込む池の谷津の奥に位置する。遺跡の北側にも谷津が入り込み小さな舌状台地を形成している。標高は23mほどである。

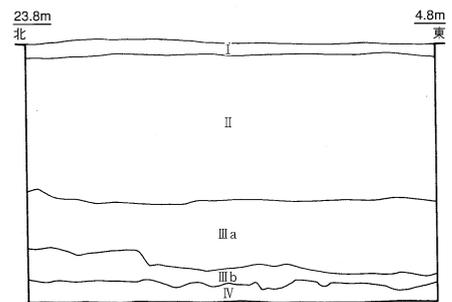
この遺跡は過去に4回調査が行われている。a地点は昭和54年に調査会により奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟などが調査されている(注1)。また、昭和57年には調査会によりb地点が調査され奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒が検出されている(注2)。昭和60年には市教委によりc地点の調査が行われ平安時代の竪穴住居跡2軒検出されたが、溝を両側に伴う谷津が調査区の中央で分断している状況から、北側に隣接する白幡前遺跡(注3)に属する竪穴住居と判断されている(注4)。そのため、池の台遺跡側からは遺構が検出されていない。平成9年には市教委によりd地点の確認調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒と土坑1基が検出された(注5)。同年には調査会により本調査が実施されている(注6)。今回の調査区は遺跡の北側にあり、c地点中央付近と接するように位置している。



第5図 池の台遺跡位置図 (1/5,000)

調査の方法と経過

当初既存建物を撤去後に調査を実施する予定であったが、撤去工事が遅れており、その後の工事の



- C6-1東壁
- | | | |
|------|-------|--|
| 第Ⅰ層 | 砕石層 | 駐車場の砕石。 |
| 第Ⅱ層 | 盛土層 | ローム土と砂が混じり合った土。貝を多く含み、砕石なども認められる。 |
| 第Ⅲa層 | 耕作土層 | 旧表土面。黒褐色土。ローム粒少含。焼土粒・炭化粒・ロームブロック微含。しまり、粘性弱い。 |
| 第Ⅲb層 | 黄褐色土層 | 黒褐色土に黒色土が混じる。ほかはⅡaと同じであるが、部分的にローム粒が混じるところあり。 |
| 第Ⅳ層 | 黄褐色土層 | ソフトローム層。 |

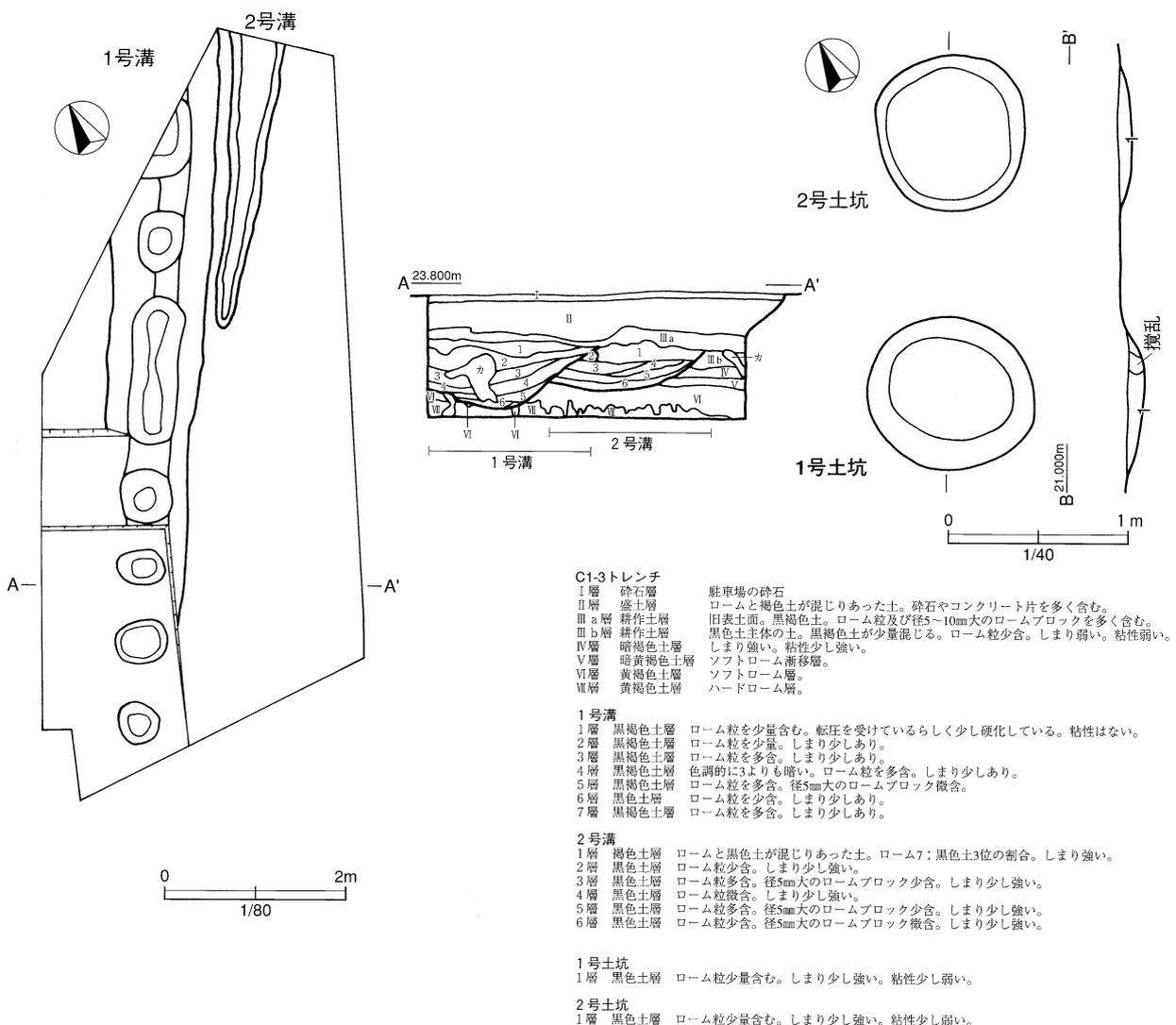
第6図 池の台遺跡 e 地点遺構検出状況図

スケジュールの問題から、やむを得ず、撤去作業と併行して調査を実施した。調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち、これに平行する形で2m×4mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。調査区は埋め立てられた谷津の最奥部に位置しており、表土を除去したトレンチの深さは2m以上のものがほとんどである。そのうえ、市街地に位置しているため、安全上の立場から、遺構が検出されたトレンチ以外は、掘削したその日に埋め戻すこととした。最終的に210㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、これらの遺構の本調査も併せて行った。

調査期間は平成15年4月21日～5月6日である。4月21日器材搬入、21～22日トレンチ設定、22～25日重機によるトレンチ表土除去作業（遺構が検出されなかったトレンチについては埋め戻しも含む）、遺構検出作業、23～5月2日遺構調査、実測・撮影等記録作業、2日重機によるトレンチ埋め戻し作業、6日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区は盛り土がされていた。土層はⅠ層が碎石層、Ⅱ層が盛土層、Ⅲa層が旧表土の黒褐色土層、Ⅲb層が黒色土層、Ⅳ層が暗褐色土層、Ⅴ層ローム漸移層、Ⅵ層にソフトローム層が確認された。このソフトローム上面を遺構確認面として調査を行った。調査区はc地点中央付近に確認された小谷津の延長上にあるため、



第7図 池の台遺跡 e 地点遺構実測図

確認面までの深さが東側のトレンチで約300cm、西端のトレンチで約150cmであった。

遺構は調査区の東西両端において検出された。C6-1トレンチにおいては土坑2基を検出した。当初、同規模の土坑が並んで検出されたため、掘立柱の柱穴を想定したが、トレンチの拡張及び土坑の半裁により、深さ10cmほどの浅い土坑であることが判明した。両土坑とも形態及び規模、覆土は類似している。平面形状が円形で、底部が平底で掘り込みは浅く、自然埋没であった。両土坑からの出土遺物はなかった。

C1-3トレンチからは溝2条が検出された。1号溝は底部にピット列をもつ溝である。調査当初、遺構確認面が低かったため、底部のピット列しか検出できなかった。拡張の結果、柵列状の溝であることが判明した。この溝はc地点で検出された2条の溝と同タイプのものである。当初、小谷津を取り囲むように伸びているのではと想定したが、位置的にはa地点で検出されている溝の延長と判断される。しかし、a地点の報告書にはこの溝の記述がほとんど無いため詳細は不明であり、比較はできなかった。公図上では地境に沿っているようにも思われ、地境の溝と考えるのが妥当であろう。

2号溝は1号溝と平行して延びている。トレンチ壁面の土層観察では比較的幅のある溝であるが、ソフトロームを浅く掘りこんでいるため、C1-3トレンチでは細く浅く検出され、途中で途切れてしまっている。1号溝のように底部にピット列は確認できない。土層から1号溝よりも古いのが、1号溝に平行して延びていることから、同様に地境の溝と判断される。

第2表 池の台遺跡e地点 遺構一覧表

遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	備考
		長軸	短軸	深さ				
1号土坑	土坑	95	85	9	円形	—	皿状	
2号土坑	土坑	87	82	8	円形	—	皿状	

調査のまとめ

調査区は小谷津上に位置するため、遺構の検出される可能性は低いと考えられていたが、土坑を2基検出することができた。遺物の出土がなかったため時期は特定できなかった。西端で検出された溝はa地点で検出された溝と同一の可能性が考えられる。しかし、時期的には比較的新しいもので、底部にピット列を伴うことからその用途については地境に沿って作られた柵列と考えられた。

この調査地点が白幡前遺跡と池の台遺跡の境に位置していることが明らかとなり、池の台遺跡の範囲を捉える資料となるだろう。

(注1) 八千代市遺跡調査会 1980 『池ノ台遺跡発掘調査報告 1979 八千代市都市計画街路3, 4, 1号線建設工事に伴う発掘調査報告書』

(注2) 調査会が調査したが報告書は未刊行である。

(注3) 財団法人千葉県文化財センター 1991 『八千代市白幡前遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書V一』

(注4) 八千代市教育委員会 1986 『千葉県八千代市池の台遺跡 一都市計画道路3・3・7号線造成工事に先行する緊急調査一』

(注5) 八千代市教育委員会 1998 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』

(注6) 調査会が調査したが報告書は未刊である。

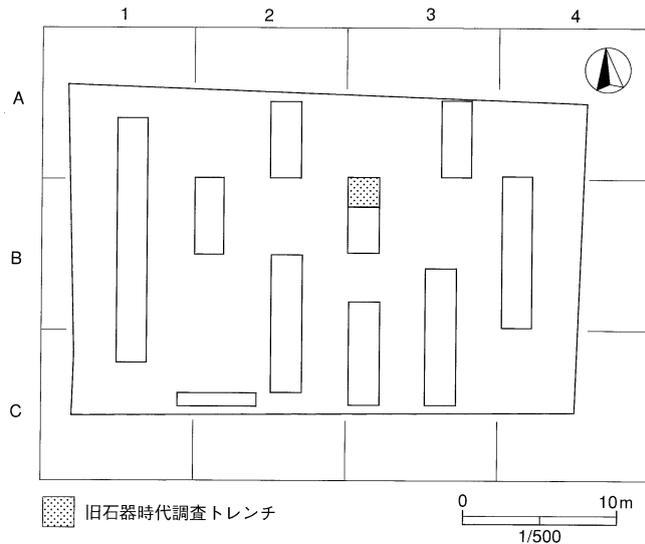
3. 池の台遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

調査区は遺跡の南西端に位置し、標高は約23m～24mほどになる。現況は荒蕪地で調査直前まで廃土置き場となっていた。現状では遺物の散布を確認できる状況ではなかったが、隣接する北側の畑地からは土器の散布が若干見られた。

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち、これに平行する形で2m×5mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に147㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。また、旧石器時代調査トレンチを1箇所設定し、掘削を行った。



第8図 池の台遺跡 f 地点 トレンチ配置図

調査期間は平成16年2月5～10

日である。2月5日器材搬入、トレンチ設定、重機によるトレンチ表土除去作業、遺構検出作業、5～9日人力による旧石器時代調査トレンチ掘削作業、10日実測・撮影等記録作業、重機によるトレンチ埋め戻し作業、器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査の結果、調査区域内は多くの攪乱を受けており、表土となっているI層も盛り土層であることが判明した。II層が黒褐色土、III層がローム漸移層、IV層がソフトローム層と分層された。遺構の確認面をソフトローム上面で行ったが、遺構は全く検出できなかった。

遺物も奈良・平安時代の土師器の坏の細片が1点出土したのみであった。

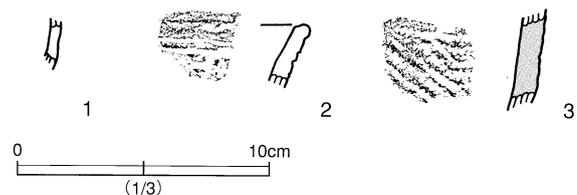
旧石器時代の確認のため、トレンチを設定し第2黒色帯下層まで掘削したが遺物は出土しなかった。

第3表 池の台遺跡 f 地点 出土遺物観察表

遺物 No.	種類	器種	部位	計測値(cm)〈復元〉〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	土師器	坏	体部片	—	—	—			口ク口成形。	B3-1	一括
2	縄文土器	深鉢	口辺部	—	—	—			前期後半か。外) 半截竹管による平行沈線。その下に走行する横方向の沈線が見える。内) 横ミガキ。	隣地表採	
3	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維		前期前半、黒浜式か 外) 縄文LR 内) ナデ	隣地表採	

調査のまとめ

調査の結果、遺構の検出は見られず、遺物としては土師器1点のみであった。調査区が池谷津の最奥部に位置し、池の台遺跡として想定している区域の中でも遺構の希薄な地域であることが明らかとなった。



第9図 池の台遺跡 f 地点出土遺物

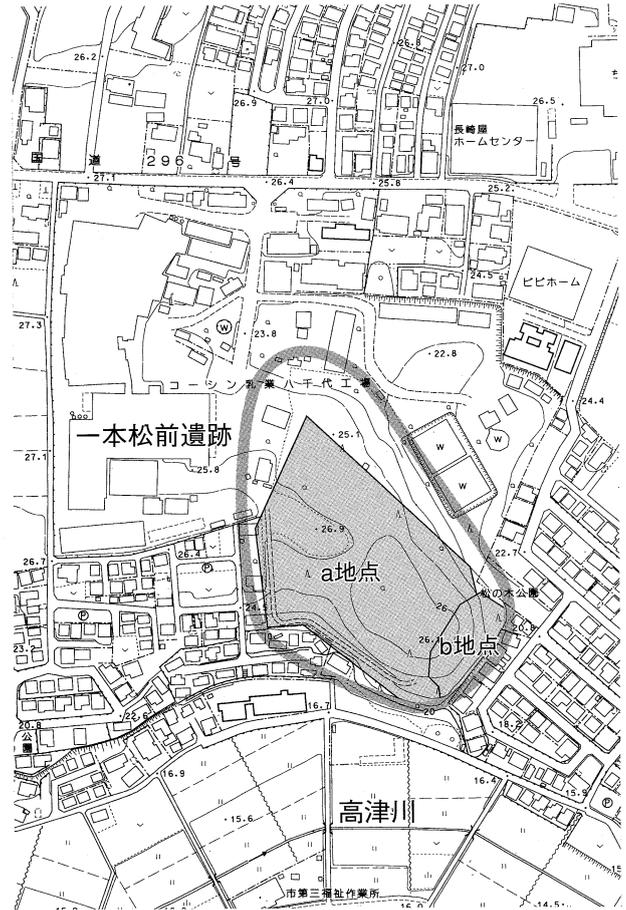
4. 一本松前遺跡a地点

遺跡の立地と概要

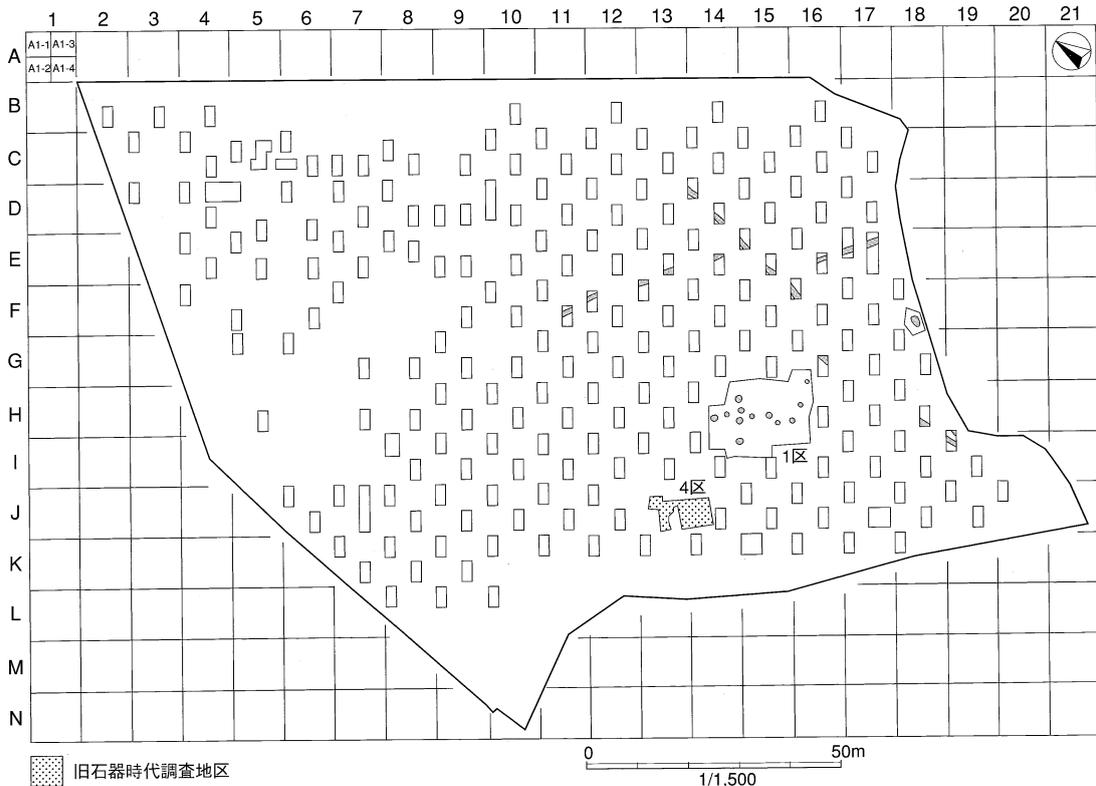
一本松前遺跡は八千代市南西部，高津川を南に臨む舌状台地上に位置する。標高は約20m～26mに立地する。この舌状台地は高津川に対して南東方向に突き出た台地となっており，台地の東側から北側にかけて小谷津が廻りこんでいる。

周辺は比較的，京成八千代台駅から近く高津団地などの大規模開発も行われ，宅地化の進んだ区域であるが，調査区はかつて牧場として利用されていたこともあり，保存状況は良好であった。また，この区域の周辺は開発などに伴い試掘調査を数多く行っているが，遺跡はほとんど確認されておらず，遺跡の希薄な区域となっている。今回の調査区は本遺跡におけるはじめての調査となった。

調査区は遺跡と想定される範囲の大半を占めており，台地の中央部一帯となっている。現況は牧場跡地として荒地となっていた。



第10図 一本松前遺跡位置図 (1/5,000)



第11図 一本松前遺跡 a 地点遺構配置図

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち、これに平行する形で2m×4mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に1,852㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、これらの遺構の本調査も併せて行った。また、旧石器時代の遺物集中地点が1ヶ所検出されたため、62㎡について下層調査も行った。

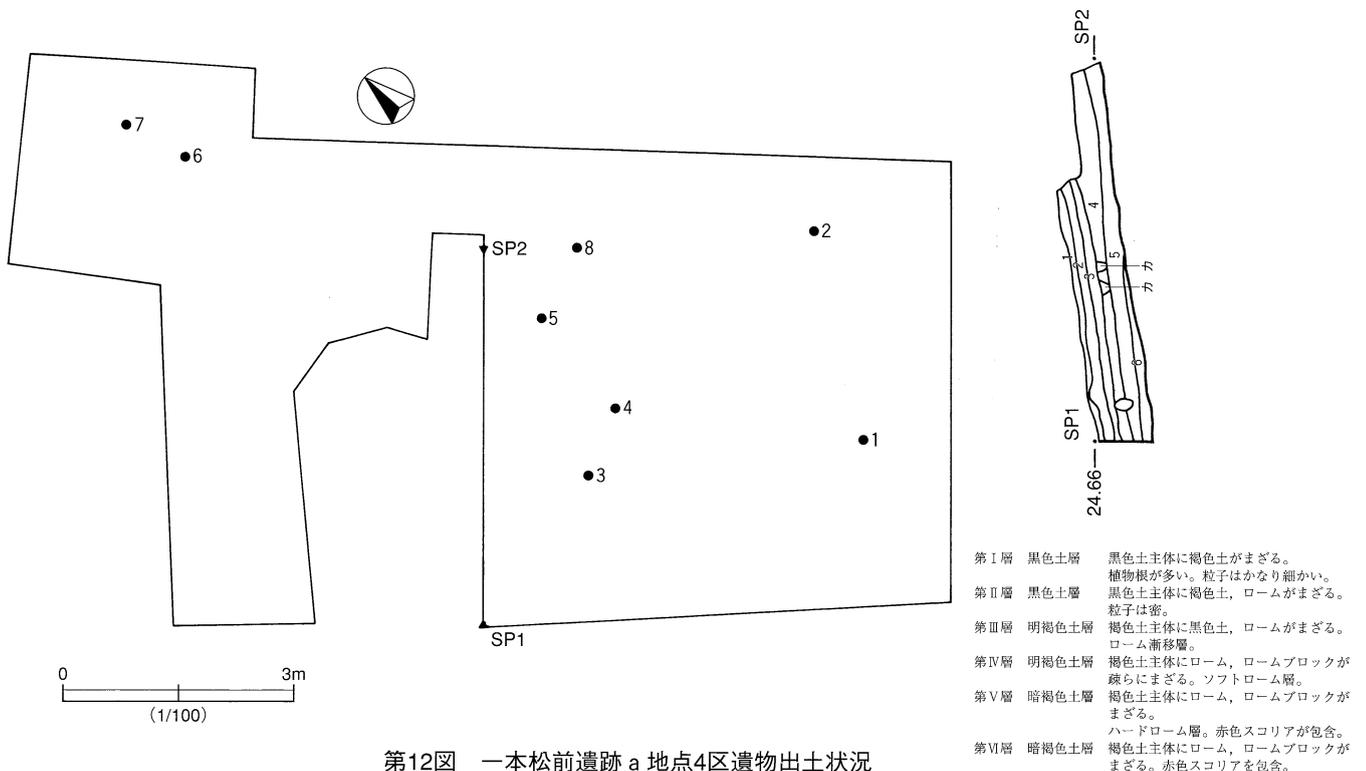
調査期間は平成15年5月1日～6月30日である。5月1日器材搬入、1～8日グリッド杭・トレンチ設定、7～19日重機によるトレンチ表土除去作業、8日～6月3日遺構検出作業、22日～6月30日遺構調査及び実測・撮影等記録作業、6月30日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

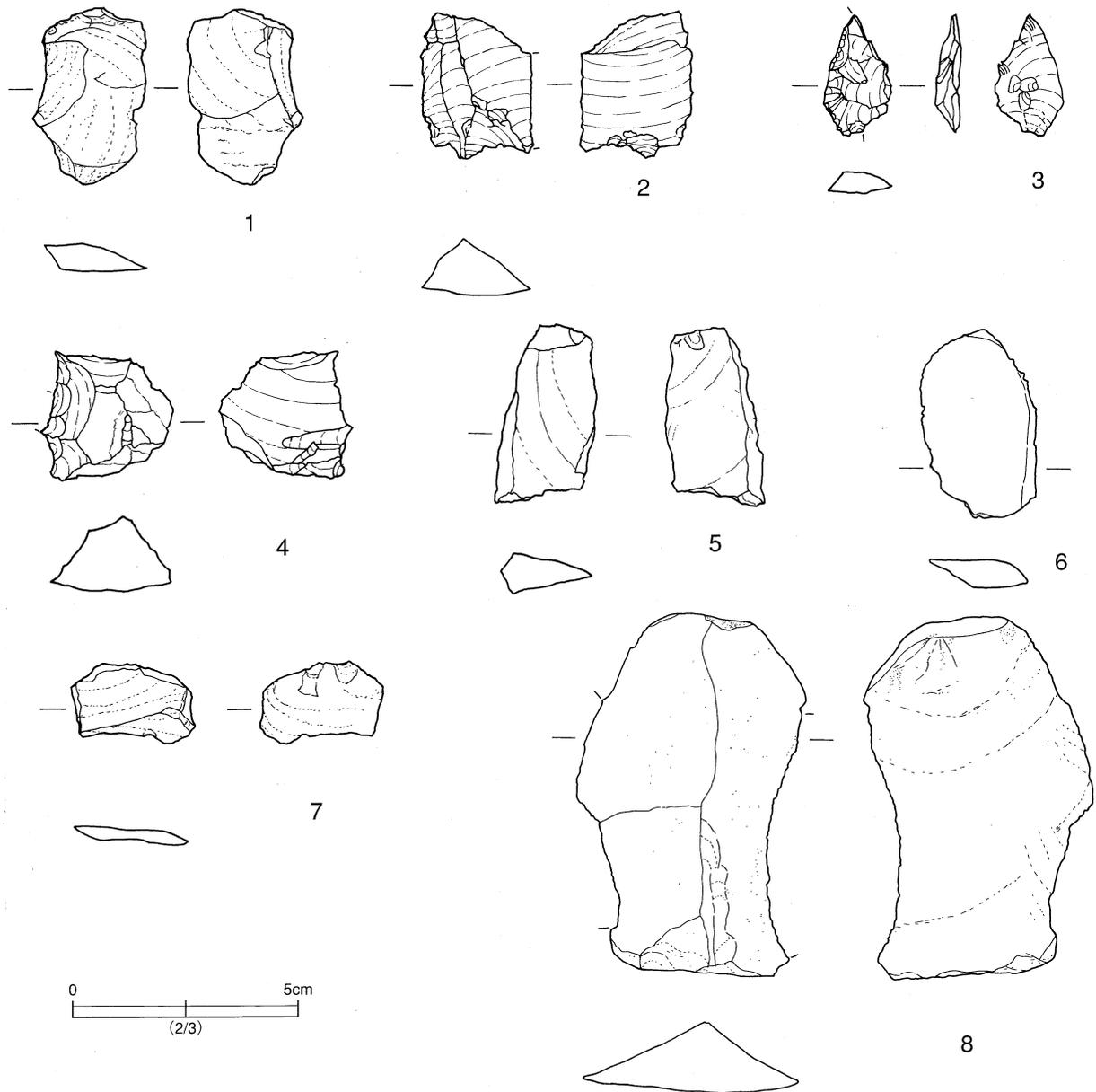
調査区の土層はⅠ層が表土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層黒色土層、Ⅳ層ローム漸移層、Ⅴ層ソフトローム層に分層される。ソフトローム上面を遺構確認面として調査を行った。

確認調査により旧石器時代の遺物が調査区南西側から検出されたため、周辺を拡張し旧石器時代の調査に移行した。（「4区」と呼称する。）本調査の対象となった区域は62㎡ほどであった。石器の出土は散漫であるが、10点ほど出土している。石材は黒曜石、黒色頁岩、砂岩、白滝頁岩、メノウが使われている。石器は剥片や微細な剥離痕のある剥片、ナイフ形石器、叩き石、台石であった。石器の出土層はソフトローム上層から下層にわたる。石器の出土分布では調査区中央と北東部でややまとまりが見られる。集中する区域を想定しながら随時拡張してみたが、石器の分布を十分に把握することはできなかった。調査ではハードローム下部まで掘り下げている。

遺構としては全体で縄文時代の土坑が13基検出されている。その内の12基は調査区の南側、台地の先端側からまともって検出されている（「1区」と呼称する）。あとの1基は調査区の南東側のb地点の調査区との境界近くで検出されている。そのほかに2ヶ所落ち込みが確認された地区があったが、拡張し調査



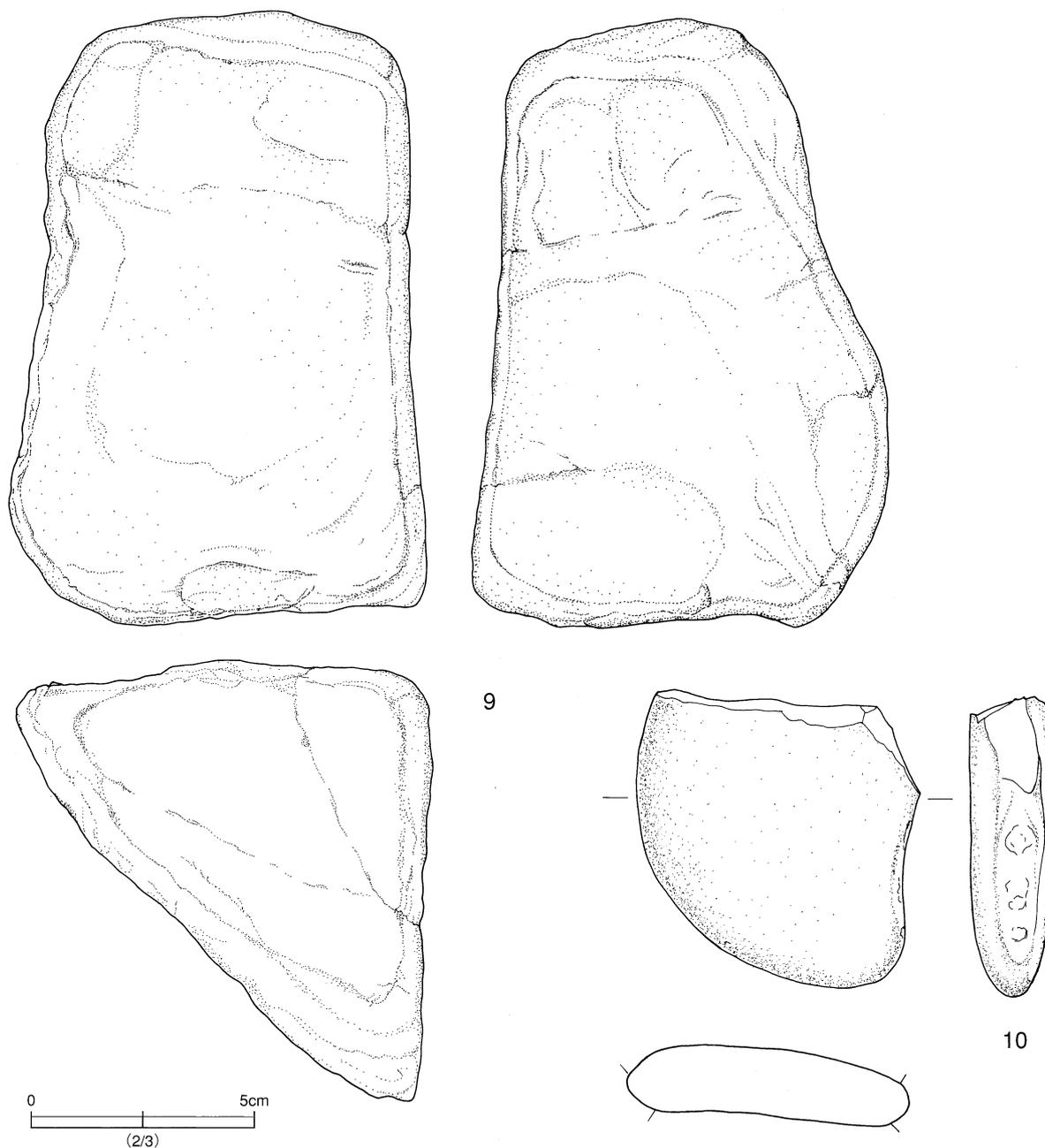
第12図 一本松前遺跡 a 地点4区遺物出土状況



第13図 一本松前遺跡 a 地点4区出土遺物(1)

第4表 一本松前遺跡 a 地点4区出土遺物観察表(1)

遺物 No.	種類	器種	石材	計測値(cm)〈復元〉〔遺存〕			重量(g)	調整等	出土位置	備考
				縦	横	厚さ				
1	石器	剥片	玉髓ないし、メノウ	3.9	2.5	0.6	5.7		4区5	
2	石器	使用痕ある剥片	黒曜石	3.2	2.4	1.3	8.0	右側縁に微細な剥離が見られる。	J-14-1G 確認面	長野産
3	石器	ナイフ形石器	黒曜石	2.7	1.4	0.5	1.5	左側縁に刃部を作る。	4区2	長野産
4	石器	使用痕ある剥片	黒曜石	2.8	2.9	1.6	11.6	左側縁に微細な剥離が見られる。	J-18-1 確認面	伊豆産
5	石器	剥片	頁岩	3.9	2.2	0.9	8.3		4区7	白滝産
6	石器	磨製石斧	砂岩	[4.1]	2.5		7.4	石斧→叩き石として再利用	4区1	
7	石器	剥片	頁岩	1.8	2.7	0.3	1.9		4区3	嶺岡山系 鋸南町白滝層
8	石器	使用痕ある剥片	黒色頁岩	8	5	1.8	64.2	両側縁部に微細な剥離が見られる。	4区4	群馬県水上町

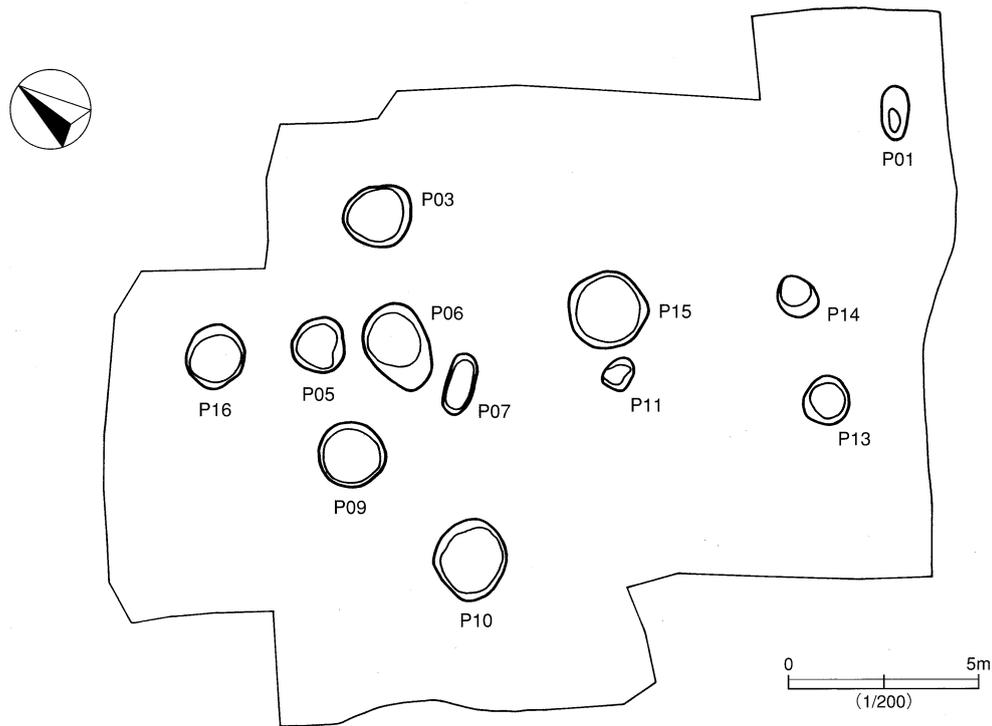


第14図 一本松前遺跡 a 地点4区出土遺物(2)

第5表 一本松前遺跡 a 地点4区出土遺物観察表(2)

遺物 No.	種類	器種	石材	計測値 (cm) 〈復元〉〔遺存〕			重量 (g)	調整等	出土位置	備考
				縦	横	高さ				
9	石器	台石		13.6	9.2	9.8	1419.9	各辺の側縁部が敲打されている。平面部分は磨られている。	4区8	
10	石器	叩き石	砂岩	6.6	6.3	1.5	103.4	側縁-敲打。両面-磨られている。	4区6	

した結果遺構ではないと判断された。また、調査区全体にわたって特に規則性をもたない溝が5条検出され、調査を行ったが時期・用途は不明であった。



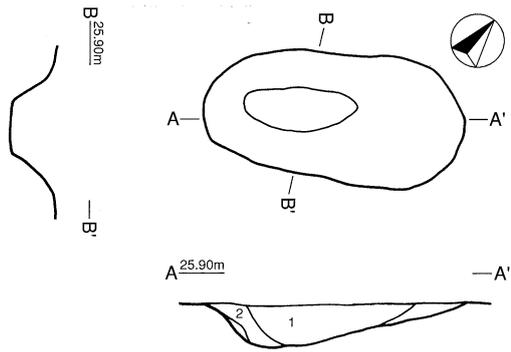
第15図 一本松前遺跡 a 地点1区遺構検出状況図

第6表 一本松前遺跡 a 地点 遺構一覧表

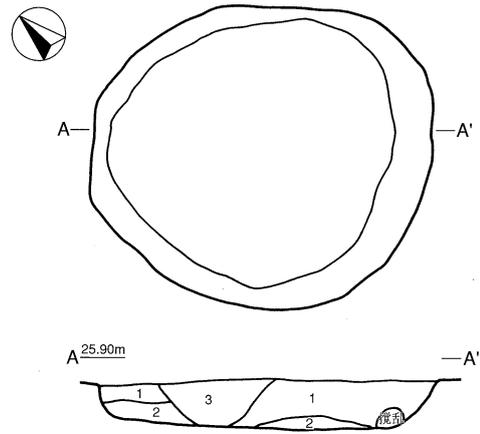
遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	検出位置	備考
		長軸	短軸	深さ					
P01	土坑	135	65	25	長楕円形	N-54°-E	皿状	1区	
P03	土坑	185	165	15	ほぼ円形	—	皿状	1区	
P05	土坑	140	130	20	ほぼ円形	—	皿状	1区	土器5点出土
P06	土坑	235	165	40	楕円形	N-31°-E	段差がある	1区	土器3点出土
P07	土坑	160	75	10	楕円形	N-68°-E	皿状	1区	
P09	土坑	170	170	20	円形	—	平坦	1区	底部に硬化面あり
P10	土坑	215	185	40	楕円形	N-56°-E	凹凸あり	1区	
P11	土坑	90	70	25	不整形	—	凹凸あり	1区	
P13	土坑	125	115	25	円形	—	皿状	1区	
P14	土坑	110	100	20	楕円形	N-32°-E	平坦	1区	
P15	土坑	210	205	55	円形	—	平坦	1区	
P16	土坑	170	150	25	楕円形	N-68°-E	皿状	1区	
P17	陥し穴	195	100	185	長楕円形	N-21°-E	やや凹凸あり	F18-4	

1区では当初16基の落ち込みを確認しているが、調査を行った結果12基が遺構と判断された。土器が出土したのは、5号土坑 (P05)、6号土坑 (P06)、9号土坑 (P09) からであった。

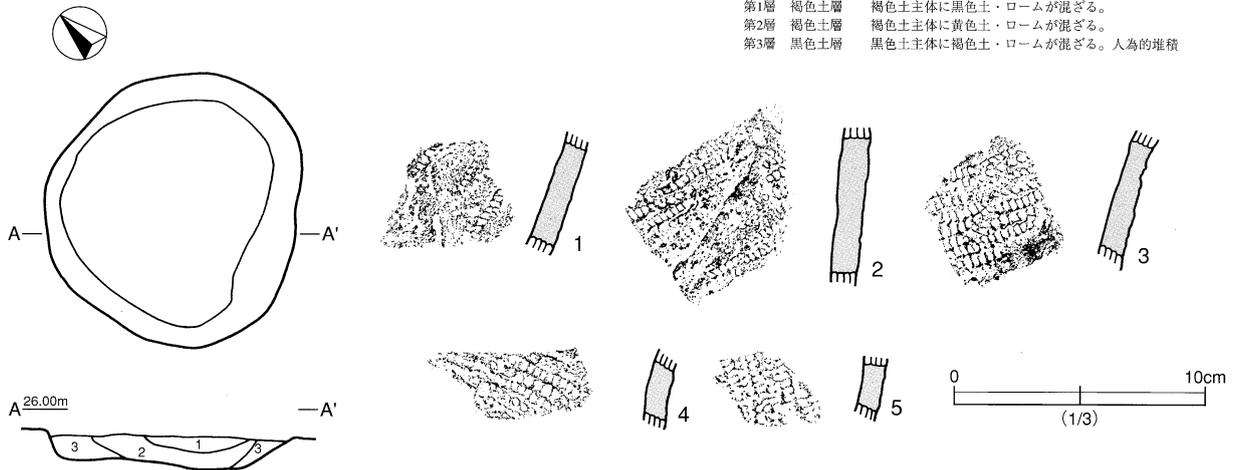
1区の土坑は大きさが1.5mから2mで掘り込みが40cmほどの類似した規模のものが多い。土器が最も多く出土した土坑は9号土坑であり、この土坑から離れるに従い土器の出土が少なくなる傾向がみられる。時期は前・中・後期にわたっているが、量は全体的に少ない。中心となる時期は前期黒浜期とみられる。



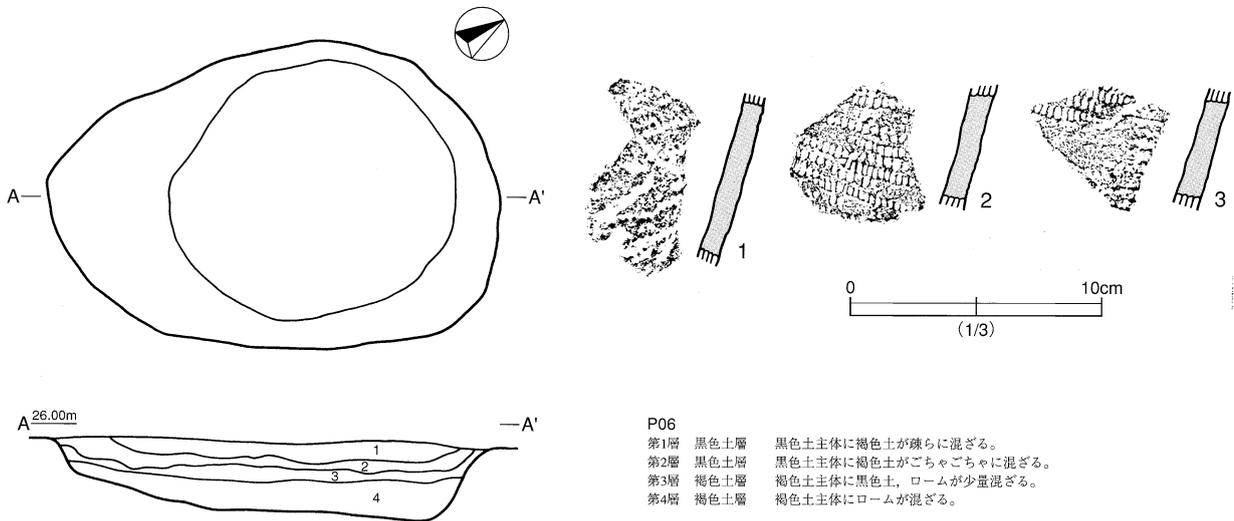
P01
 第1層 黑色土層 黑色土主体に褐色土が混ざる。
 第2層 黑色土層 黑色土主体に褐色土が混ざる。



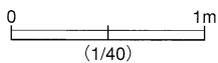
P03
 第1層 褐色土層 褐色土主体に黑色土・ロームが混ざる。
 第2層 褐色土層 褐色土主体に黄色土・ロームが混ざる。
 第3層 黑色土層 黑色土主体に褐色土・ロームが混ざる。人為的堆積



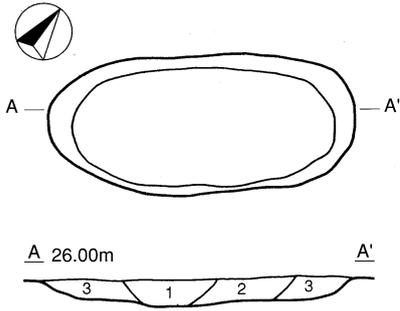
P05
 第1層 黑色土層 黑色土+褐色土+ローム粒, 全体としてボンボソとした感触。
 第2層 黑色土層 黑色土+褐色土+ローム粒, ローム粒が疎らに広がる。
 第3層 褐色土層 黑色土+黄色土+ローム粒, 黑色土が疎らにはいる。



P06
 第1層 黑色土層 黑色土主体に褐色土が疎らに混ざる。
 第2層 黑色土層 黑色土主体に褐色土がごちゃごちゃに混ざる。
 第3層 褐色土層 褐色土主体に黑色土, ロームが少量混ざる。
 第4層 褐色土層 褐色土主体にロームが混ざる。

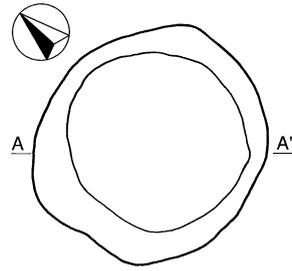


第16図 一本松前遺跡a 地点土坑(1)



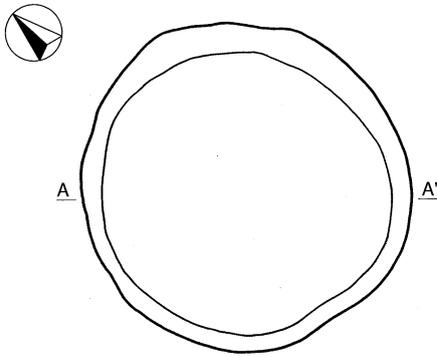
P07

- 第1層 暗褐色土層 褐色土主体に黒色土，ロームが混ざる。
- 第2層 褐色土層 褐色土主体にロームが少量混ざる。
- 第3層 褐色土層 褐色土主体にロームが混ざる。

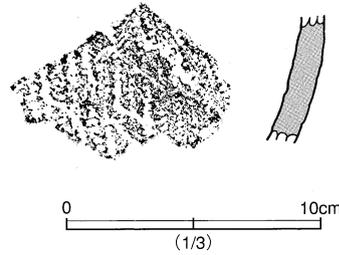


P13

- 第1層 黒色土層 黒色土主体にローム・褐色土がまざる。
- 第2層 黄褐色土層 褐色土主体にロームがまざる。

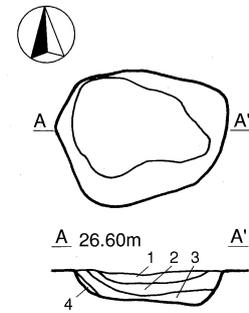


A 26.00m



P09

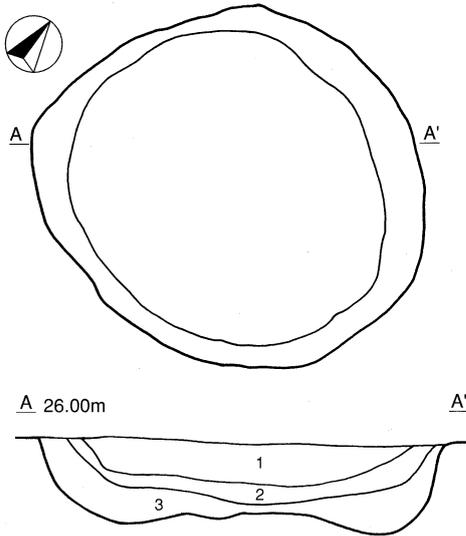
- 第1層 褐色土層 褐色土主体に黒色土，ロームが混ざる。
- 第2層 暗褐色土層 褐色土主体に黒色土，ローム・ロックが混ざる。人為的堆積



A 26.60m

P11

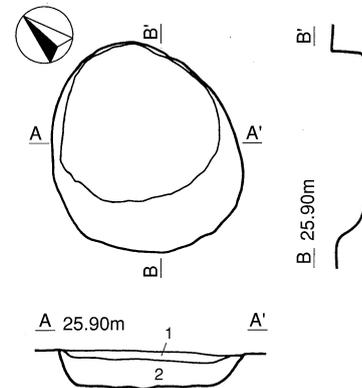
- 第1層 黒色土層 黒色土主体に褐色土がまざる。
- 第2層 黒色土層 黒色土主体に褐色土・ロームがまざる。
- 第3層 褐色土層 褐色土主体にロームが少量まざる。
- 第4層 褐色土層 黒色土主体に褐色土がまざる。



A 26.00m

P10

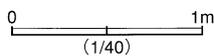
- 第1層 黒色土層 黒色土主体に褐色土が疎らに混ざる。
- 第2層 暗褐色土層 黒色土主体に褐色土，ロームが少量混ざる。
- 第3層 褐色土層 褐色土にローム・黒色土が少量混ざる。



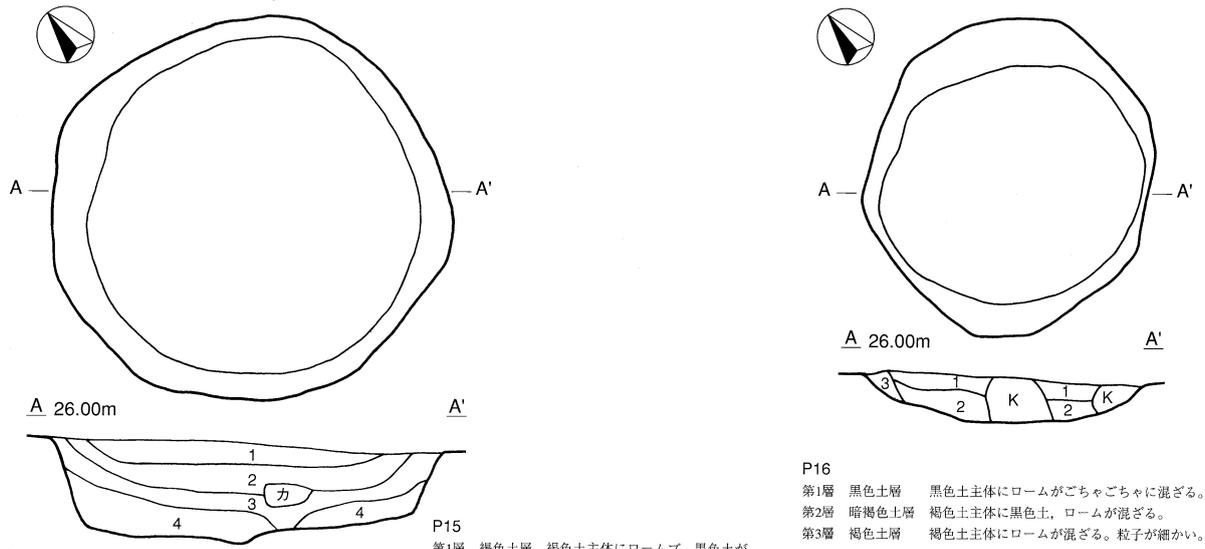
A 25.90m

P14

- 第1層 黒色土層 黒色土主体に褐色土がまざる。
- 第2層 黄褐色土層 褐色土主体に黄色土・ロームがまざる。

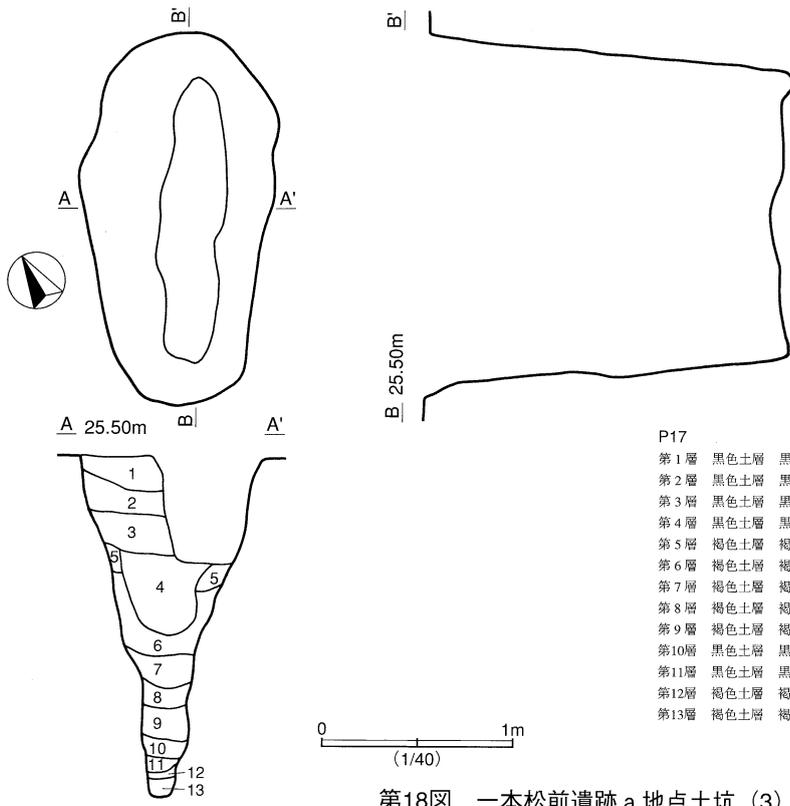


第17図 一本松前遺跡 a 地点土坑 (2)



P15
 第1層 褐色土層 褐色土主体にロームブ、黒色土がまざる。
 第2層 褐色土層 褐色土主体にロームブがまざる。
 第3層 褐色土層 褐色土主体にロームブ、黒色土がまざる。
 第4層 黒色土層 黒色土主体に褐色土がまざる。

P16
 第1層 黒色土層 黒色土主体にロームブがごちゃごちゃに混ざる。
 第2層 暗褐色土層 褐色土主体に黒色土、ロームが混ざる。
 第3層 褐色土層 褐色土主体にロームが混ざる。粒子が細かい。

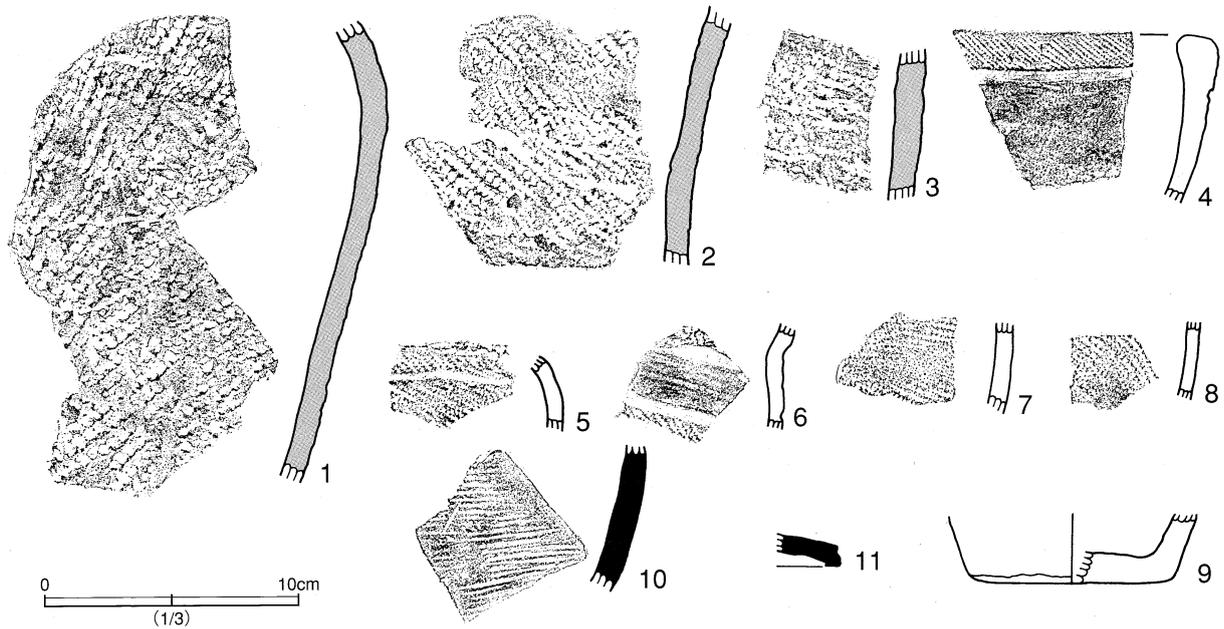


P17
 第1層 黒色土層 黒色土主体に褐色土が少量混ざる。
 第2層 黒色土層 黒色土主体に褐色土が混ざる。
 第3層 黒色土層 黒色土主体にロームブが混ざる。
 第4層 黒色土層 黒色土主体に褐色土が少量混ざる。
 第5層 褐色土層 褐色土主体にロームブが少量混ざる。
 第6層 褐色土層 褐色土主体に黒色土、ロームが少量混ざる。
 第7層 褐色土層 褐色土主体にロームブが混ざる。
 第8層 褐色土層 褐色土主体に黒色土、ロームブが混ざる。
 第9層 褐色土層 褐色土が主体に少量の黒色土が混ざる。
 第10層 黒色土層 黒色土が主体で褐色土、ロームが混ざる。
 第11層 黒色土層 黒色土主体に褐色土、ロームが混ざる。
 第12層 褐色土層 褐色土主体にロームが少量混ざる。
 第13層 褐色土層 褐色土主体に黒色土、ロームが混ざる。

第18図 一本松前遺跡 a 地点土坑 (3)

第7表 一本松前遺跡 a 地点土坑出土遺物観察表

遺構	遺物 No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) <復元> [遺存]			色調	胎土	調整・文様等	取り上げNo.	備考
					器高	口径	底径					
P05	1	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式。外) 縄文RL。内) ナデ、ミガキ	24		
	2	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式。外) 附加条1種RL+L。内) ナデ	39		
	3	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式。外) 附加条1種RL+L。内) ナデ	27		
	4	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式。外) 縄文RL。内) ナデ	25		
	5	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式。外) 縄文RL。内) ナデ	41		
P06	1	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式の底面 外) 縄文RL。器面が荒れている。内) ナデ	32, 55		
	2	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式。外) 縄文RL。附加条の可能性あり。内) ナデ	51		
	3	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式。外) 縄文RL。内) ナデ	30		
P09	1	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	繊維	黒浜式。外) 縄文RL。内) ナデ	63, 64		



第19図 一本松前遺跡 a 地点グリッド出土遺物実測図

第8表 一本松前遺跡 a 地点グリッド出土遺物観察表

遺物 No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) 〈復元〉〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—		繊維(少)	黒浜式。外)縄文RLか、粗雑な印象。内)横ミガキ	C8-4 H11-4	
2	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—		繊維	黒浜式。外)縄文RLだが附加条の可能性もある。内)ナデ	1区-1 1区-2	
3	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—		繊維	黒浜式。外)繊維の痕跡基だし、縄文RL。内)ナデ	1区-6	
4	縄文土器	深鉢	口辺部	—	—	—			安行1試か。外)RL帯縄文、浅い沈線、ミガキ。内)ナデ	1区-15	
5	縄文土器	鉢か	胴屈曲部	—	—	—			後期。外)縄文RL、沈 内)ナデ	1区-12	
6	縄文土器	深鉢	胴上半屈曲部	—	—	—			安行1試か。外)RL帯縄文、磨り消し縄文、沈線ミガキ。内)ナデ	1区-19	
7	縄文土器	深鉢か	胴部	—	—	—			後期か。外)縄文RL。内)ナデ	1区-13	
8	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—			後期後半か。外)縄文RL。内)ナデ	1区-18	
9	縄文土器	深鉢	底部1/2	[2.8]	—	〈8.2〉		砂粒	前期後半～中期か? 外)無文。内)ナデ、器面荒れている。	H16-1	
10	須恵器	甕	胴部片	—	—	—	灰色	白色粒 多含	ロク口成形。横位平行叩き目、叩き締め後、内面などで調整。	J-17-4	
11	須恵器	蓋	破片	[1.25]	—	—	黒青灰色	緻密 白色粒	ロク口成形。口縁部の断面はコの字状。	G11-1	

調査のまとめ

今回の調査により、旧石器時代の遺物、また縄文時代の遺構や遺物の出土はそれぞれの時代におけるこの地区の土地利用のあり方の一端を示すことができたといえる。

旧石器時代では出土状況がやや散漫であるが、ナイフ形石器や使用痕のある剥片などの出土が見られた。また、黒曜石の産地が特定され、信州産が2点、伊豆産が1点であることが判明した。市内の萱田遺跡群出土の黒曜石はほとんどが栃木県高原山産であるが、今回の調査ではそれは見当たらないとの指摘を受けている。

縄文時代では陥し穴が検出されたことから、この周辺が狩猟場として利用されていたことを示している。縄文時代中期や後期などの遺物も若干見られるが、遺構との関連は不明である。

5 一本松前遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

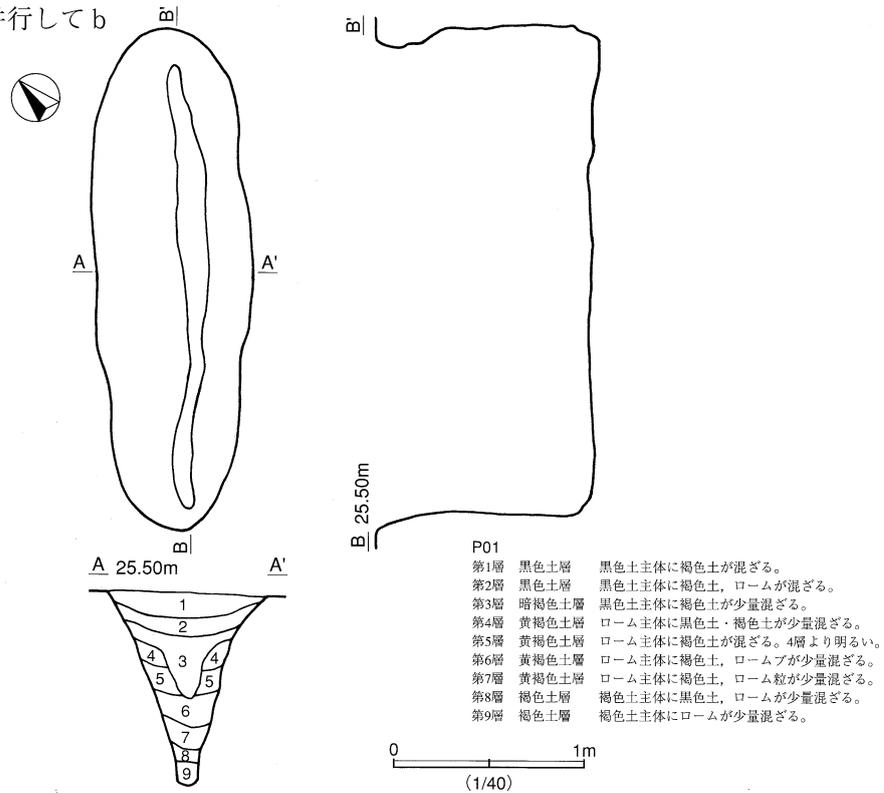
b 地点の調査区は前項一本松前遺跡 a 地点の南東側に隣接する。一本松前遺跡の立地する舌状台地の南東側の先端部の傾斜地に立地している。標高は約20mから26mほどである。



第20図 一本松前遺跡 b 地点遺構検出状況図 (1/800)

調査の方法と経過

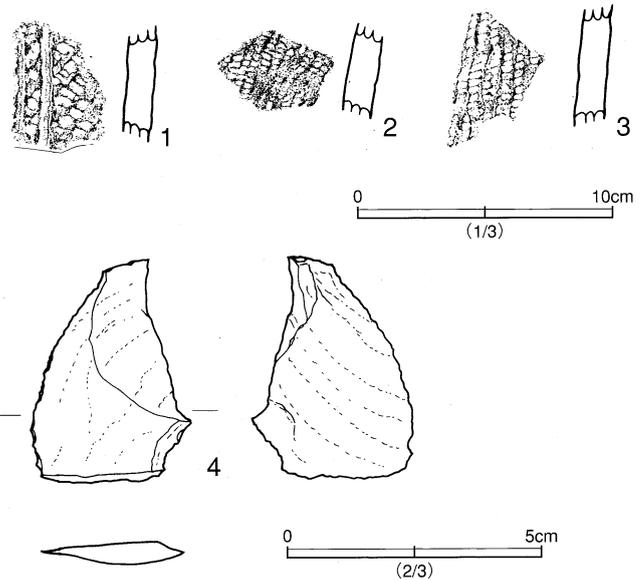
b 地点は a 地点の南東側に隣接しているため、a 地点の調査と併行して b 地点の調査を開始した。調査は、a 地点で組んだ10mのグリッド（方眼）を東側に延長し、a 地点と同様にこれに平行する形で2m×4mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に338㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少な



第21図 一本松前遺跡 b 地点01号土坑

かったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、これらの遺構の本調査も併せて行った。

調査期間は平成15年5月26日～6月13日である。5月26日器材搬入，グリッド杭・トレンチ設定，27～29日重機によるトレンチ表土除去作業，27日～6月2日遺構検出作業，30～6月13日遺構調査及び実測・撮影等記録作業，6月13日器材撤収により調査を終了した。



第22図 一本松前遺跡 b 地点出土遺物

調査の概要

調査区の土層は a 地点と同様であり，ソフトローム上面を遺構確認面として調査を行った。部分的に表土が削平され，すぐにハードロームになるところも見られた。

遺構は縄文時代の陥し穴1基が a 地点との境界近くで検出されている。a 地点17号土坑とはきわめて近接しており，約12mほどの距離である。長軸方向もほぼ同じ方向を向いている。

その他にも溝状遺構が4条検出されているが，a 地点と同様不規則に走っており，遺構との判断はされなかった。

遺物はトレンチから3点出土しており，頁岩の剥片も1点出土した。

第9表 一本松前遺跡 b 地点遺構一覧表

遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	備考
		長軸	短軸	深さ				
P01	陥し穴	290	95	120	長楕円形	N-39°-E	平坦	

第10表 一本松前遺跡 b 地点出土遺物観察表

遺物 No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) (復元) (遺存)			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—			堀之内式粗製か。外) 地文粗い縄文RLの上に沈線。内) ナデ	F20-1	
2	縄文土器	深鉢	破片	—	—	—			後期前半か。外) 縄文RLか。内) ミガキ	G19-4-3	
3	縄文土器	深鉢	破片	—	—	—			後期前半か。外縄文RL 内) ミガキ	I21-1	
4	旧石器	剥片	材質頁岩	縦 4.4	横 3.2	厚さ 0.4	重量 6.1g			G19-4	

調査のまとめ

一本松前遺跡 a 地点の隣接区域であり，ほぼ同様の成果となっている。縄文時代の陥し穴が1基検出されており，この遺跡では陥し穴が2基となった。また，遺物も縄文時代後期のものが出土している。頁岩の剥片は旧石器時代とみられる。

遺構の捕捉に努めた。最終的に223m²について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、これらの遺構の本調査も併せて行った。また、旧石器時代調査トレンチを1箇所設定し、掘削を行った。

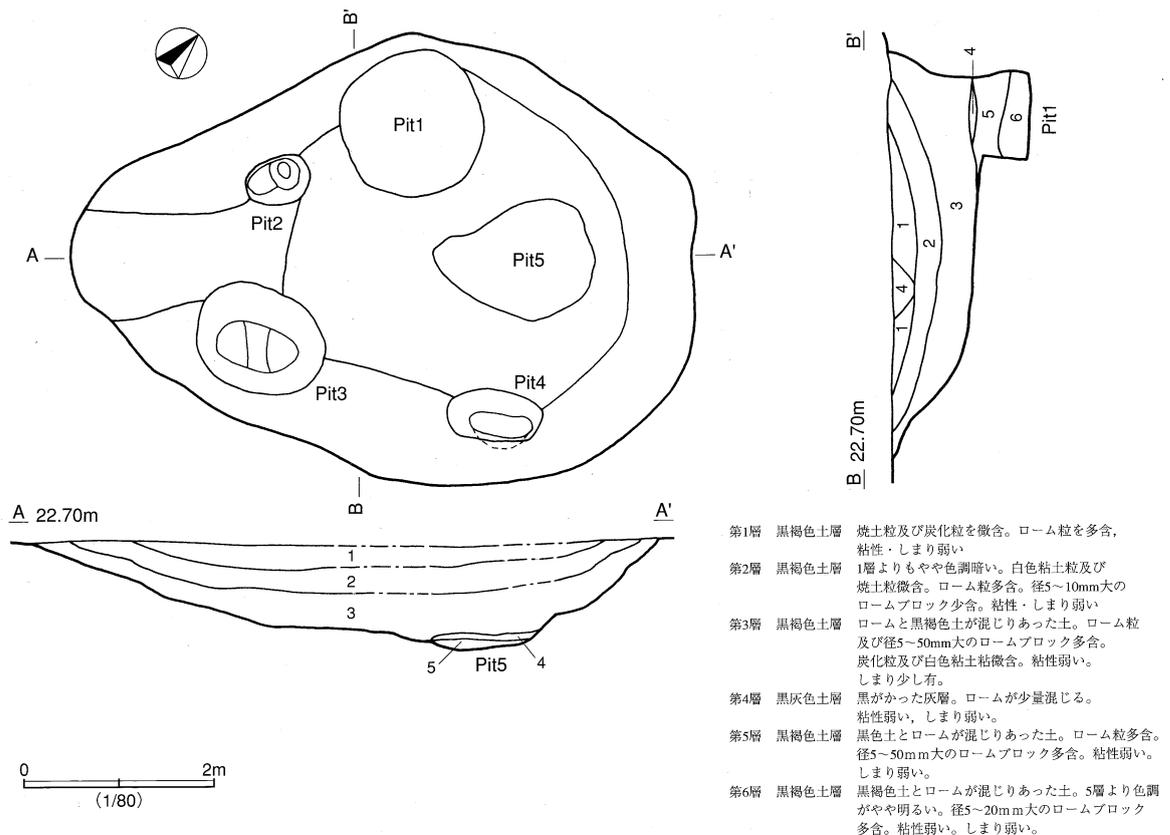
調査期間は平成15年5月12～26日である。基本的にトレンチの表土除去作業は重機にて行ったが、一部囲柵があるため重機が進入できない部分については人力にて行った。5月12日器材搬入、トレンチ設定、12・13日重機及び人力によるトレンチ表土除去作業、人力による旧石器時代調査トレンチ掘削作業、12～16日遺構検出作業、13・14日人力によるトレンチ埋め戻し作業、14～23日遺構調査、15日重機による遺構検出トレンチの拡張作業、20～23日実測・撮影等記録作業、26日重機によるトレンチ埋め戻し作業、器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の土層はⅠ層が耕作土、Ⅱ層がソフトローム層、Ⅲ層がハードローム層となっている。基本的にはソフトローム上面を遺構確認面として調査を行ったが、耕作されていた場所では深耕のためソフトローム中位から下部を確認面としている。

遺構は2ヶ所で確認されている。D2-4トレンチにおいては東西に延びる溝が検出された。地境の溝であると考えられる。覆土のしまりはしっかりしており、自然に埋没したものと思われる。底部は多少凹凸があるが平底で溝の断面は逆台形である。遺物は流れ込んだものと考えられる土器が1点出土している。作られた時期は不明である。

C2-4トレンチからは大型の1号土坑（P01）が検出されている。当初攪乱と考えられたが、サブトレンチによる調査の結果、しっかりとした掘り込みや土錘などの遺物が出土したため、全容を確認するため



第25図 下宿東遺跡1号土坑

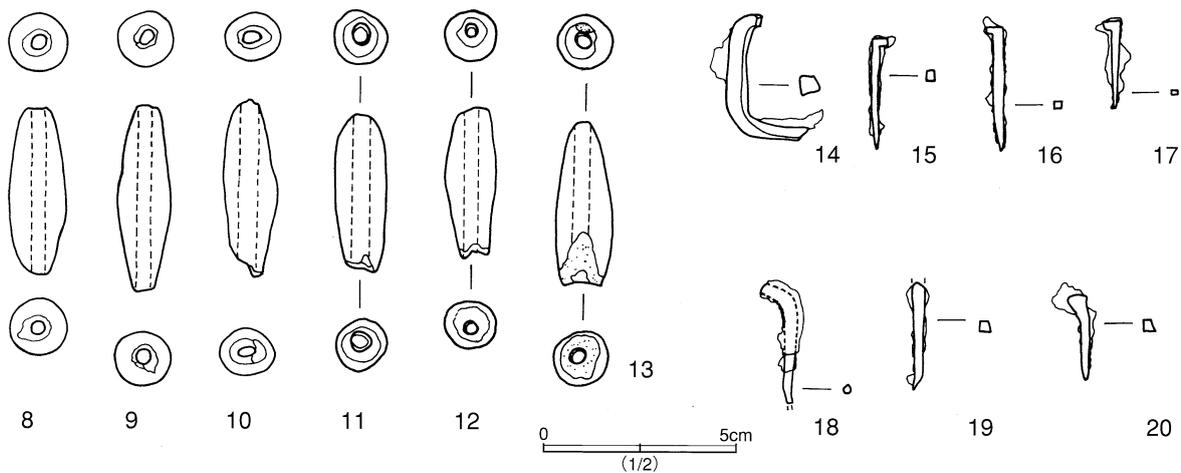
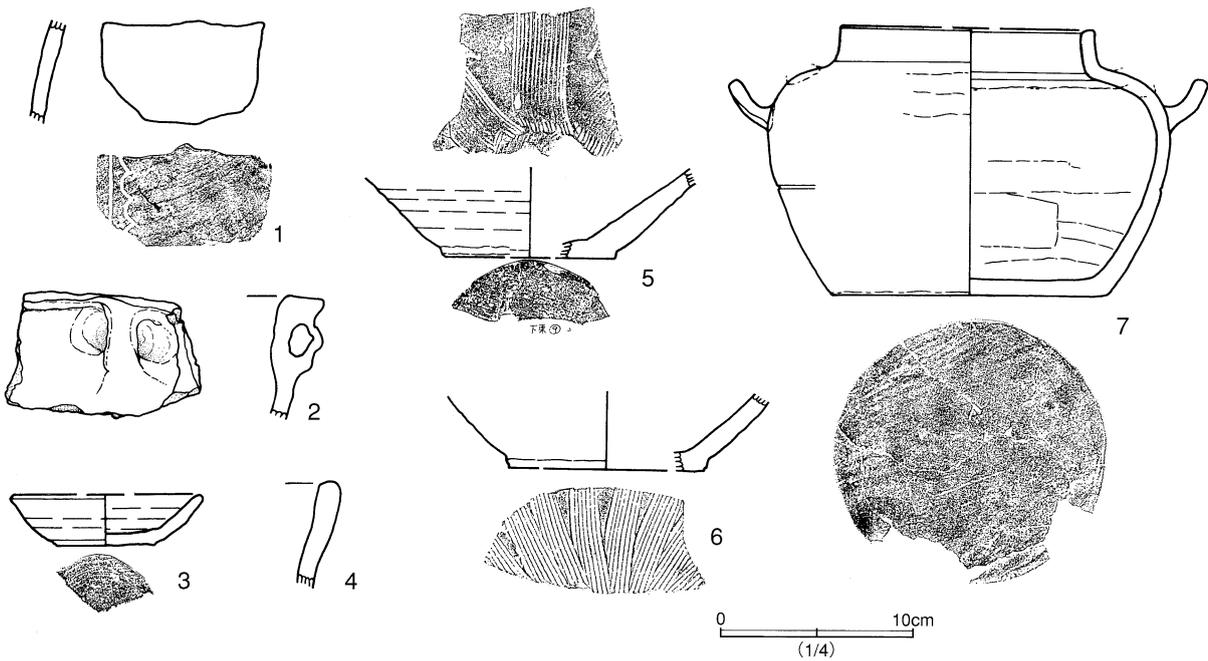
トレンチの拡張を行った。確認面において内耳鍋片も出土し、中世の遺構であると判断された。

土坑の下部は人為的な堆積状態を示し、上部は自然埋没したものと見られる。南西壁は緩やかな傾斜面となりっているが、すり鉢状の断面をしている。この土坑の内部には5基の小ピットが検出されている。Pit1は楕円形を呈し、粘土質の土層が底面となっている。pit1の上面から灰や焼土が検出されている。Pit2, Pit4は小型のピットである。Pit3は楕円形のピットで有段の底部になっている。Pit1と同様粘土層が底面となっている。Pit5は不整形の浅いピットでテラス状の段を持っている。ピット上にpit1と同様に灰が検出されている。土坑内からは内耳土器、かわらけ、土鍋など50点以上の遺物が出土し、そのほとんどが自然堆積した1・2層中からであった。土錘も同様に2層付近から出土した。

そのほか調査区から出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、奈良・平安時代土師器、須恵器などの細片が出土しているが、図示できるものはなかった。

第11表 下宿東遺跡 遺構一覧表

遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底面方向	備考
		長軸	短軸	深さ				
1号土坑	土坑	650	475	159	楕円形	N-52° -E	小ピットあり	



第26図 下宿東遺跡出土遺物

第12表 下宿東遺跡 出土遺物観察表

遺物 No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) (復元) (遺存)			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	縄文土器		胴部片	—	—	—			縦位の沈線文、波状文。内外などで整形。中期前半(五領ヶ台式)	P01-9	
2	土師質土器	内耳土器		{6.0}	参考{16.4}	—	外) 黒褐色 内) 茶褐色	白色粒 雲母 石英	外) 煤付着著しい。	P01一括	
3	土師質土器	坏	口辺部～ 底部	2.7	{10.2}	{15.2}	淡褐色	雲母 黒色粒	ロクロ成形。回転系切り未調整。 内外にロクロなどで。割れ口磨減。	P01-13	
4	陶質土器	内耳土器か	口辺部片	—	—	—	外) 黒褐色 内) 暗青灰色	白色粒 雲母	外) 煤付着著しい。	P01-2区	
5	常滑焼	播鉢	胴下半部 ～底部	{4.9}	—	{9.0}	赤茶灰色	長石片 緻密	14本単位の縦位のクシ状文が施文される。底部回転系切り。ロクロなど。	P01-6	
6	陶質土器	播鉢	胴下半部 ～底部	{4.2}	—	{10.2}	暗茶褐色	雲母 白色粒	外) などで整形。内) 7本単位の縦位の櫛状文。断面はサンドイッチ状。	P01-22	
7	土師質土器	土鍋	口辺部～胴上半部 胴下半部～底部	推定高 14.1	{12.8}	14.2	黒褐色	白色粒多含 小石粒	ロクロ成形。2ヶ所に把手。幅は基部で7.2cm。内外面ヘラなどで。口辺部 などで。把手上に突起物の痕跡。	P01-3,5,10,12,14, 19,1区,3区,4区。	
8	土製品	土錘	ほぼ完形	長 4.4	幅 1.5	孔径 4.0mm	淡橙褐色	雲母 黒色粒 小石粒	管状土錘 重量8.5g	P01-4区中層	
9	土製品	土錘	ほぼ完形	長 4.9	幅 1.4	孔径 4.0mm	〃	雲母 小石粒	管状土錘 重量8.7g	P01-4区中層	
10	土製品	土錘	ほぼ完形	長 4.7	幅 1.4	孔径 4.5mm	〃	雲母 石英 赤色スコリヤ	管状土錘 重量8.6g	P01-4区中層	
11	土製品	土錘	ほぼ完形	長 4.2	幅 1.35	孔径 4.5mm	暗褐色	雲母 白色粒	管状土錘 重量7.2g	P01-1区中層	
12	土製品	土錘	ほぼ完形	長 4.0	幅 1.35	孔径 3.5mm	〃	小石粒 白色粒	管状土錘 重量5.4g	P01-1区中層	
13	土製品	土錘	ほぼ完形	長 4.3	幅 1.45	孔径 4.0mm	淡橙褐色	黒色粒 小石粒	管状土錘 重量7.3g	P01-1区中層	
14	鉄器	不明	両端欠損	長 3.4	屈曲部 2.6cm	断面 5×6mmの方形			重量4.0g	P01-8	
15	鉄器	釘	完存	長 3.0	基部屈曲部 4mm	断面 2×3mmの方形			重量0.8g	P01-7	
16	鉄器	釘	ほぼ完形	長 3.5	基部屈曲部 4～5mm	断面基部 3×2mm 先部 2×2mm			断面方形 重量2.0g		
17	鉄器	釘	ほぼ完形	長 2.4	基部屈曲部 4mm	断面基部 2×2mm 先部 1×1.5mm			断面方形 重量0.5g		
18	鉄器	釘	ほぼ完形	長 3.4		先部 2mm			断面方形 重量0.7g		
19	鉄器	釘	頭部欠損	長 {2.8}		断面 3×3mm			断面方形 重量0.6g		
20	鉄器	釘	ほぼ完形	長 2.5	基部屈曲部 {4mm}	断面基部 2×3mm 先部 1mm			断面方形 重量0.8g		

調査のまとめ

当初、今回の調査では奈良・平安時代の住居が検出されるものと想定していたが、中世の大型の土坑が検出された。遺物から中世の所産と判断されるが、用途は不明である。スロープを出入り口とした貯蔵穴などの施設ではないかと調査段階では考えられた。下宿東遺跡は今回の調査がはじめての調査であったが、この地区の中世における生活の一端を明らかにすることが出来、今後の周辺の調査が期待される。

(注1) 財団法人千葉県文化財センター 1998 『主要地方道千葉電ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書 一八千代市雷遺跡・雷南遺跡一』

7. 東帰久保南遺跡

遺跡の立地と概要

東帰久保南遺跡は八千代市北西部に位置している。新川の西岸から入り込む谷津を東に臨む台地上に立地している。標高は約21m～22m、水田面との比高差は約17m～18mである。これまでに東帰久保南遺跡の調査例はなく、今回が初めての調査となる。

調査区は東帰久保南遺跡の西端、標高は22m前後の台地上平坦部に位置している。地形的には東の新川から入り込む谷津と西の鈴見川から入り込む谷津に挟まれた台地の中央部にあたる。現況は畑地で、現地踏査においては縄文時代の遺物の散布が確認されている。今回の調査では、現地踏査の結果から、縄文時代の遺構の存在が想定された。

調査の方法と経過

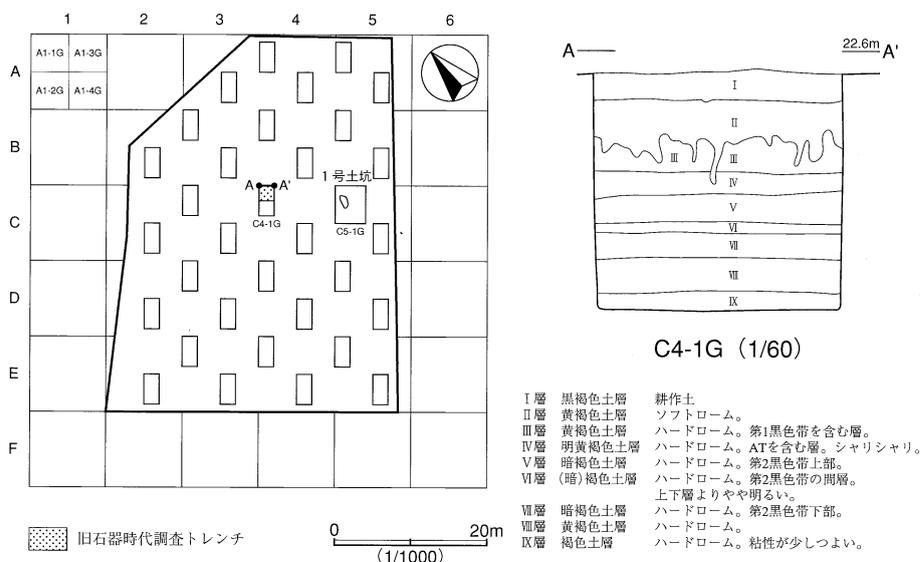
調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド(方眼)を組んだのち、これに平行する形で2m×4mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に273.50m²について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張しこの遺構の本調査も併せて行った。また、旧石器時代調査トレンチを1箇所設定し、掘削を行った。

調査期間は平成15年6月4～6日である。6月4日器材搬入、トレンチ設定、重機によるトレンチ表土除去作業、4・5日遺

構検出作業、4～6日
人力による旧石器時代
調査トレンチ掘削作業、
5・6日遺構調査、6日実
測・撮影等記録作業、
重機によるトレンチ埋
め戻し作業、器材撤収
により調査を終了した。



第27図 東帰久保南遺跡位置図 (1/5,000)

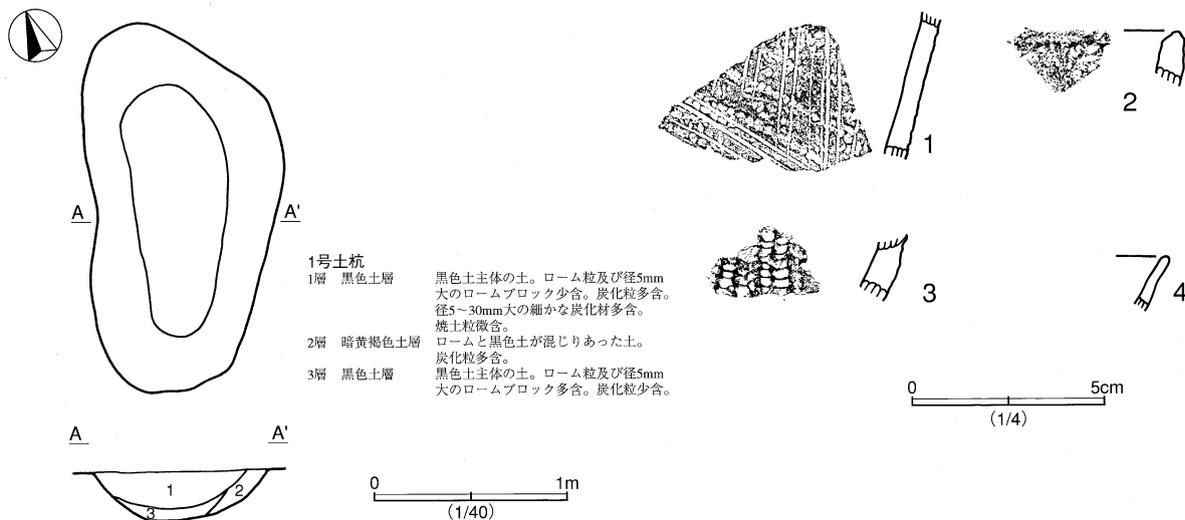


第28図 東帰久保南遺跡遺構検出状況図

調査の概要

調査区の土層はⅠ層が耕作土、Ⅱ層がソフトローム層、Ⅲ層がハードローム層に分層された。表土下30cm程でⅡ層上面が確認されたため、ソフトローム上面を遺構確認面として調査を行った。

確認調査の段階で、土坑が1基検出されたため、トレンチを拡張し本調査を行った。



第29図 東端久保南遺跡遺構・遺物

1号土坑は覆土の中～上層にかけて細かな炭化材が多量に含まれていたが、自然埋没したものと判断された。遺構内からの出土遺物は無く、遺構の時期や用途については不明である。しかし、調査時の判断としては覆土の状況から近世以降の炭焼きに関連したものではないかと推定している。

旧石器の調査はC4-1トレンチで掘削を行ったが遺物は検出できなかった。

調査区域内の出土遺物は縄文土器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、また、泥めんこやおはじきなど少量出土している。しかし、いずれも細片で、しかも表採遺物であった。

第13表 東端久保南遺跡 遺構一覧表

遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	備考
		長軸	短軸	深さ				
1号土坑	土坑	197	101	25	楕円形	N-13°-E	皿状	

第14表 東端久保南遺跡 出土遺物観察表

遺物No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) (復元) (遺存)			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	—	外) 褐色 内) 褐色暗褐色	粗砂含む が緻密	加曾利B式粗製土器。外) 地文縄文LRか。その上に半裁竹管による平行沈線。内) ナデとミガキ。	B5-4一括	
2	縄文土器		口辺部 緑にも見える	—	—	—	灰褐色	砂粒	外) 縄文あるかもしれないが、摩滅しており不明。内) ナデか。	B3-1一括	
3	縄文土器	深鉢か	胴部片	—	—	—	淡赤褐色	緻密	中期後半か。外) 縄文RL。内) 横ミガキ。	表採	
4	土師器	坏	口辺部	—	—	—	淡褐色	雲母含む が緻密	口口成形	G表採19-4	

調査のまとめ

今回の調査は調査前の散布状況から、縄文時代の遺構を想定していたが、検出されたものは近世以降の土坑が1基のみで、遺物も細片ばかりであった。調査区が台地中央部に位置していることから、遺構の分布の希薄な区域であったと思われる。

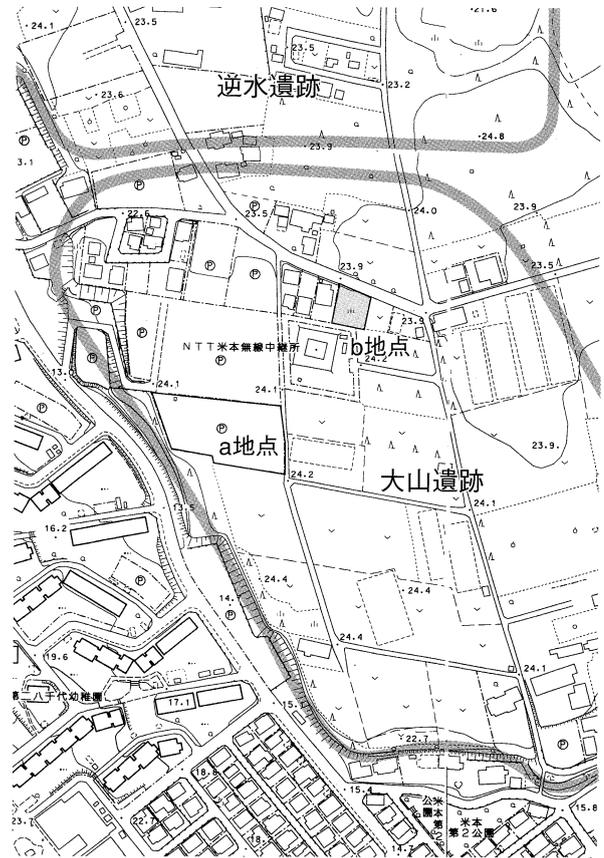
8. 大山遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

大山遺跡は、八千代市の北部、新川の東岸から入り込む谷津を西に臨む台地上に立地している。標高は約22m～23m、水田面との比高差は約18m～20mである。

大山遺跡では、今回の調査を除いてこれまでに1地点において調査が実施されている。a地点は大山遺跡の西端、新川から入り込む谷津を西に臨む台地縁辺部に位置している。昭和59年度に調査会によって確認調査が実施され、縄文時代前期居住跡6軒と近代の戦争遺構と思われる土塁遺構が1基検出されている（注1）。

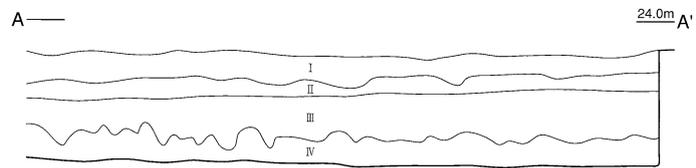
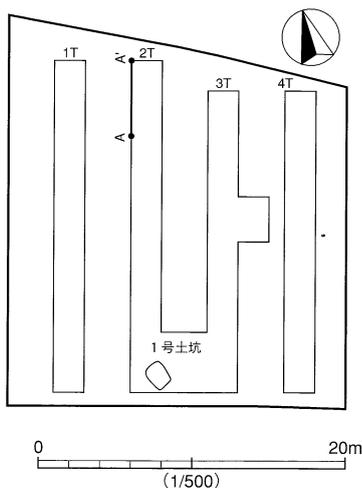
今回の調査区はb地点である。b地点はa地点の北東約400mの台地上平坦部に位置している。標高24m前後である。調査区の現況は荒蕪地であった。そのため現地踏査においては遺物の散布を観察できる地点はなかったが、周辺の畑地において非常に稀少ではあるが縄文・弥生時代の遺物の散布が確認されている。過去の調査と現地踏査の結果から、b地点の調査では縄文・弥生時代の遺構の存在が想定された。



第30図 大山遺跡位置図 (1/5,000)

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち、これに平行する形で幅2mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張等を行い、遺構の捕捉



- | | | |
|-----|--------|------------------|
| 第Ⅰ層 | 表土層 | 黒色土主体の土。転圧されている。 |
| 第Ⅱ層 | 暗黄褐色土層 | ソフトローム漸移層。 |
| 第Ⅲ層 | 黄褐色土 | ソフトローム。 |
| 第Ⅳ層 | 黄褐色土 | ハードローム。 |

第31図 大山遺跡 b 地点遺構検出状況図

に努めた。最終的に186㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、この遺構の本調査も併せて行った。

調査期間は平成15年6月11～13日である。6月11日器材搬入、トレンチ設定、重機によるトレンチ表土除去作業、遺構検出作業、11～13日遺構調査、実測・撮影等記録作業、13日重機によるトレンチ埋め戻し作業、器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

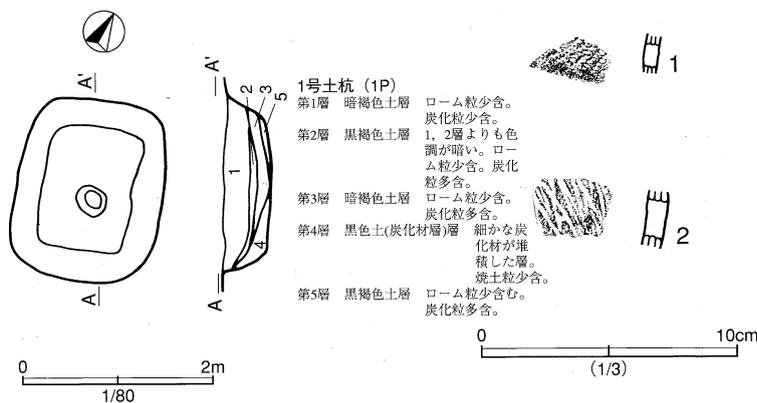
調査区の土層はⅠ層が表土、Ⅱ層がソフトローム漸移層、Ⅲ層がソフトローム層、Ⅳ層がハードローム層と分層された。表土剥ぎ作業において30cm程でソフトローム上面を確認できたため、この上面を遺構確認面として調査を行った。

調査の結果、数ヶ所の落ち込みを確認したが、拡張し精査した結果、トレンチ内において土坑を1基検出した。

この1号土坑の底部中央には皿状の浅い小ピットが伴っている。壁面や底部はところどころ焼け、底部に細かな炭化材が堆積していたことから、炭焼き窯であったと推定された。市内からは多くの中近世以降の炭焼き窯が検出されており、今回検出したものも覆土や形態的特徴が共通している。なおこの土坑からは遺物は出土していない。

旧石器の調査は、戸建住宅の建設のため行わなかった。

遺物は今回の調査では廃土中より細片1点のみ表採されただけであり、図示できるものではなかった。そのため、調査区周辺地区で表採された土器を図示する。



第32図 大山遺跡b地点 遺構・遺物

第15表 大山遺跡b地点 遺構一覧表

遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	備考
		長軸	短軸	深さ				
1号土坑	土坑	194	155	50	隅丸長方形	N-18° -W	平坦 小ピットあり	

第16表 大山遺跡b地点 出土遺物観察表

遺物No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) (復元) (遺存)			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	縄文土器		破片	—	—	—	—	—	前期後半(浮島式か)。外)縄文RL。内)ナデ。	隣表採	
2	縄文土器	深鉢か	破片	—	—	—	—	—	前期後半(浮島式)。外)条線状沈線。内)ナデ。	隣表採	

調査のまとめ

今回の調査において、炭焼き窯と考えられる土坑を1基検出したが、遺物の出土はほとんど見られなかった。a地点が新川から入り込んでいる谷津に面していることと比べると、台地の奥に立地しているため、大山遺跡の集落の広がりがこの地点までは及んでいないことが明らかとなった。しかし、鉄塔南側において縄文～弥生土器の細片と黒曜石片を2点表採することができ、遺跡のひろがり近くまできている。

(注1) 八千代市教育委員会 1987 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書集』

9. 島田込の内遺跡

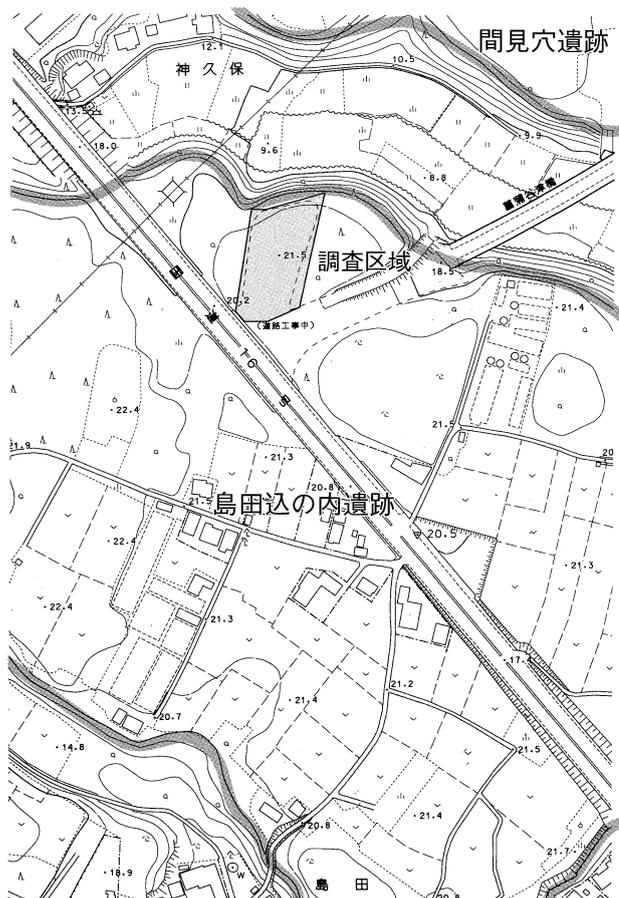
遺跡の立地と概要

島田込の内遺跡は八千代市の北部、新川西岸の台地上の平坦面一帯に位置する。台地の両側を新川に入り込む谷津が開析し、大きな舌状台地を形成している。標高は約20m～22mほどである。調査区はこの舌状台地北側の谷津が入り込んだ奥の台地上平坦面に立地している。現況は砂利敷きの資材置き場であった。

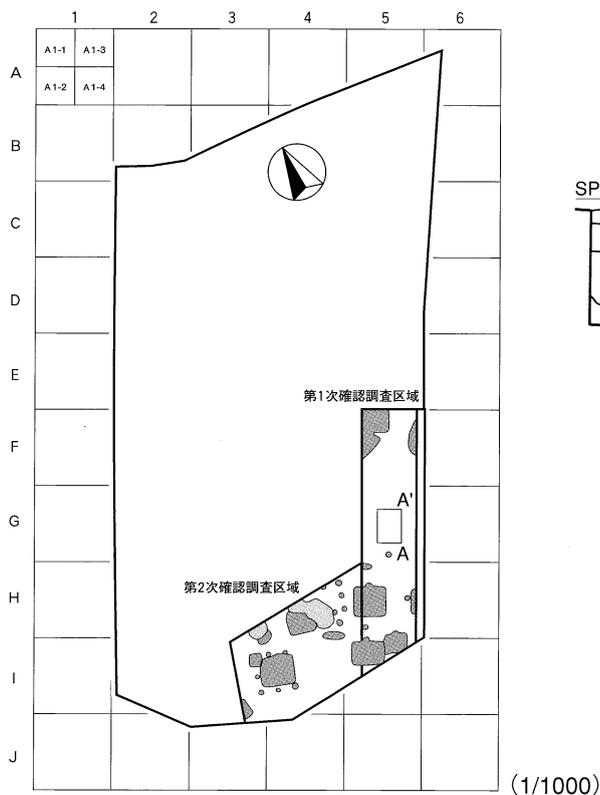
今回の調査区に隣接した道路建設部分（注1）や国道16号線側の歩道改良工事部分の区域が（財）千葉県文化財センターにより調査が行われている。

調査の方法と経過

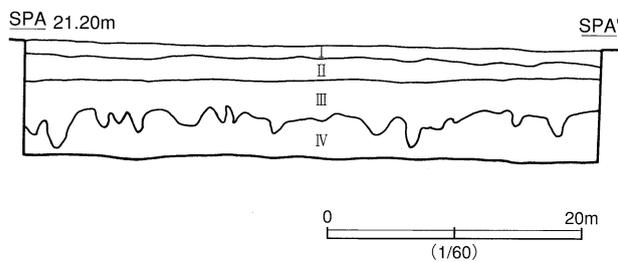
調査は調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち、これに平行する形で幅2mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの



第33図 島田込の内遺跡位置図 (1/5,000)



第34図 島田込の内遺跡確認調査 (1/1000)



- 第Ⅰ層 砕石・砂利の層 厚さ10～20cmで照会地全体に敷きつめられている。
- 第Ⅱ層 暗褐色土層 非常に固くしまっている。黒色土とロームが混じり合って、転圧されたもの。
- 第Ⅲ層 ソフトローム層 (暗)黄褐色土層。上位は非常に固くしまっている。
- 第Ⅳ層 ハードローム層 (暗)黄褐色土。

拡張等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に対象面積240㎡のうち199.50㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。また、引き続き本調査を実施する予定であったため、トレンチの埋め戻しは行わなかった。

第1次確認調査の調査期間は平成15年6月18～24日である。6月18日器材搬入、トレンチ設定、重機によるトレンチ表土除去作業、18～20日遺構検出作業、20・23日実測・撮影等記録作業、24日器材撤収により調査を終了した。

第1次確認調査終了後、事業者の開発計画の変更により、170㎡について追加で確認調査を実施することとなった（第2次確認調査）。今回は遺構の絶対数を把握するため、調査区全面の表土除去による確認調査を実施した。また、引き続き本調査を実施する予定であったため、埋め戻しは行わなかった。

調査期間は平成15年7月15～18日である。7月15日器材搬入、調査区設定、16日重機によるトレンチ表土除去作業、16・17日遺構検出作業、17日実測・撮影等記録作業、18日器材撤収により調査を終了した。

2回の確認調査の結果を受け事業者と協議した結果、再度開発計画の変更を行い、最終的に184㎡について本調査を実施することとなった。調査対象遺構は、奈良平安時代住居跡4軒、土坑1基である。その他に検出された遺構については、本調査を行わず、現状で保存することとなった。

本調査の調査期間は平成15年7月28日～8月22日である。7月28日器材搬入、28日～8月20日遺構調査及び実測・撮影等記録作業、21日重機による埋め戻し作業、21・22日器材撤収により調査を終了した。

第17表 島田込の内遺跡確認調査遺構一覧表

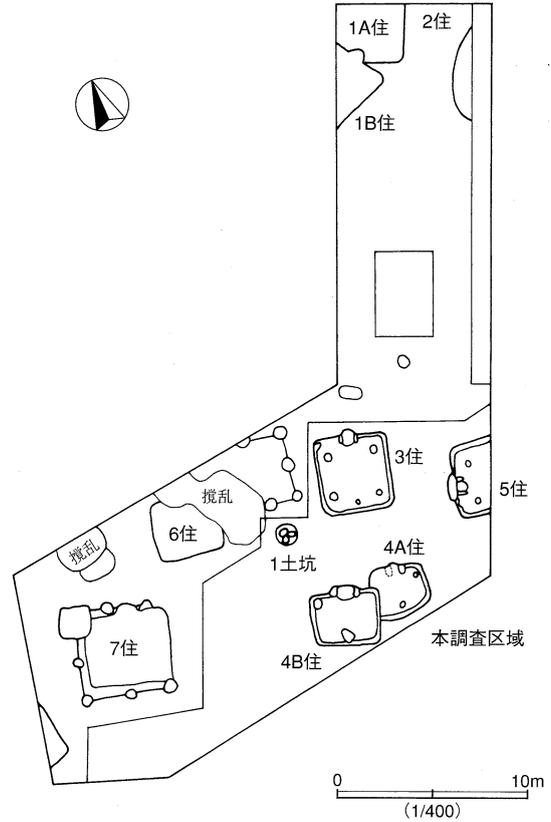
遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	カマド・炉	時代	備考
		長軸	短軸	深さ					
1号A住	竪穴住居跡	400以上	350以上	約30	推定方形	推定N-22°-E	未確認	奈良・平安	現状保存
1号B住	竪穴住居跡	350以上	400以上	約30	推定方形	推定N-66°-E	カマド北東壁	奈良・平安	現状保存
2号住	竪穴住居跡	500以上	—	約10	推定楕円形	—	—	弥生後期～古墳前期	現状保存 遺物が検出されなかったため、 遺構の形状より時期を判断
3号住	竪穴住居跡	400	396	40	隅丸方形	N-16°-E	カマド北壁	奈良・平安	調査（記録保存）
4号A住	竪穴住居跡	推定280	現存295	20	不整形	N-13°-E	カマド北東隅と北壁の2ヶ所	奈良・平安	調査（記録保存）
4号B住	竪穴住居跡	275	372	35	長方形	N-23°-E	カマド北壁	奈良・平安	調査（記録保存）
5号住	竪穴住居跡	200以上	現存405	30	隅丸方形	N-76°-W	カマド西壁	奈良・平安	調査（記録保存）
6号住	竪穴住居跡	約400	約350	—	長方形か	N-13°-E	未確認	奈良・平安	現状保存
7号住	竪穴住居跡	約460	約450	—	方形	N-18°-E	カマド北壁	奈良・平安	現状保存
8号住	竪穴住居跡	300以上	150以上	—	方形か	—	—	奈良・平安	現状保存
掘立	掘立柱建物	約450	約450	—	2間×2間	推定N-14°-E	—	奈良・平安	現状保存
掘立	掘立柱建物	350以上	—	—	2間+X推定2間+	推定N-9°-E	—	奈良・平安	現状保存
遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底部形状	時代	備考
		長軸	短軸	深さ					
1号土坑	土坑	125	120	35	円形	—	段差あり	奈良・平安	調査（記録保存）
土坑	土坑	約60	—	—	円形	—	—	奈良・平安	現状保存
土坑	土坑	約120	約60	—	楕円形	—	—	奈良・平安	現状保存
土坑	土坑	約200	—	—	楕円形	—	—	縄文	現状保存
土坑	炭焼窯	約160	約170	—	方形	—	—	近世か	現状保存

調査の概要

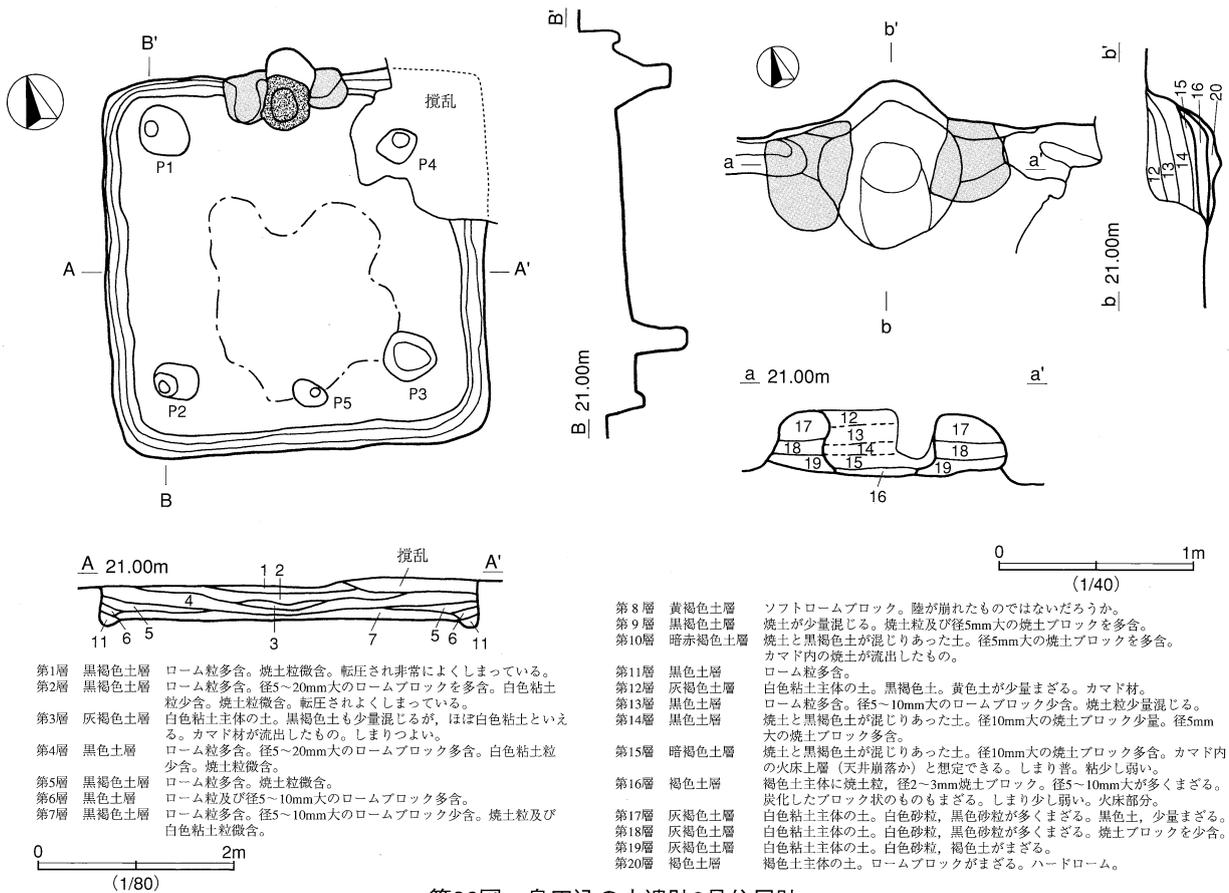
調査区の土層は砂利敷きの資材置き場であったこともあり、I層が碎石と砂利の盛土層で硬く転圧されていた。II層は暗褐色土層であったが、転圧の影響が強く残っていた。III層はソフトローム層で硬くしまっていた。そして、IV層にはハードローム層が認められた。表土を削平して資材置き場としていたが、ソフトローム上面を遺構確認面として調査を行うことができた。

2回の確認調査により、住居跡10軒、掘立柱建物2棟、土坑8基を検出している。確認調査時の遺構の検出状況は第17表に示す。

確認調査区の南東側の一部に本調査を実施した。本調査は4軒の住居跡と土坑1基を対象としている。



第35図 島田込の内遺跡遺構配置図



第36図 島田込の内遺跡3号住居跡

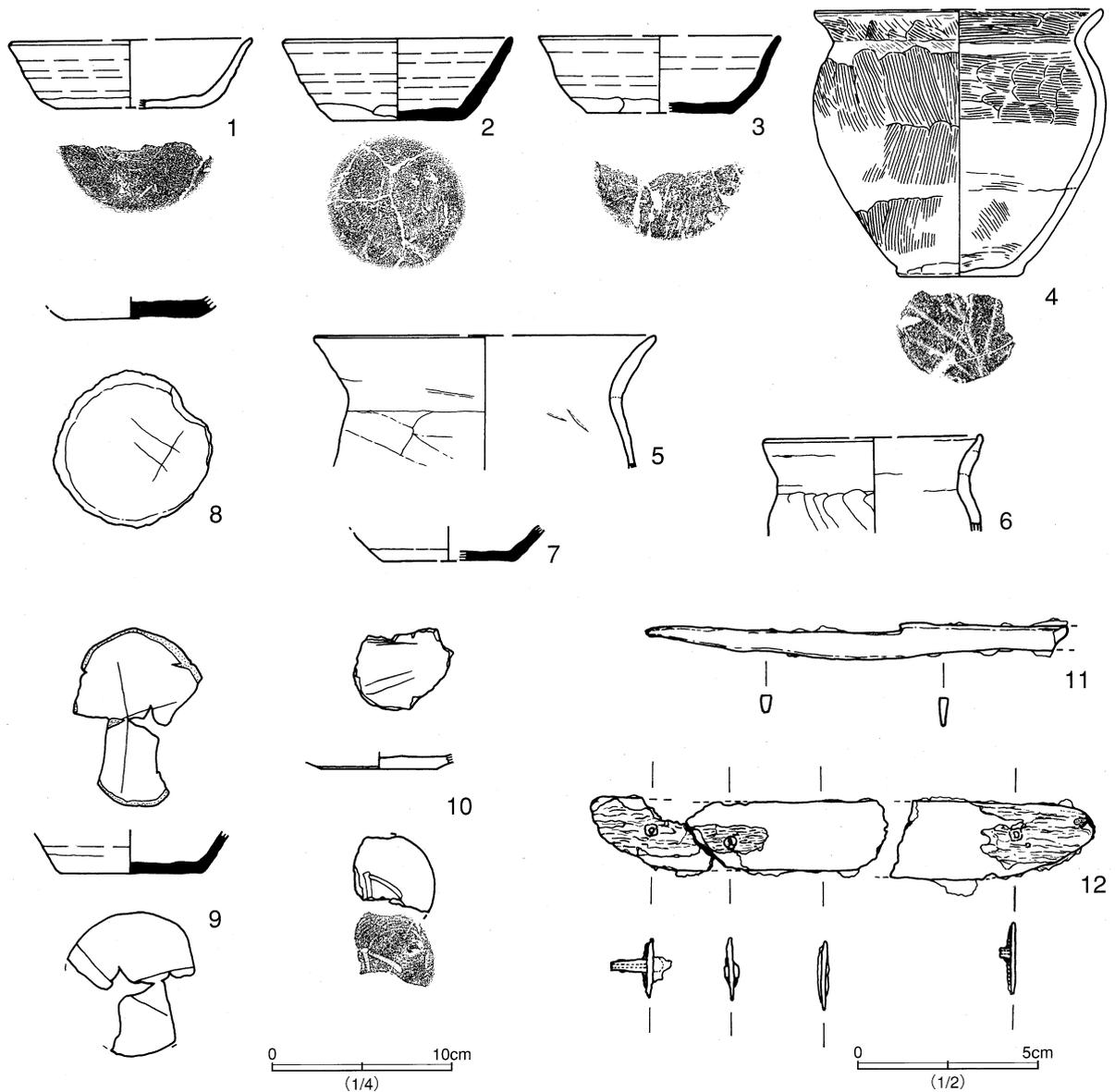
3号住居跡 (D3)

本調査が行われた竪穴住居跡の中では最も規模の大きなものである。覆土は自然埋没している。特にカマドから住居中央までカマド材に使われていた白色粘土が流失しているのが目立った。

住居の構造は周溝がしっかりした掘り込みで全周している。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は中央でやや窪むもののほぼ平坦である。中央部分は良く踏み固められており、硬化している。床はロームと黒褐色土が混ざり合った貼り床であった。床面からピットは5基検出された。P1～P4は主柱穴であり、住居の隅に寄せて作られている。P5は出入り口ピットであった。深さはP1が60cm, P2が55cm, P3が60cm, P4が概ね65cmであった。P5の深さは40cmほどである。

カマドは良好な状態で検出されている。袖はしっかりした白色粘土が主体で作られており、火床中央も真っ赤に赤色焼土化していた。火床には掘り込みが認められず床と同じ高さをカマドの火床としていた。

竪穴住居跡内からの遺物の出土は、50点ほどで住居の大きさに比較すると多くはない。出土傾向は北西隅側と南東隅側にややまとまっている。2 (第37図) はカマド手前の床面から10cm浮いた状態で出土している。また、鉄器は床面直上で出土している。



第37図 島田込の内遺跡 3号住居跡出土遺物

第18表 島田込の内遺跡3号住居跡出土遺物観察表

遺物 No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) (復元) [遺存]			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	土師器	坏	口辺部1/4 ～底部1/2	3.9	〈13.8〉	〈8.4〉	淡赤褐色一 部暗褐色	雲母 白色粒	ロクロ成形。切離し不明。底部全面回転ヘラ削り調整。体部下端ヘラ削り。底部外面に刻書。	7.9	
2	須恵器	坏	口辺部2/3～ 底部全周	4.7	13.0	7.3	淡青灰色	白色粒 雲母 石英	ロクロ成形。切離し不明。底部全面と体部下端、手持ちのヘラ削り調整。		
3	須恵器	坏	口縁～ 底部4/5	4.4	〈13.6〉	〈8.2〉	暗灰色～ 淡橙灰色	長石多含。 雲母 白色粒	ロクロ成形。切離し不明。底部と体部下端手持ちヘラ削り調整。内外ロクロなで 常陸産	3区、14、22	
4	土師器	小型甕	口辺部1/4 ～底部	[15.2]	〈16.4〉	〈7.2〉	淡橙褐色	白色粒 砂粒	口辺部内外ハケ目、横なで。胴部外面斜位ハケ目調整。内面ハケ目調整だが、上半と下半のみ。底部木葉痕	49、110、5、 4区	
5	土師器	甕	口辺部1/5～ 胴上半部	[7.7]	〈19.2〉		橙褐色	雲母 白色粒 砂粒	口辺部内外横なで。胴部外面横位～斜位ヘラ削り。内面なで。ヘラなで。武威型甕	一括	
6	土師器	小型甕	口辺部1/4～ 胴部上半	[5.5]	〈12.4〉		淡橙褐色	雲母 白色粒	口辺部内外横なで。胴部外面縦位のヘラ削り。内面なで	17	
7	須恵器	坏	底部～ 体部1/3	[2.0]	—	〈7.6〉	淡青灰色	雲母 白色粒	ロクロ成形。底部切離し不明。底部全面手持ちヘラ削り。体部下端ヘラ削り。	3区	
8	須恵器	坏	底部全周	[1.1]	—	7.7	灰色	長石 白色粒	ロクロ成形。切離し不明。底部全面と体部下端ヘラ削り調整。外面に「卍」の線刻	16	
9	須恵器	坏	底部1/3	[2.4]	—	〈8.0〉	淡青灰色	雲母、 長石多含	ロクロ成形。切離し不明。底部全面と体部下端ヘラ削り調整。底部外面と内面に「X」の刻書	3区、4区	
10	土師器	坏	底部1/3	[0.8]	—	〈6.6〉	淡橙褐色	雲母 白色粒 小石粒	ロクロ成形。右回転系切離し。周縁と体部下端ヘラ削り調整。内面に2ヶ所の線刻。外面にヘラ書き	4区	
11	鉄器	刀子	茎部～ 刃部	茎部長7.2cm 全長 [11.9]	茎部幅5～8mm 厚さ2.5mm	刃部幅8mm 厚さ2.5mm	重量 8.4g		先端部欠損	3	
12	鉄器①	穂摘み具か		幅 2.1	長 [5.7]		重量 8.9g		1個体と想定される。想定13.1cm、 鉄留めにより固定している(4所)。 幅は2.1cm。木質部が遺存する。	2	
12	鉄器②	穂摘み具か		幅 [1.7]	長 [3.5]		重量 2.7g				
12	鉄器③	穂摘み具か		幅 [1.7]	長 [5.7]		重量 5.3g				

4号 A 住居跡 (D4A)

4号住居はAとBの2軒の重複である。A住居跡は転圧と攪乱が激しく、さらに遺構の深さが浅いこともあり、確認面での形状は明確ではなかった。そのため、当初AのほうがBよりも古いものとして調査していたが、出土遺物などからAのほうが新しい可能性があったため、あらためて重複部分の再調査を行った。

覆土が浅く、かなり攪乱を受けているため判然としないが、自然埋没とみられる。

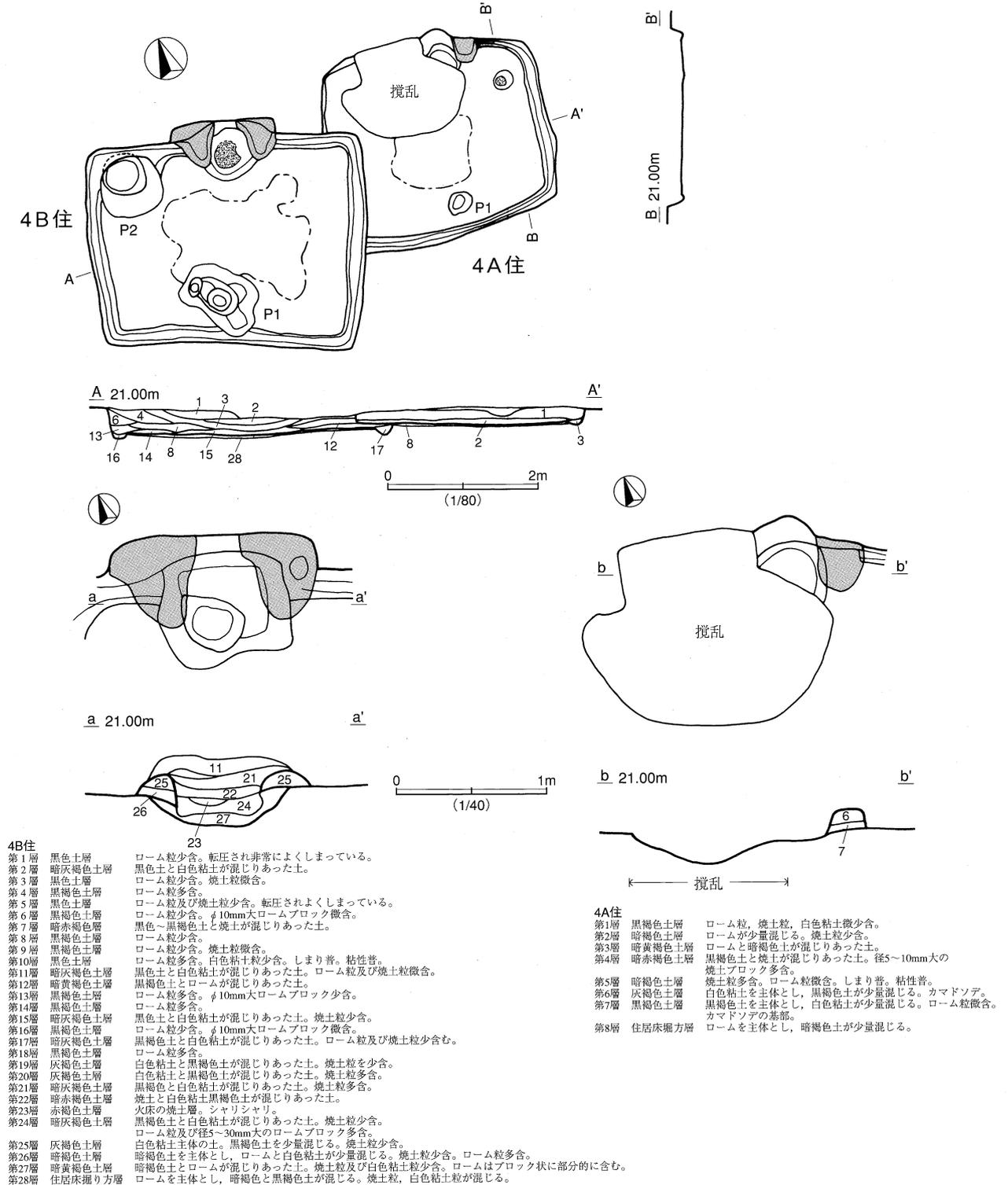
床面は平坦であり、ロームを主体とし暗褐色土が少量混じる薄い貼り床層が確認できた。壁面はローム層を垂直に立ち上げている。また、周溝は浅い掘り込みで全周していない。ピットは出入り口施設と考えられるP1が検出されている。

第19表 島田込の内遺跡4号A住居跡出土遺物観察表 (1)

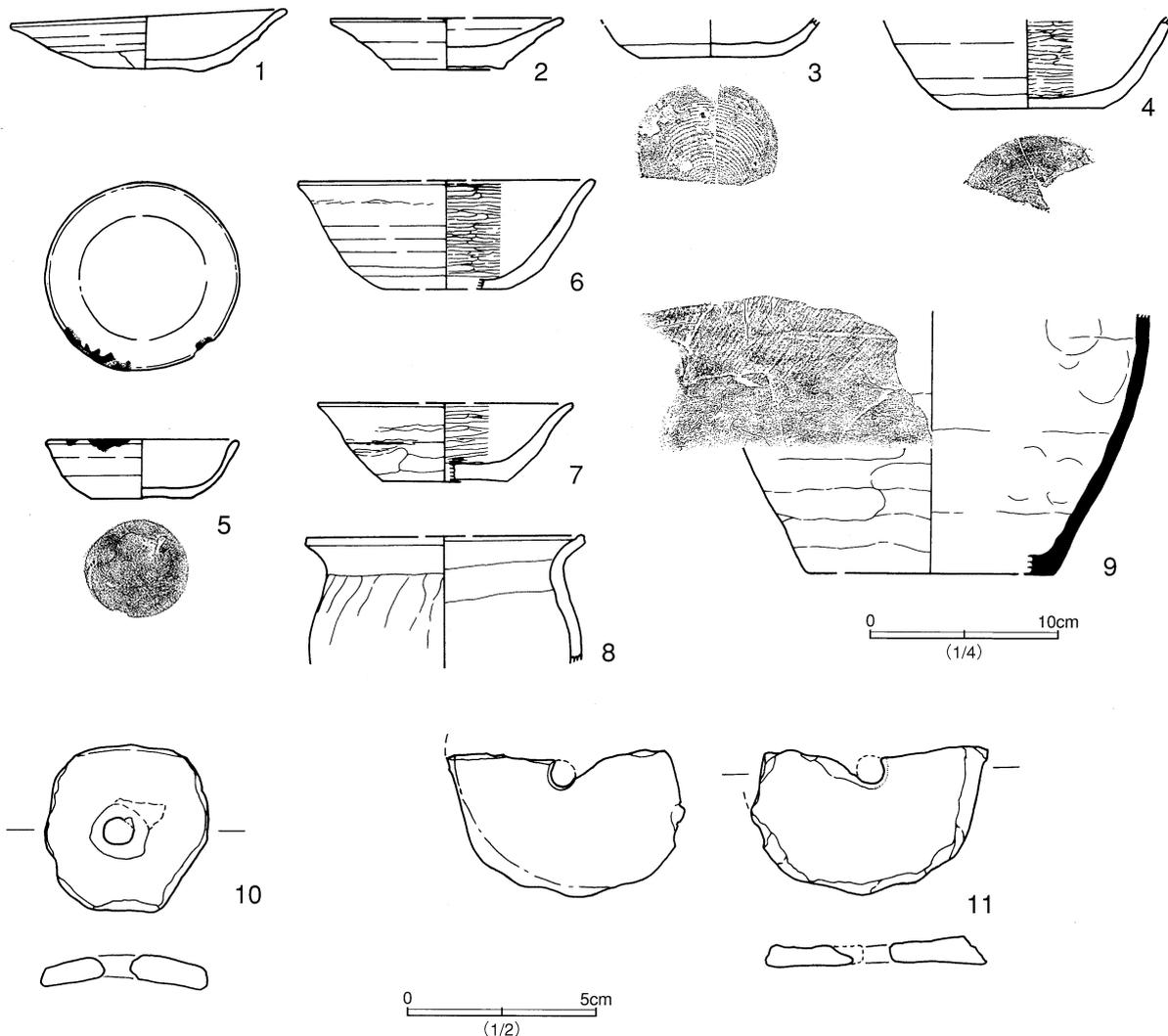
遺物 No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) (復元) [遺存]			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	土師器	皿	ほぼ完形	3.4	14.6	5.6	暗褐色	白色粒 雲母 石英 砂粒	ロクロ成形。底部及び体部下端回転ヘラ削り。粗雑な作風切離し不明。	4	
2	土師器	高台付皿	口辺部～ 底部	2.8	〈12.6〉	〈6.0〉	橙褐色	雲母	ロクロ成形。回転系切り離し後、貼り付け高台、外面ロクロなで。内面なで	3区	
3	土師器	坏	底部～ 全周	[2.0]	—	〈7.5〉	橙褐色	白色粒 雲母 砂粒	ロクロ成形。回転系切離し後、周縁と体部下端回転ヘラ削り調整。	D4A-8-3区	
4	土師器	坏	体部下半 ～底部	[4.8]	—	〈8.2〉	(内)(外) 暗褐色	雲母	ロクロ成形。回転系切離し後、周縁と体部下端回転ヘラ削り調整。(外)タール、煤、(内)黒色処理か。	D4A-3区	

カマドは2基検出されている。北東隅に造られたカマドは火床のみの検出で、上部の構造部分が撤去された後のものであった。北壁側のカマドは大きな攪乱を受けていたため右側半分しか残存していなかった。袖は小さいながらもしっかりしており、火床はロームをそのまま掘り込んで使用し、掘り込みが浅く、赤色化している部分は認められなかった。天井部の構造は不明である。

出土遺物は17点であり多くないが比較的良好な資料が出土している。出土遺物から9世紀中ごろと推定される。



第38図 島田込の内遺跡4号A B住居跡



第39図 島田辺の内遺跡4号A住居跡出土遺物

第20表 島田辺の内遺跡4号A住居跡出土遺物観察表 (2)

遺物 No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) 〈復元〉〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
5	土師器	坏	ほぼ完形	3.2	10.2	5.3	橙褐色	赤色スコリヤ 白色粒 雲母粒	ロクロ成形。回転系切離し後、周縁と体部下 端回転ヘラ削り調整。灯明皿として使用。3 ヶ所に芯端部分のタール状痕跡が見られる。	3	
6	土師器	坏	口辺部1/3 ～底部	5.9	〈15.8〉	〈7.2〉	暗茶褐色 ～赤褐色	雲母 白色粒 小石粒	ロクロ成形。底部及び体部下位～ 下端回転ヘラ削り。切離し不明。内 面黒色処理か。外面煤、タール付着	5	
7	土師器	坏	口辺部～ 1/2弱 底部	4.25	〈13.7〉	〈6.6〉	橙褐色	白色粒 雲母	ロクロ成形。底部と体部中～下端回転ヘ ラ削り。切離し不明。外面ロクロ目に重複し て横位ヘラ磨き。内面横位ヘラ磨き。	2	
8	土師器	小型甕	口辺部1/4 ～胴上半部	〔7.0〕	〈14.6〉	—	暗赤褐色	白色粒 雲母 砂半々	口辺部内外横まで。口縁端部、微弱なつまみ上 げ。胴部外面縦位ヘラ削り。内面ヘラなどで。 二次焼成による器外面の荒れ見られる。	カマド内	
9	須恵器	甕	胴部1/3～ 底部	〔14.1〕	—	〈13.3〉	淡橙灰色	少量の雲 母 赤色 スコリヤ	輪積み叩き締め成形。胴部外面斜 位平行叩き目、下位～下端横位ヘ ラ削り。内面当て具痕となで調整	2,3,5,16,4区	
10	土製品	紡錘車	土師器杯口辺～ 体部の再利用品	長 4.5	幅 4.3	厚 0.6	橙褐色	雲母 白色粒 赤色スコリヤ	孔径8×7mmのいびつな円形。重 量13.4g。ほぼ完存。ロクロ成形。 内外ロクロなで。	D4A3区 D4B2区	
11	土製品	紡錘車	土師器杯 底部の再利用品 1/2欠	長 6.4	幅 [3.9]	厚 0.8	橙褐色	雲母 白色粒 赤色スコリヤ 長石	推定孔径7mmの円形。重量18.1 gで1/2遺存。ロクロ成形。底部手 持ちヘラ削り調整。	1	

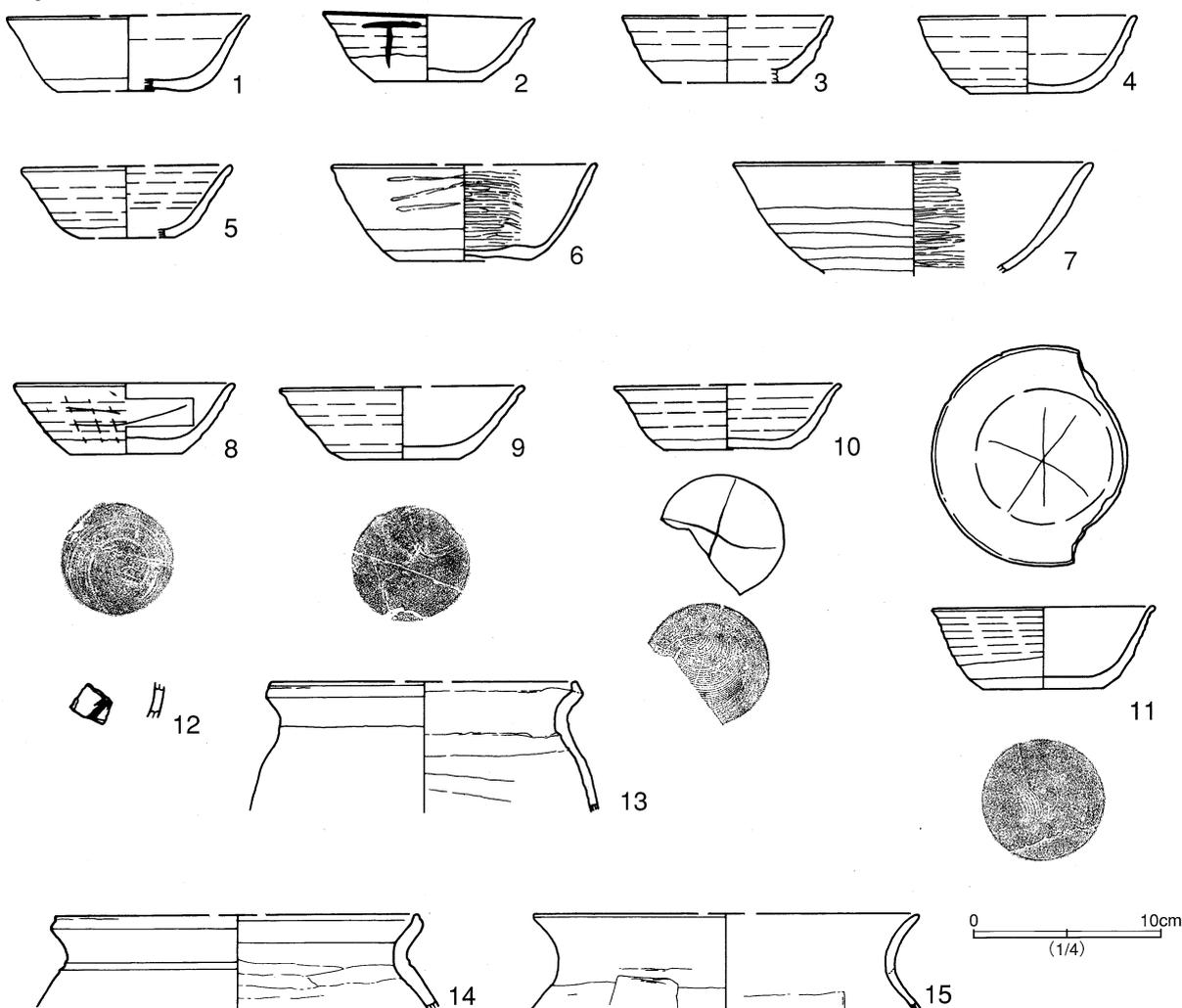
4号B住居跡 (D4B)

住居の覆土は堆積状態から、自然埋没と判断される。カマドを作るための粘土の流出がみられた。覆土下層には焼土の堆積がみられ、覆土中において火が使用されたものと考えられる。

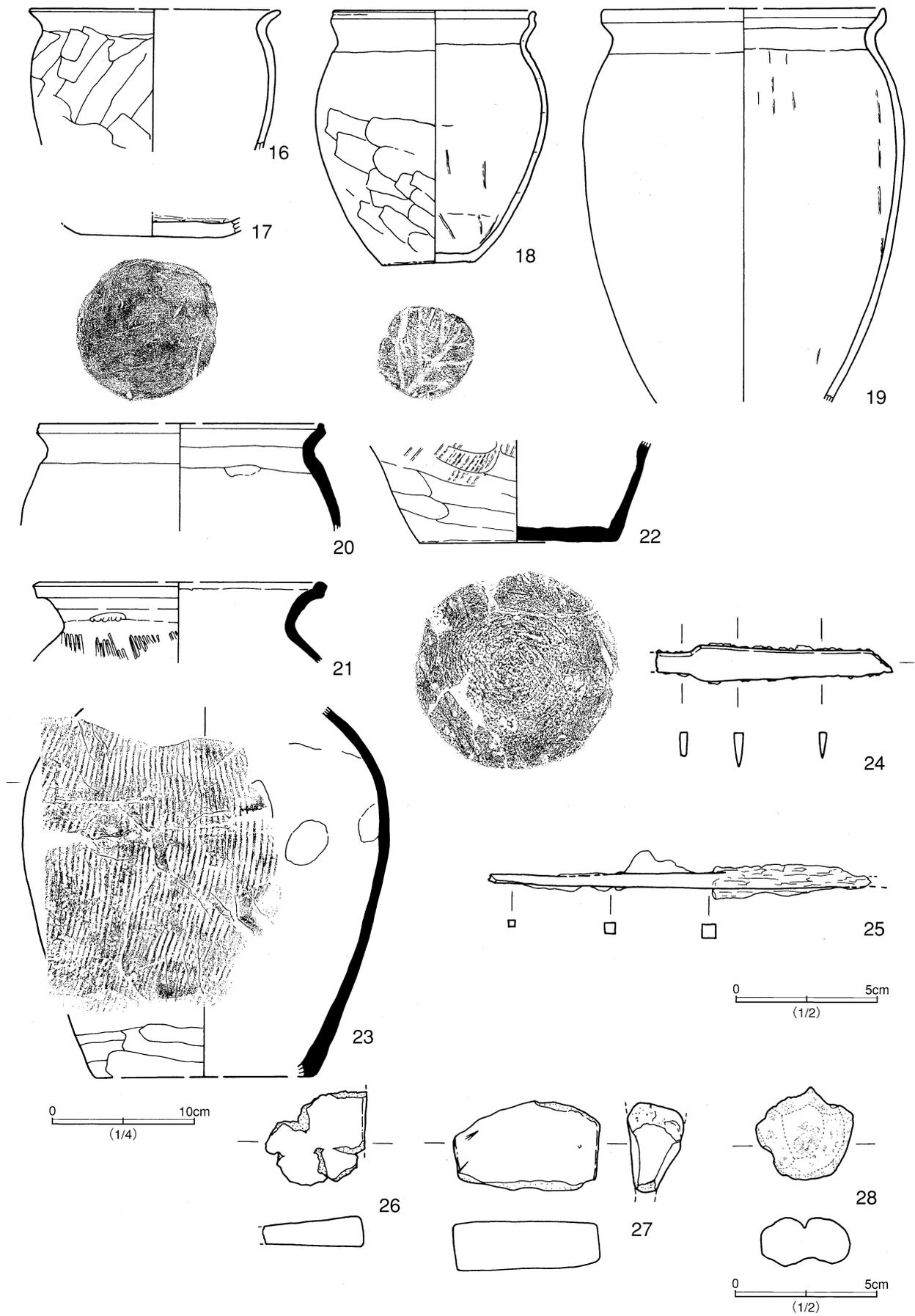
住居の構造は壁面がほぼ垂直に立ち上がる。床面は多少凹凸がみられ、西側に緩やかに下がる。床中央一帯には極めて硬い硬化面がみられ、踏み固められているのが良く分かる。しかし、その中心部分だけは軟弱で、窪みがみられる。床はローム土が主体で暗褐色土と黒褐色土が混入する貼り床で形成されていた。床面からピットは2基検出されている。P1は出入り口施設であり、不整形であった。何度か掘りなおされているようである。P2はカマド左脇で検出された貯蔵穴であった。深さは床面から約60cmほどであった。内部は自然埋没しており、貯蔵穴の上層から土器片が多く出土している。

カマドは両袖が残っていたものの、天井部などは確認できなかった。火床は浅い掘り込みで中央は赤色焼土化していた。カマドの掘り方は袖の基部が大きく掘り込まれて作られており、火床もさらに20cmほど深いピットとなった。

遺物は100点以上出土した。調査した4軒中最も多い。鉄製品や砥石なども含んでいる。また、カマド内部からは完形品がまとまって出土し、2, 8 (第40図) は右側の袖上から2枚重なって出土した。18 (第41図) はカマド内部から横位で出土。支脚も18の脇から直立した状態で出土している。18も支脚もしまりの弱い土層の上にのせられているようであった。袖上の2枚の坏もあわせて意図的な行為のようにもみえる。



第40図 島田込の内遺跡4号B住居跡出土遺物 (1)



第41図 島田込の内遺跡4号B住居跡出土遺物 (2)

第21表 島田込の内遺跡4号B住居跡出土遺物観察表(1)

遺物No.	種類	器種	部位	計測値(cm)〔復元〕〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	土師器	坏	口辺1/6～ 底部2/3	4.1	〈13.2〉	〈7.3〉	淡橙褐色	雲母 白色粒 砂粒	ロク口成形。回転糸切り離し後、周縁と体部下端回転ヘラ削り調整。内外面煤付着。	78、80、 77、79	
2	土師器	坏	略完形	3.9	11.4	5.8	淡褐色	雲母 白色粒 赤色スコリヤ	ロク口成形。切離し不明。底部全面と体部下端回転ヘラ削り調整。体部外面下位で「丁」の墨書	94	内外面煤 付着。
3	土師器	坏	口辺1/3～ 底部1/6	3.7	〈11.4〉	〈7.1〉	淡橙褐色	雲母 砂粒	ロク口成形。切り離し不明。底部前面と体部下端回転ヘラ削り調整。	74、21、3区	
4	土師器	坏	口辺1/6～ 底部1/3	4.2	〈11.6〉	〈6.1〉	淡橙褐色	雲母 長石 赤色スコリヤ 砂粒	ロク口成形。切離し不明。底部全面と体部下端回転ヘラ削り調整	3区	
5	土師器	坏	口辺～底 部1/5	3.9	〈11.4〉	〈5.2〉	淡橙褐色	白色粒 雲母 砂粒	ロク口成形。体部下端ヘラ削り調整。	P2内	
6	土師器	坏	口辺1/8～ 底部全周	2.5	〈14.2〉	7.2	外面暗褐色 内面黒色	雲母 赤色スコリヤ 白色粒	ロク口成形。切離し不明。底部と体部下位、回転ヘラ削り調整。内面は横位ヘラ磨き後、炭素吸着による黒色処理。	1区、4	
7	土師器	坏	口辺～体 部1/2	[6.0]	19.2		内面黒褐色 淡橙褐色 外面淡橙褐色	白色粒 雲母粒	ロク口成形。体部中央～下半回転ヘラ削り調整。内面でない横位ヘラ磨き後、黒色処理(炭素吸着)。個体として破損後二次焼成受ける。	99、43、98、 D4A-11-3区	
8	土師器	坏	完形	3.9	11.9	6.0	淡橙褐色	雲母 白色粒 赤色スコリヤ	ロク口成形。切離し不明。底部全面回転ヘラ削り調整。体部下半も回転ヘラ削り。体部外面に線刻がある。	95	
9	土師器	坏	口辺1/5～ 底部全周	3.9	〈13.1〉	6.3	淡橙褐色	白色粒 雲母 砂粒	ロク口成形。切離し不明。底部全面と体部下端回転ヘラ削り調整。	5	
10	土師器	坏	口辺～底 部1/2弱	3.5	〈12.0〉	6.7	淡橙褐色	黒色粒 雲母 白色粒 赤色スコリヤ	ロク口成形。回転糸切り離し後、周縁と体部下端回転ヘラ削り調整。底部外面に「X」のヘラ書。	27・3区	
11	土師器	坏	口辺部1/2 強～底部 全周	4.4	12.0	6.4	淡橙褐色	黒色粒 赤色スコリヤ 雲母 白色粒	ロク口成形。回転糸切り離し後、周縁と体部下端回転ヘラ削り調整。底部内面に「*」の線刻	10、71、2区	
12	土師器	坏	体部片	—	—	—	外面淡橙褐色 内面黒褐色	雲母 白色粒	ロク口成形。外面口墨書 内面黒色処理(炭素吸着)	2区	墨書
13	土師器	甕	口辺部～ 胴上半部 1/3	[7.1]	〈16.2〉	—	淡橙褐色 黒斑	雲母 石英 白色粒 長石	輪積み成形。口縁端部つまみ上げ。口辺部内外横などで。胴部外面などで。内面ヘラなどで。	P2、3区	
14	土師器	甕	口辺部～ 胴上半部 1/4	[5.2]	〈20.6〉	—	淡茶褐色	雲母 石英 多含	口縁端部つまみ上げ。口辺部内外横などで。胴部外面などで。内面ヘラなどで。	61、P2	
15	土師器	甕	口辺部～ 胴上半部 1/4	[5.2]	〈20.6〉	—	橙褐色	白色粒 赤色スコリヤ	輪積み成形。口辺部内外横などで。胴部外面横位ヘラ削り 内面ヘラなどで。武蔵型甕	92-85	
16	土師器	小型甕	口辺部1/4 ～胴部	[10.1]	〈17.8〉	—	淡褐色 黒斑	雲母の 小片少量、 緻密	輪積み成形。口辺部内外横などで。胴部外面斜位及び横位ヘラ削り内面などで調整	51、24、 62、3区	
17	土師器	甕	底部全周	[1.5]	—	10.0	淡橙褐色	雲母 白色粒 赤色スコリヤ 砂粒	底部～胴部下端外面はヘラ削り調整。内面はヘラ磨き調整。	28	
18	土師器	小型甕	ほぼ完形	18.4	〈14.5〉	6.7	暗褐色～ 茶褐色	雲母片 白色粒	輪積み成形。口縁部直立につまみ上げ。口辺部内外横などで。胴部外面上半などで。中央～下半横などで。斜位ヘラ削り。内面ヘラなどで。底部木葉痕。外面煤と二次焼成の器面残れ。	38、10、21、 96、2区	
19	土師器	甕	口辺部～ 胴下半部 1/3	[28.4]	〈20.2〉	—	淡橙褐色	長石多含 雲母 石英	口縁端部直立したつまみ上げ。輪積み成形。口辺部内外横などで。胴部外面ヘラ削り後などで。内面ヘラなどで。	29、39、 1区、4区	
20	須恵器か	甕	口辺部～ 胴上半部 1/5	[7.8]	〈20.0〉	—	淡茶灰褐色	雲母 白色 粒 長石 赤色スコリヤ	須恵器としての判断難しい。口縁端部つまみ上げ。口辺部横などで。胴部内外などで。	26、3区	

第22表 島田込の内遺跡4号B住居跡出土遺物観察表(2)

遺物No.	種類	器種	部位	計測値(cm)〈復元〉〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
21	須恵器	甕	口辺部～胴上半部1/8	[5.8]	<20.2>	—	淡灰褐色	雲母 白色粒 小石粒	口縁端部貼り付けによるつまみ上げ。口辺部(内)横なで。胴部(外)縦位平行叩き目。(内)当て具痕	3区	
22	須恵器	甕	胴下半部～底部全周	[7.3]	—	14.2	外面黒茶褐色 内面橙褐色	白色粒 多含 石英	輪積み叩き締め成形。外面横位ヘラ削りと平行叩き目。内面当て具痕となで。底部に「一」「二」のヘラ書き。乾燥時の台部と考えられる	53	
23	須恵器	甕	胴上半部～胴下半部	[26.7]	—	<15.6>	外面灰白色 内面淡橙褐色	雲母多含 長石 石英 白色粒	輪積み叩き締め成形。外面縦位平行叩き目、下半横位ヘラ削り内面当て具痕、なで。		
24	鉄器	刀子		長 [8.5]	幅 茎部 0.8cm	刃部 0.9～1.2cm	峰部幅 0.2～0.3	重量 7.1g	茎部先端部欠損	P2一括 表採	
25	鉄器	錐か	基部、先端部欠損	長 [13.7]	幅 先端部 2.5mmの方形断面	中央部 4mmの方形断面	茎部 5mmの方形断面	重量 15.3g	木質部遺存。おそらく茎部に相当する部分と考えられる。	76	
26	石器	砥石		長 [3.4]	幅 [3.1]	厚 1.1	重量14.4g		一辺のみ遺存。	一括	
27	石器	砥石		長 3.2	幅 [5.3]	厚 1.8	重量37.3g		両端欠損 四面において使用痕	一括	
28	石器	砥石		長 3.4	幅 3.5	厚 1.8	重量5.4g		部分的に面として磨られている。	一括	

5号住居跡 (D5)

住居跡の覆土の状況から自然埋没と判断される。南側の中位に焼土が含まれていたが、外部から流れ込んだものと判断された。

東側の半分が調査区外に出ているが、カマドが西壁に作られていたため、住居の半分しか調査していないながら良好な資料が得られた。また、調査区際であったため、浅い住居であったにもかかわらず、転圧の影響や攪乱も受けていなかった。

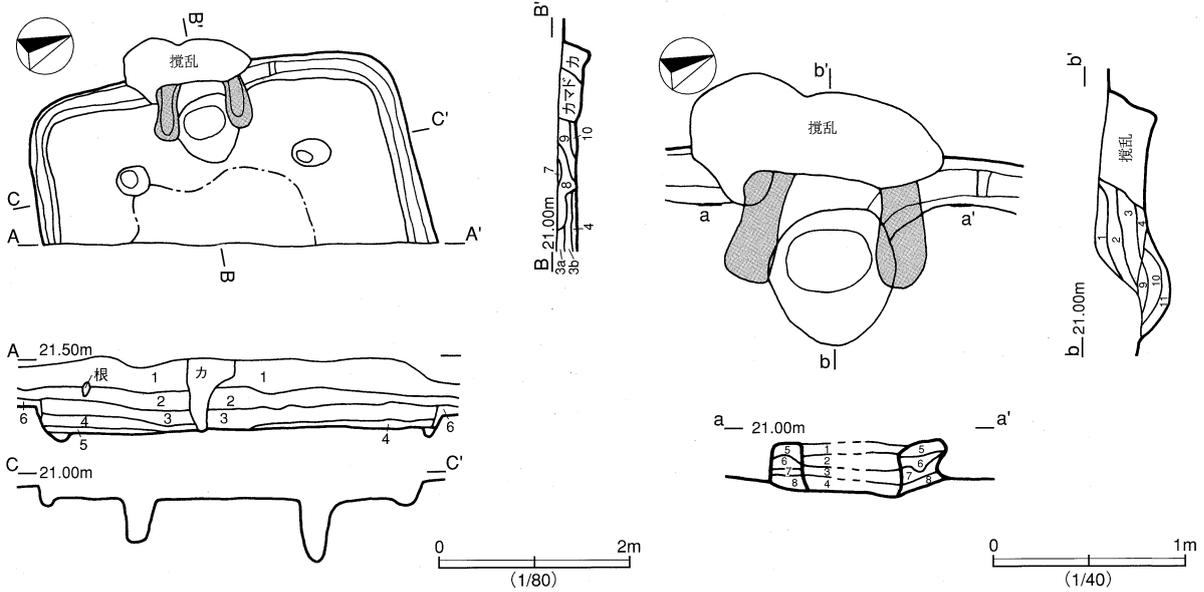
壁はほぼ垂直に立ち上がり、周溝は検出部分では全周している。床は平らなソフトロームの地床できており、貼り床はみられなかった。住居の中央部分が良く踏み固められており、硬化面が形成されていた。床面ではピットが2基検出され、両方とも主柱穴と考えられた。深さは床面から約50cm～60cmほどであった。半裁した結果、引き抜かれたものではなく、立ち腐れしたことが判明した。

カマドは煙道部に攪乱を受けている以外は良好な状態であった。袖は白色粘土を主体としており、しっかりとしたものであった。火床は浅く掘り込まれており底部の一部が赤色焼土化していた。

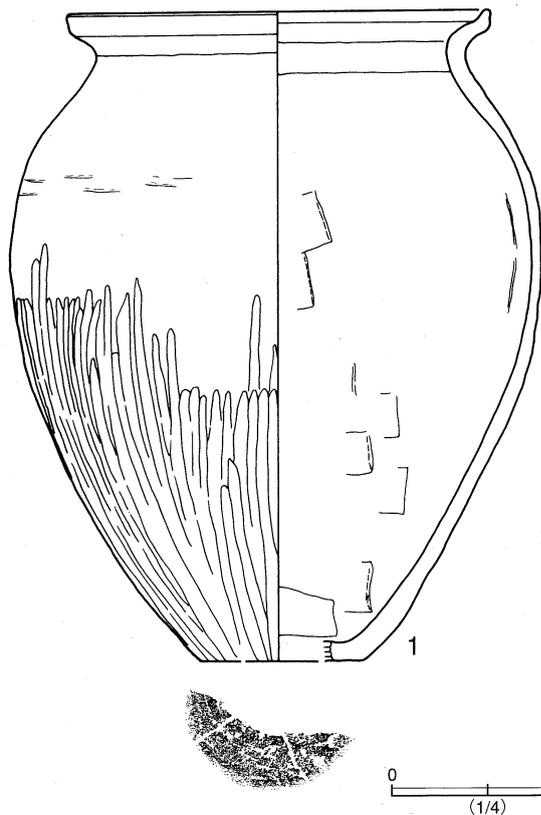
出土遺物は35点ほどで多くはないが、カマドの南側から遺物のほとんどが出土している。特に甕の出土が多い。

第23表 島田込の内遺跡5号住居出土遺物観察表

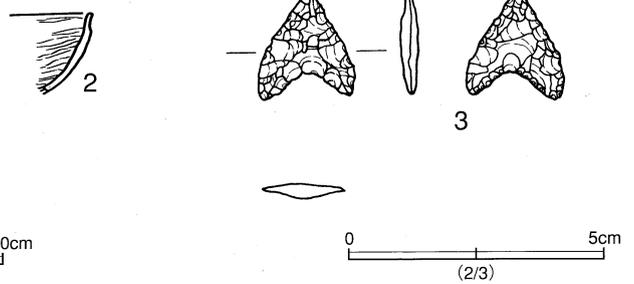
遺物No.	種類	器種	部位	計測値(cm)〈復元〉〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	土師器	甕	ほぼ完形 底部1/3	34.4	22.2	8.5	淡橙褐色	雲母 白色粒 長石	輪積み成形。口縁端部つまみ上げ。口辺部内外横なで。胴部外面上半部縦位ヘラなで。中央～下端縦位ヘラ磨き。内面横位ヘラなで。		
2	土師器	坏	口辺部～体部	—	—	—	橙褐色	雲母片 赤色スコ リヤ	輪積み成形。口辺部外面横なで。体部外面横位ヘラ削り 内面横位ヘラ磨き。	22	
3	石器	石鏃	完形	長 2.15	幅 1.9	厚 0.3	重量1.0g		黒曜石。無茎で挟りがみられる。両面押圧剥離により仕上げる。	2区 一括	



第42図 島田込の内遺跡5号住居跡



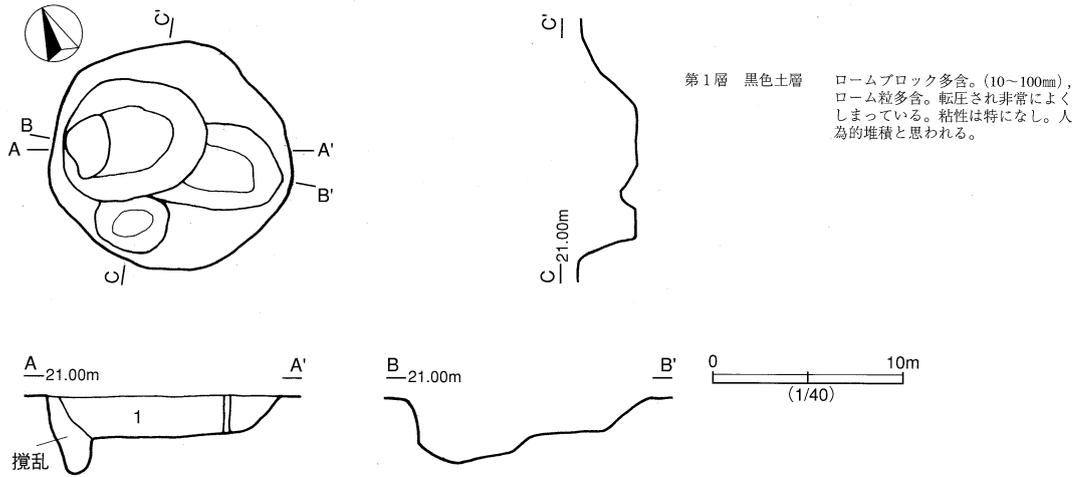
- 5D住
- 第1層 腐食土層 黒色土に植物根が多量にまざる。
 - 第2層 黒色土層 黒色土主体に褐色土がまざる。
 - 第3 a層 黒色土層 黒色土主体に褐色土、ローム粒が若干まざる。部分的に黒色の密度が濃くなる。
 - 第3 b層 黒色土層 黒色土主体に褐色土、ローム粒が若干まざる。部分的に黒色の密度が濃くなる。
 - 第4層 黒色土層 黒色土主体に褐色土、ローム粒がまざる。
 - 第5層 暗褐色土層 褐色土主体に黒色土、ローム粒、ロームプがまざる。
 - 第6層 褐色土層 ソフトローム、褐色土に黒色土が若干まざる。
 - 第7層 黒色土層 黒色土主体に褐色土、白色砂粒がまざる。
 - 第8層 黒色土層 黒色土主体に褐色土、白色砂粒が多くまざる。
 - 第9層 褐色土層 褐色土主体に黒色土がまざる。
 - 第10層 褐色土層 褐色土主体に焼土粒、白色砂粒がまざる。
- カマダAセクション
- 第1層 淡茶褐色土層 褐色土主体に白色砂粒、焼土粒がまざる。
 - 第2層 淡褐色土層 褐色土主体に白色砂粒、焼土粒がまざる。一層より白っぽい。
 - 第3層 赤褐色土層 褐色土主体に焼土粒、黒色土がまざる。火床。
 - 第4層 黄褐色土層 黄色体主体にロームブロック、黒色土、褐色土がまざる。
 - 第5層 淡灰褐色土層 白色粘土主体に黒色土、黄色土、焼土粒が若干まざる。
 - 第6層 灰褐色土層 白色粘土主体に黒色土が若干まざる。
 - 第7層 黒色土層 白色粘土主体に黒色土、焼土粒φ5~7mm大が若干まざる。
 - 第8層 褐色土層 褐色土主体にロームがまざる。
 - 第9層 黒色土層 黒色土主体に白色砂粒、焼土が多にまざる。焼土粒2~3mm大。
 - 第10層 黒色土層 黒色土主体にロームが若干まざる。
 - 第11層 褐色土層 褐色土主体に黒色土、ロームブロックがまざる。



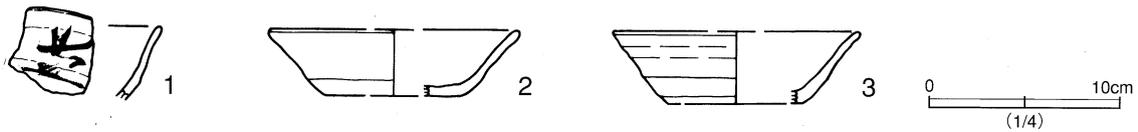
第43図 島田込の内遺跡5号住居跡出土遺物

1号土坑

確認面では円形の土坑であったが、遺構を掘りあげてみると、深さ30cmほどの少ピットが3基くっついたような形状になった。覆土の状態は人為的に埋め戻されたものであると考えられた。土坑内部から出土した遺物は縄文土器や古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の須恵器など16点が出土している。形状や覆土の状態からは土坑の用途は想定できなかった。また、出土遺物などから奈良・平安時代の所産を想定したが、確実ではない。



第44図 島田込の内遺跡1号土坑実測図



第45図 島田込の内遺跡出土遺物実測図

第24表 島田込の内遺跡出土遺物観察表

遺物No.	種類	器種	部位	計測値 (cm) (復元) (遺存)			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	土師器	坏	口辺部~ 体部片	—	—	—	淡橙褐色	雲母粒。 白色粒。赤色 スコリヤ	ロクロ成形。体部外面に、墨書「益」か?	D1A一括	
2	土師器	坏	口辺1/4~ 底部1/3	<3.5>	<13.2>	<7.0>	橙褐色	白色粒。雲 母。赤色 スコリヤ	ロクロ成形。回転糸切離し後周縁と体部 下半回転ヘラ削り調整。	D1B一括	
3	土師器	坏	口辺~底部 1/4	<3.9>	<13.0>	<7.2>	淡橙褐色	雲母。黒色 粒。赤色 スコリヤ	ロクロ成形。切離し不明。ヘラ削り調整。 体部下半回転ヘラ削り調整。	D2B一括	

調査のまとめ

2回の確認調査で410m²ほどの狭い範囲ではあったが、弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡2棟、土坑5基と多様で豊富な遺構群を検出している。

今回はさらに事業者と協議の結果、一部の本調査が行われ詳細な資料を得ることができた。対象となった区域では竪穴住居跡4軒と土坑1基が調査された。竪穴住居跡は奈良・平安時代で8世紀後半から9世紀中ごろとみられる。4号住居は2軒の重複であるが出土遺物からBのほうが古くなると判断された。3号住居と5号住居は8世紀後半から9世紀初頭のものではないかと思われる。土坑の時期や用途は明確ではなかった。

確認調査において2号住居が弥生時代から古墳時代前期のものとしているが、遺物の出土が全くなく、遺構の形状から時期を推定している。今回調査した区域の遺物の中には古墳時代前期の土師器も多く含まれており、周辺でこの時期の集落の存在の可能性は残る。また、縄文土器も少量であるが検出されている。条痕文土器が中心となっていることから、縄文時代早期の遺跡としての可能性もあるだろう。

(注1) 財団法人千葉県文化財センター 1998 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1 一八千代市島田込ノ内遺跡一』

10. 南台遺跡 b 地点

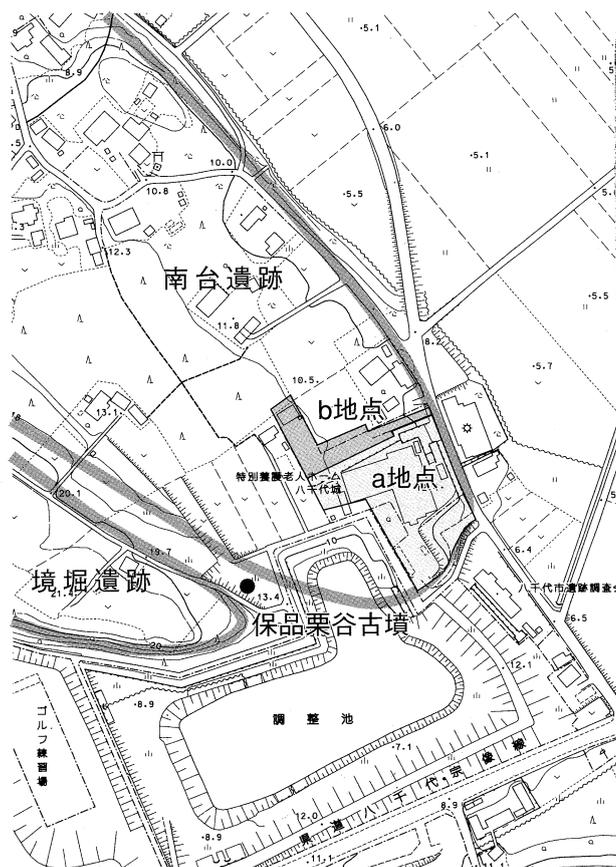
遺跡の立地と概要

南台遺跡は八千代市の東部，新川（このあたりはもともと印旛沼が広がっていたが，戦後の工事により，現在は新川の一部となっている。）西岸の台地縁辺部及び斜面部に位置している。千葉段丘面に立地しており，標高は約8m～12m。南側に広がる上位の下総段丘面には境堀遺跡や神野貝塚などが展開している。南東隣接地では平成7年に確認調査が行われたが，調査区域内の地山の大半が掘削されており，遺構遺物は検出できなかった。（注1）調査区は東に傾斜して延びる段丘面の南東部にあたる。

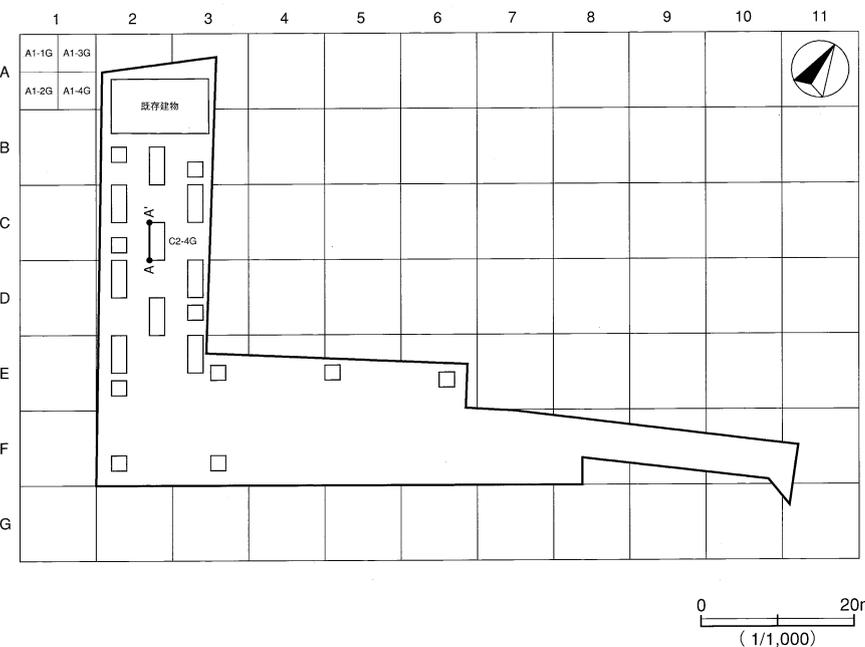
調査の方法と経過

調査は，調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち，これに平行する形でトレンチを設定して実施した。調査区の現況は駐車場で，調査中も使用中であったため，利用者には毎日調査の進捗にあわせて車を移動してもらった。そのため，掘削したトレンチはその日に埋め戻すこととした。

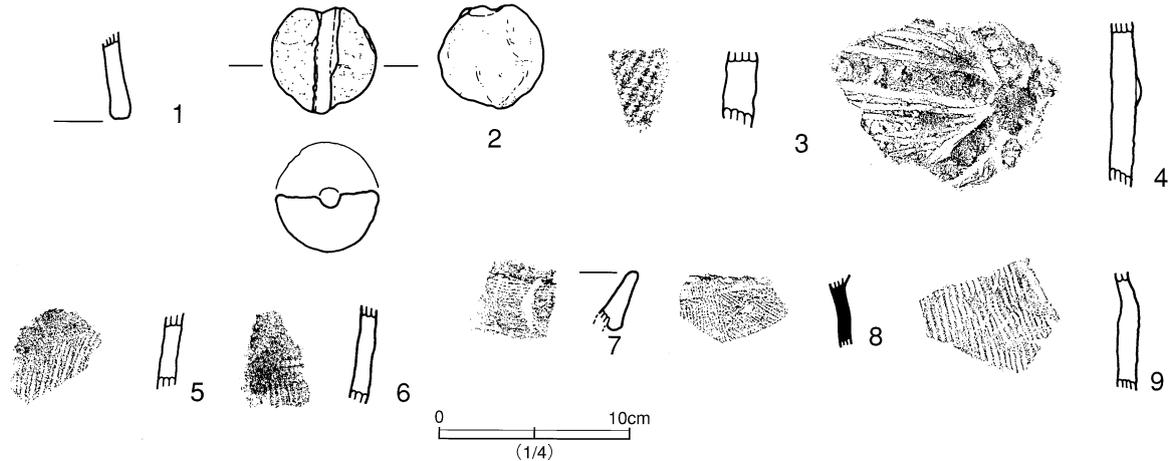
調査区の南側に隣接する a 地点においては，地山を深く削ったのちにガラが埋められていたため，遺構の検出を行うことは不可能な状態であった。調査区は以前，a 地点と同じ敷地であったため，調査にあたっては地山が削られている範囲を最初に把握する必要があった。そのため，はじめに2m×2mのテストトレンチを10箇所設定し，地山が削られている範囲の特定を行い，その後，地山が残っている地区について，2m×5mのトレンチを設定して，表土除去・遺構検出作業を行った。最終的に130m²について表土除去・遺構検出作業を行った。調査期間は平成15年7月8～15日である。7月8日器材搬入，テストトレンチ設定，



第46図 南台遺跡位置図 (1/5,000)



第47図 南台遺跡 b 地点トレンチ配置図



第48図 南台遺跡b地点出土遺物

8・9日重機によるテストトレンチ表土除去作業（埋め戻しも含む）、テストトレンチ遺構検出作業、9日トレンチ設定作業、9～15日重機によるトレンチ表土除去作業（埋め戻しも含む）、トレンチ遺構検出作業、11～15日実測・撮影等記録作業、15日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査の結果、E2-1、E3-1グリッドより北側のテストトレンチにおいて、深さ60cm～80cmでソフトロームを確認することができたが、それよりも南側ではa地点と同様の攪乱を受けていることが判明したため、北側のみあらたにトレンチを設定し調査を行った。遺構の確認はソフトローム層上面～上位で行った。南側の土層は表面から30cm程の碎石層（Ⅰ層）、40cm程の黒褐色土の盛り土層（Ⅱ層）、そしてその下は1m以上のガラが埋められていた。北側の土層ではⅠ、Ⅱ層は同様であるが、Ⅲ層が旧耕作土の黒色土、Ⅳ層が黒褐色土層、Ⅴ層がローム漸移層、Ⅵ層がソフトローム層であった。

トレンチによる調査の結果、遺構は検出できなかった。

遺物はC2-4トレンチからの出土が最も多く、多くはⅢ層から出土している。縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器などが出土している。土玉も1点出土している。主体となるのは弥生土器及び古墳時代土師器であった。

第25表 南台遺跡b地点出土遺物観察表

遺物No.	種類	器種	部位	計測値(cm)〔復元〕〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	土師器	台付甕	台部片	—	—	—	淡茶褐色	白色粒雲母	小型台付甕台部。内外面ナデ整形。	C2-1	
2	土製品	土玉	1/2遺存	縦2.8	孔径0.5	横2.7	淡茶褐色	白色粒	ややいびつな円形。孔径5mm程度。重さg	C2-4	
3	縄文土器		胴部片	—	—	—	—	—	後期前半か。外)縄文RL摩滅。内)ナデか摩滅。	隣表採	
4	縄文土器		胴部片	—	—	—	—	—	堀之内1式か。外)押圧のある隆線。地文縄文の上に沈線を条線状に施文。内)横ナデ。	隣表採	
5	弥生土器		胴部片	—	—	—	—	—	印手系 外)附加条1種LR+R 内)ナデ	隣表採	
6	弥生土器か		胴部片	—	—	—	内)橙褐色 外)淡褐色	白色粒	単節縄文と燃糸文の2種施文。	隣表採	
7	土師器	壺	口辺部片	—	—	—	淡橙褐色	黒色粒 白色粒 小石粒 雲母	複合口縁片。内外面横位ハケ目調整 後横ナデ。	隣表採	
8	須恵器	甕	頸部～胴部片	—	—	—	淡青灰色	白色粒多含	外)平叩き目。内)円形状当て具。	隣表採	
9	土師器	甕	頸部～胴上半部	—	—	—	淡茶褐色～赤褐色	白色粒雲母石英	外)頸部縦位ハケ目。胴部縦位～斜位ハケ目調整。内)ナデ。	D2-1	

調査のまとめ

今回の調査では地山が残っている範囲が狭かったため、遺構を検出することができなかったと考えることができるが、立地から周辺には集落が展開している可能性が高い。出土遺物から弥生時代後期～古墳時代前期が中心となるものと想定される。

(注1) 八千代市教育委員会 1996 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成7年度』

11. 栗谷遺跡 b 地点

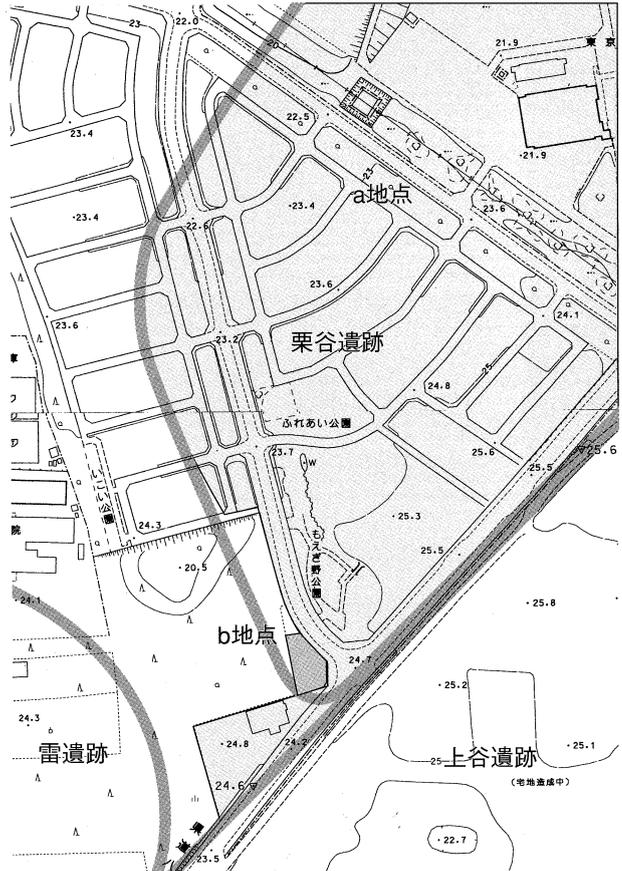
遺跡の立地と概要

栗谷遺跡は八千代市北東部、新川（旧印旛沼）から入り込む谷津により形成された舌状台地上に位置する。標高は約23m～25mである。栗谷遺跡の調査は昭和63年から平成6年までの長期にわたり、遺跡の大部分が大規模開発に伴う調査が行われており、弥生時代中期から後期にかけて方形周溝墓群や集落が確認されている（注1, 2, 3, 4）。

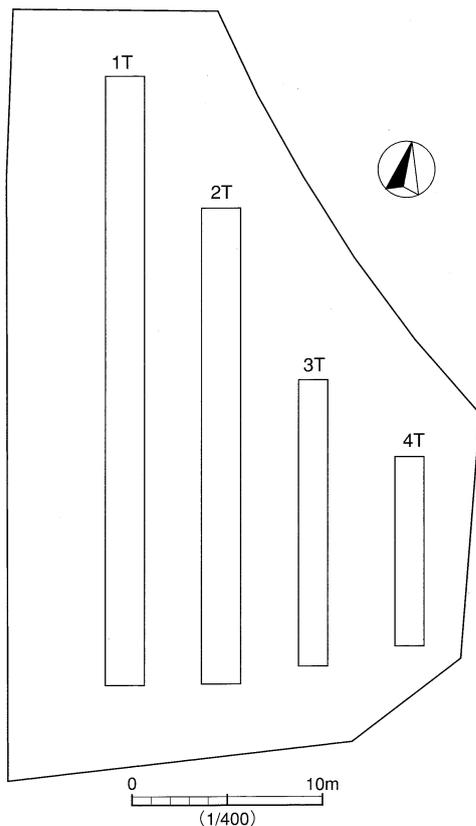
調査区は栗谷遺跡の最南端部に位置し、北側から入り込む谷津の最奥部に位置する。

調査の方法と経過

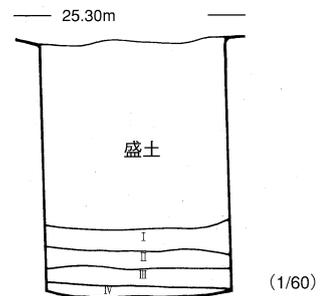
調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち、これに平行する形でトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの延長等を行い、遺構の捕捉に努めた。調査区の現況では、1.5m



第49図 栗谷遺跡位置図 (1/5,000)



第50図 栗谷遺跡 b 地点トレンチ配置図



1トレンチ北端	
第Ⅰ層 黑色土層	黑色土主体に褐色土，ローム粒がまざる。ローム粒2～3mm
第Ⅱ層 暗褐色土層	褐色土主体に黑色土，ローム，ローム粒がまざる。ローム粒2～3mmローム漸移層。遺構確認面。
第Ⅲ層 黄褐色土層	ローム主体にロームブ，黑色粒がまざる。黑色粒2～3mm，ソフトローム
第Ⅳ層 褐色土層	ローム主体にロームブ，褐色土がまざる。ハードローム

m以上の盛土がなされており、遺構検出作業面までのトレンチの深さは2m以上となる。そのためトレンチ壁面の崩落の危険があることから、遺構が検出されなかったトレンチについては掘削したその日に埋め戻すこととした。最終的に157.50㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。

調査期間は平成15年7月9～15日である。7月9日器材搬入、トレンチ設定、9～15日重機によるトレンチ表土除去作業（埋め戻しも含む）、遺構検出作業、15日実測・撮影等記録作業、器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査の結果、現地表面から1.5m～2mの盛り土層が全体を覆っていた。この盛り土層の下に旧表土層が残っており、Ⅰ層が黒色土、Ⅱ層が暗褐色土、Ⅲ層がソフトローム層、Ⅳ層にハードローム層を確認した。遺構の検出作業はⅢ層のソフトロームを確認面として調査を実施したが、遺構・遺物の検出はみられなかった。

調査のまとめ

今回の調査では、遺構遺物の検出は全くみられなかったが、すでに調査が行われている隣接するa地点（注1,2,3,4）での成果から見て栗谷遺跡の中心的な区域からはずれ、遺構遺物の希薄になってきた区域にあたるものと考えられる。また、調査区西側には上谷遺跡（注5,6,7）が接している。上谷遺跡も大規模開発事業に伴う遺跡調査によりほとんどが調査されている。内容としては縄文時代早期の炉穴群、前期の遺構、弥生時代後期の集落、古墳時代前期から中期の集落、そして奈良・平安時代の竪穴住居跡群や掘立柱建物群などの豊富な内容の遺跡であるが、今回の調査区はその上谷遺跡からもはずれていることが確認された。

（注1）八千代市遺跡調査会 2001 『千葉県八千代市栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』第1分冊

（注2）八千代市遺跡調査会 2003 『千葉県八千代市栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』第2分冊

（注3）八千代市遺跡調査会 2004 『千葉県八千代市栗谷遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書。』第3分冊

（注4）八千代市遺跡調査会 2001 『千葉県八千代市栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』第1分冊本文編

（注5）八千代市遺跡調査会 2001 『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』第1分冊

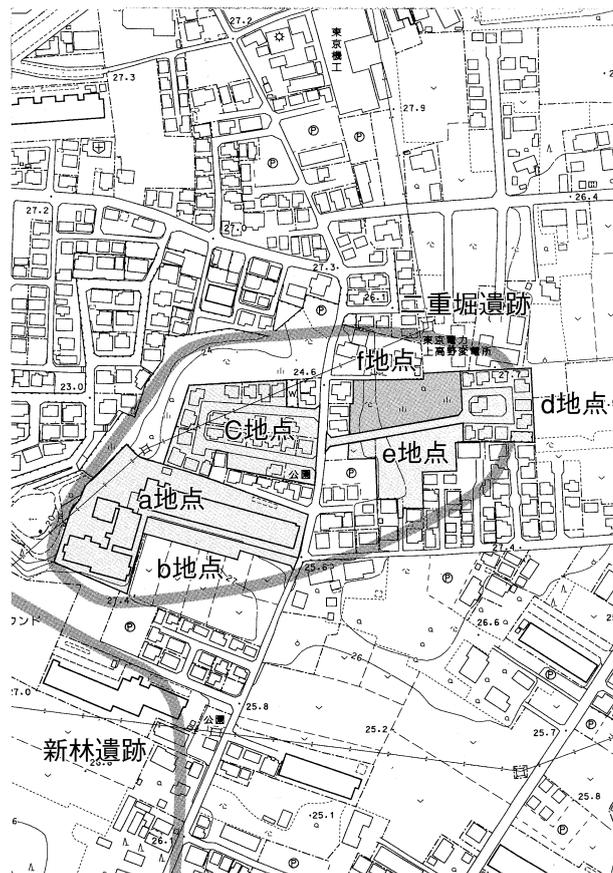
（注6）八千代市遺跡調査会 2003 『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』第2分冊

（注7）八千代市遺跡調査会 2004 『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』第3分冊

12. 二重堀遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

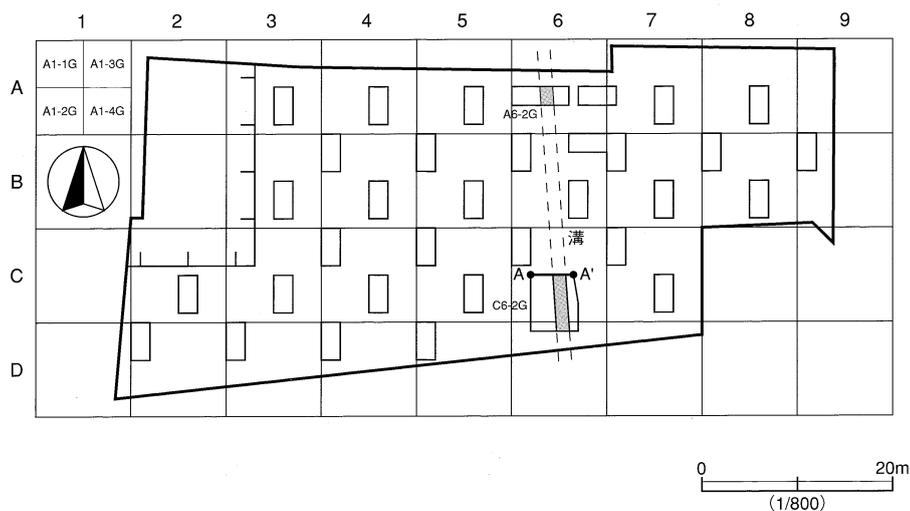
二重堀遺跡は、市域の南部、新川の東岸にあたる辺田前の低地から東に延びる谷津の台地上に立地している。台地東側は佐倉市との市境を流れる小竹川によって樹枝状に開析された谷津によって区画されている。遺跡東方には縄文時代、奈良・平安時代を中心とする稲荷前遺跡が、さらに北西方向には同じく縄文時代、奈良・平安時代を中心とする上谷津台遺跡等が展開する。二重堀遺跡のこれまでの調査では、平成5年度に a 地点を調査し、縄文時代前期浮島期を中心として竪穴状遺構1基、土坑35基を検出している。平成6年度に調査した b 地点(注1)では縄文時代前期の土坑2基を、平成8年度の d 地点では時期不明の溝1条と土坑1基を検出している。同年度調査した c 地点(注2)では遺構の検出はみられなかった。平成13年度には e 地点(注3)の調査が行われ、縄文時代早期の炉穴4基、後期の土坑1基、縄文時代の小竪穴状遺構1基、土坑3基などを検出している。今回の調査はこの e 地点の北側に当たる。現況は荒蕪地であるが以前は畑地であったようである。調査区西端はすでに削平されてしまっていた。調査区東側は平坦であるが、西側に向かって緩やかに傾斜している。標高は約25m～28mである。



第51図 二重堀遺跡位置図 (1/5,000)

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド(方眼)を組んだのち、これに平行する形で2m×4m



第52図 二重堀遺跡 f 地点遺構配置図

mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に296.50㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、この遺構の本調査も併せて行った。

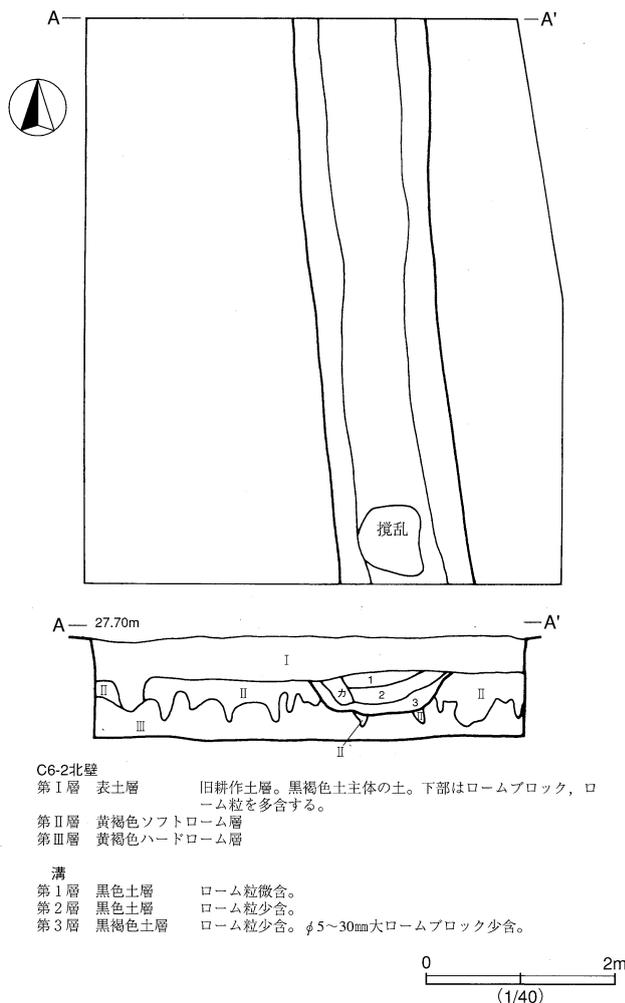
調査期間は平成 15年11月12～ 26日である。11月12日器材搬入、12・13日トレンチ設定、14～17日重機によるトレンチ表土除去作業、遺構検出作業、17日遺構調査、17～19日実測・撮影等記録作業、17～26日重機によるトレンチ埋め戻し作業、26日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

基本土層はⅠ層が表土層（旧耕作土）で、Ⅱ層がソフトローム層、Ⅲ層がハードローム層であった。遺構の検出作業はⅡ層上面で行った。

調査の結果、遺物は縄文土器、奈良・平安時代土師器が数点出土するのみであった。砥石も1点出土しているが現代のものと思われる。

遺構はd及びe地点で検出された溝の続きが見つかったのみで、他の遺構は検出されていない。この遺構調査のため溝の周辺の拡張を行った。溝の覆土は黒色土を主体とする自然埋没であった。溝の断面は逆台形状である。壁は斜めに立ち上がり、底は少し凸凹があるもののほぼ平坦である。遺物の出土はみられないが、中近世以降のものと考えられ、地境の溝ではないだろうか。



第53図 二重堀遺跡 f 地点遺構実測図

調査のまとめ

隣接するd及びe地点においては南北に延びる溝以外に土坑や炉穴が数基検出されているものの、遺構の分布は希薄な地区である。今回f地点についても同様のことが言え、二重堀遺跡の東側地区の様相がほぼ明らかとなった。

(注1) 八千代市教育委員会 1995 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成6年度』

(注2) 八千代市教育委員会 1997 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』

(注3) 八千代市教育委員会 2003 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』

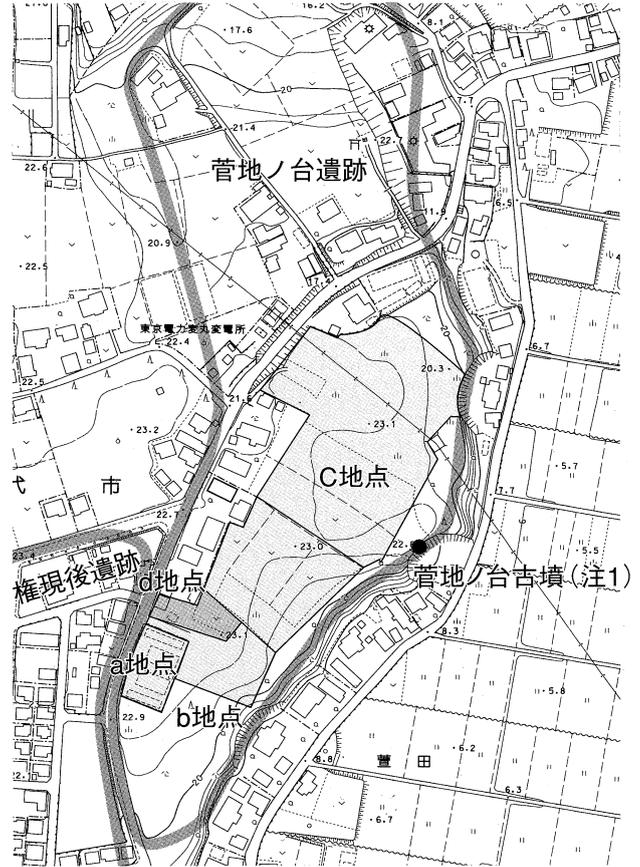
13. 菅地ノ台遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

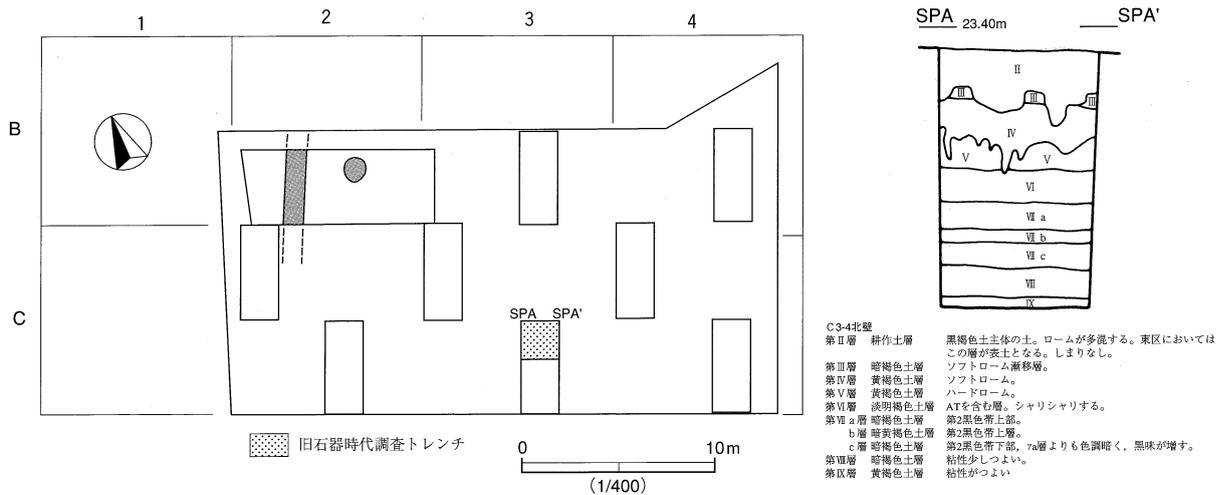
菅地ノ台遺跡は市域の中央部、新川の西岸に位置している。標高約20m～23mほどである。新川に面する舌状台地とそれに続く台地の縁辺に立地している。

菅地ノ台遺跡の南部の台地縁辺部は昭和63年以来頻りに調査が行われている地区である。a地点(注2)は昭和63年度及び平成元年度にわたり確認及び本調査が実施されている。弥生時代後期から古墳時代前期～後期までの竪穴住居跡が10軒、掘立柱建物跡3棟が検出されている。b地点(注3)は平成4年度確認調査が行われ、弥生時代後期以降の竪穴住居跡7軒などが検出されている。c地点(注4)は平成5年度・6年度に確認調査が一部実施され、さらに平成7年度以降3カ年にわたって部分的な本調査が行われた。当初の2カ年にわたる確認調査では77軒ほどの弥生時代後期及び古墳時代以降の竪穴住居跡が検出されていた。その後の3カ年度にわたる本調査では、確認調査で検出された遺構の内、竪穴住居跡では弥生時代後期3軒、古墳時代前期2軒、奈良・平安時代20軒ほど調査されている。また、掘立柱建物跡13棟などが調査された。

今回の調査区は遺跡南端の台地上の平坦部であった。現況は東側が畑地となり、西側が宅地と成っていたが、調査開始時には家屋や作物は撤去されて整地されていた。畑地の部分は平成5年度に確認調査が行われている区域であったため、今回の調査からは除くこととした。開発目的が小規模な共同住宅の建設であ



第54図 菅地ノ台遺跡位置図 (1/5,000)



第55図 菅地ノ台遺跡 d 地点遺構配置図

ったため、建物の基礎部分については遺構検出面との間に十分な保護層が確保できると判断された。そこで、確認調査により遺構を把握することで、調査の完了とした。しかし、浄化槽の設置を予定している部分については部分的な本調査が必要とされた。

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち、これに平行する形で2m×5mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に118㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかつたため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、これらの遺構の本調査も併せて行った。また、旧石器時代調査トレンチを1箇所設定し、掘削を行った。

調査期間は平成16年2月19日～3月2日である。2月19日器材搬入、トレンチ設定、重機によるトレンチ表土除去作業、遺構検出作業、20～24日人力による旧石器時代調査トレンチ掘削作業、20日～3月1日遺構調査、24日～3月1日実測・撮影等記録作業、3月1・2日重機によるトレンチ埋め戻し作業、2日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の土層はⅠ、Ⅱ層が表土層（耕作土）で、Ⅲ層がローム漸移層、Ⅳ層がソフトローム層、Ⅴ層がハードローム層であった。遺構の検出作業はⅢ層からⅣ層上面で行った。以前は畑地であったため、確認面においても溝状の浅い耕作痕が多くみられた。

調査の結果、遺構は平成5年度に調査された区域は別として調査区西側で1条の溝と土坑1基が確認されただけであった。区域内に浄化槽の設置が予定されていたため、引き続き本調査を行った。

溝状遺構は西側の市道に沿って検出された。溝の底や壁から長方形のピットなどが検出されている。遺物はほとんどが混入されたもので、時期や遺構の性格を想定できるものではなかった。しかし、覆土の状況などから近世以降の境界の根切り溝と判断された。

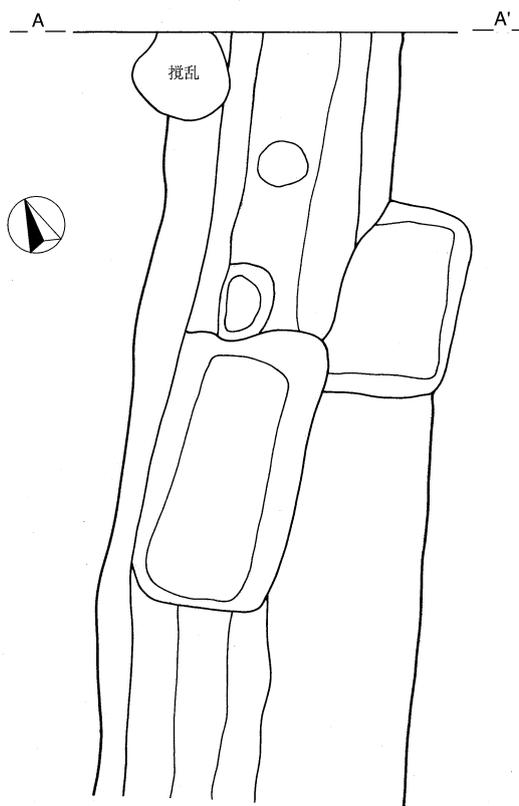
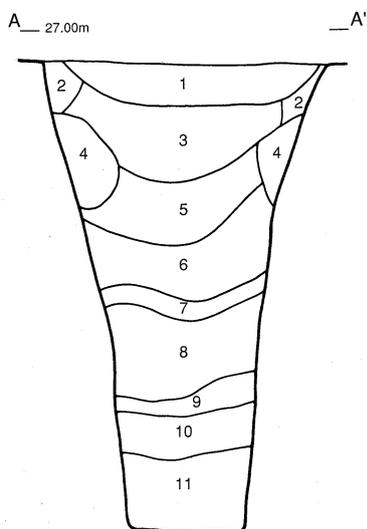
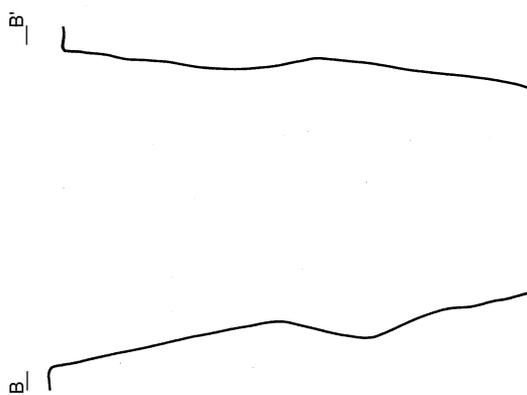
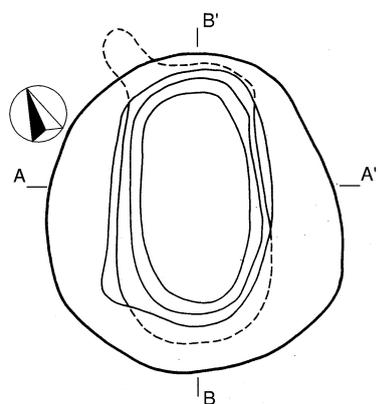
土坑は調査区西側から検出されている。覆土の最下層のⅪ層はロームによる埋め戻された土層であった。この土層が硬くしまった状態であったことから一時期この上面を底面として使われていたと考えられる。以後、しばらく自然埋没が続き、8, 7, 6層とまた人為的に埋め戻されている状況が確認された。その後は自然に埋没して完全に埋まり切っている。底部は平坦でピットなどもみられなかった。

調査区では縄文土器から奈良・平安時代の遺物を多数出土する。縄文土器片錘の出土もみられ、さらに泥面子も採取されている。

旧石器時代の確認のため、トレンチを1ヶ所設置し、第2黒色帯下層まで掘削しているが遺物は検出することが出来なかった。

第26表 菅地ノ台遺跡d地点遺構一覧表

遺構No.	種別	規模 (cm)			平面形態	長軸方向	底面形状	備考
		長軸	短軸	深さ				
1号土坑	土坑	166	151	250	楕円形	N-26° -E	平坦	

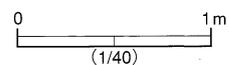
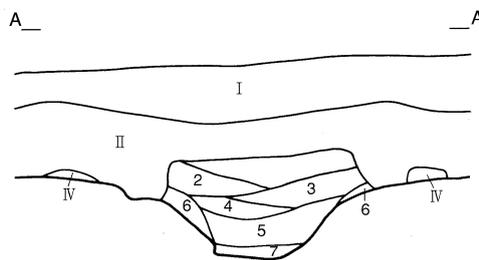


1号土杭

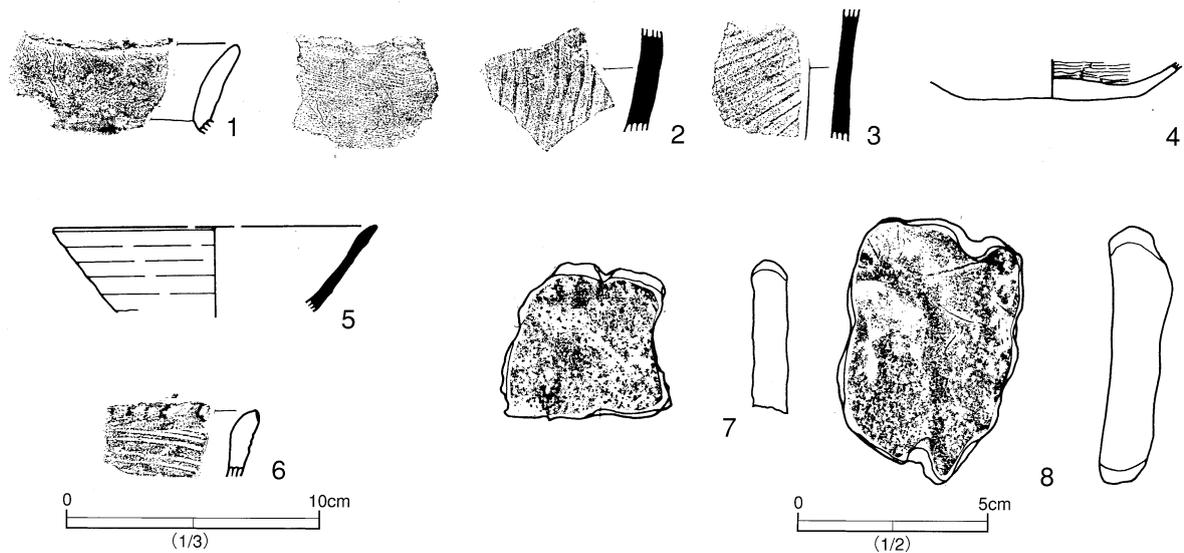
- | | |
|------------|--|
| 第1層 暗褐色土層 | ローム少混。ローム粒少含。しまりつよい。 |
| 第2層 暗黄褐色土層 | ロームに暗褐色土少混。しまりつよい。 |
| 第3層 黒褐色土層 | ローム粒少含。しまりつよい。 |
| 第4層 暗黄褐色土層 | ロームに暗褐色土少混。ローム粒少含。しまりつよい。
2層より色調やや明るい。 |
| 第5層 黒褐色土層 | ローム少混。ローム粒少含。しまりつよい。 |
| 第6層 暗黄褐色土層 | 暗褐色土とロームが混じりあった土。ローム粒及び径30mm
大のロームブロック多含。 |
| 第7層 黒色土層 | 黒色土主体の土。ローム粒及び径5~20mm大のローム
ブロック多含。ボソボソの土。 |
| 第8層 黄褐色土層 | ローム主体の土。しまりなくボソボソ。径5~10mm大の
ロームブロック多含。黒褐色土少混。 |
| 第9層 暗褐色土層 | ローム粒少含。しまり少し有。 |
| 第10層 暗褐色土層 | ローム粒少含。径5~10mm大のロームブロック少含。 |
| 第11層 黄褐色土層 | ローム主体の土。色調やや暗い。非常にしまっている。突
き固めたようである。 |

溝

- | | |
|---------|------------------------------|
| 1 黒色土 | ローム粒少含。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒少含。 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒多含。径5mm大のロームブロック多含。 |
| 4 黒褐色土 | ローム粒微含。 |
| 5 黒褐色土 | ローム粒少含。径5~10mm大のロームブロック少含。 |
| 6 暗黄褐色土 | 黒褐色土とロームが混じりあったような土。ややしまりあり。 |
| 7 黒褐色土 | ローム粒多含。径5~10mm大のロームブロック少含。 |



第56図 菅地ノ台遺跡d地点遺構実測図



第57図 菅地ノ台遺跡d地点出土遺物

第27表 菅地ノ台遺跡d地点出土遺物観察表

遺物No.	種類	器種	部位	計測値(cm)〈復元〉〔遺存〕			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	土師器	甕	口辺部	—	—	—	茶褐色	白色粒多含。雲母。	内外面細かいケ目調整後横なで。古墳時代前期。	T1	
2	須恵器か	甕	胴部片	—	—	—	橙褐色	雲母 白色粒	縦位平行叩き目文。内面なで。	T2	
3	須恵器	甕	胴部片	—	—	—	黒灰色	白色粒多含。小石片	縦位平行叩き目文。内面なで。	T2	
4	土師器	坏	底部	[1.6]	—	7.0	外)淡橙褐色 内)黒色 処理	雲母。赤色スコリヤ	ロクロ成形。切離し不明。回転ヘラ削り調整。体部下端ヘラ削り調整。内面ヘラ磨き後黒色処理(炭素吸着)	C3-4	内黒
5	須恵器	坏	口辺部	[3.4]	[12.6]	—	黒青灰色	白色粒多含。雲母混入	ロクロ成形。内外面ロクロなで。	表探	
6	縄文土器	縄文	口辺部	—	—	—		口辺部	目りはりのない紐線文と横位の沈線。加目]~管谷。内面は横位のヘラ磨き。	北隣表探	
7	土製品	土器片錘	完形	全長 4.1	幅 4.4	厚さ 0.9	重量 20.9g	長石多含。石英。小石片	中期前半・胴部再利用品。刻みは1ヶ所のみ。	北隣表探	
8	土製品	土器片錘	完形	全長 7.0	幅 4.8	厚さ 1.2	重量 59.4g	白色粒多含。雲母。赤色スコリヤ	中期阿玉台式口辺部片の再利用品。縦位で2ヶ所刻みがある。	北隣表探	

調査のまとめ

菅地ノ台遺跡の南部は(財)千葉県文化財センターが調査した権現後遺跡(注5,6)と接しており、この遺構配置図では当遺跡と接する区域に弥生時代後期または奈良平安時代の竪穴住居跡群が検出されている。その意味では今回の調査区で竪穴住居跡などの遺構が検出できなかったことは住居群のなかの空白域であったに過ぎないようだ。すでに、平成5年度において調査が行われている区域では奈良・平安時代などの竪穴住居跡の確認がなされており、大規模な集落の一部が調査されたと考えられる。

(注1) 八千代市教育委員会 1988 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和62年度』

(注2) 八千代市教育委員会 1989 『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告 昭和63年度』

(注3) 八千代市教育委員会 1993 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成4年度』

(注4) 確認調査及び本調査が断続的に行われたが、全域本調査となるには至らず、事業が中断された。

(注5) 財団法人千葉県文化財センター 1984 『八千代市権現後遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—』

(注6) 財団法人千葉県文化財センター 1993 『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ—』

14. 持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点

遺跡の立地と概要

今回の調査区は二つの遺跡にまたがるものと判断されたため、調査に当たって、両遺跡を併記することとした。持田遺跡は市域の中央部、新川の東岸の台地上に立地している。標高は約24m～26mほどである。平成5年度に調査が行われ、古墳時代後期の集落の一端が検出されたことにより、遺跡全体に広範囲に集落が展開されるものと考えられている(注1)。また、正覚院館跡は南側に開けた小さな谷津を取り囲むように造られている。現在においても土塁や空堀が随所に現存している。確かな由来ははっきりしないが、数度の調査により中世の遺物が出土しており、徐々に明らかになりつつある(注2, 3)。

今回の調査区は正覚院館跡の東側の端、持田遺跡の南東部にあたる。現況は荒蕪地となっており、南西に向かってやや傾斜している。調査区の北側には八坂神社が所在する。

調査の方法と経過

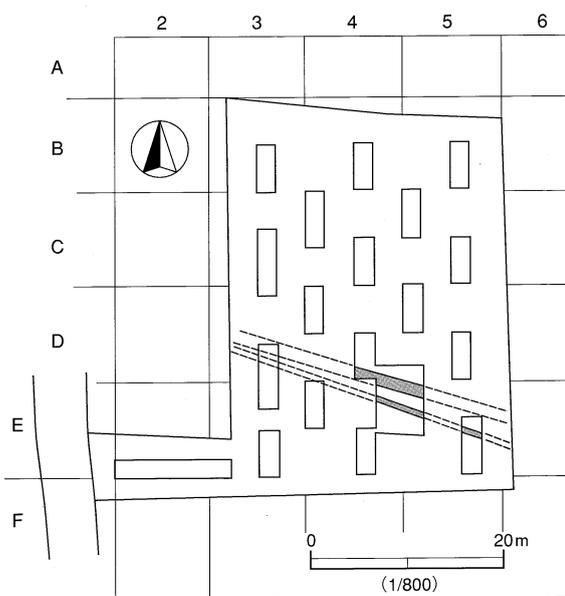
調査は、調査区の形状に合わせて10mのグリッド(方眼)を組んだのち、これに平行する形で2m×5mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの拡張・増設等を行い、遺構の捕捉に努めた。最終的に243㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、これらの遺構の本調査も併せて行った。

調査期間は平成16年3月9～18日である。3月9日器材搬入、トレンチ設定、9～11日重機によるトレンチ表土除去作業、遺構検出作業、11～16日遺構調査、11～18日重機によるトレンチ埋め戻し作業、16・17日実測・撮影等記録作業、18日器材撤収により調査を終了した。

また、調査終了後の平成16年7月1日午前、宅地造成に伴う排水管理設工



第58図 持田遺跡・正覚院館跡位置図 (1/5,000)



第59図 持田遺跡 c 地点・正覚院館跡 d 地点遺構検出状況図

事中人骨が出土した旨、八千代市教育委員会に連絡があった。現地において確認したところ、中世の骨蔵器であることがわかった。調査時に設定したトレンチとトレンチの間の未掘削部分からの出土であった。発掘調査は昨年度既に終了していたが、事業者及び工事業者の承諾を得て、7月1日午後蔵骨器が出土した部分のみ再度緊急調査を行った。

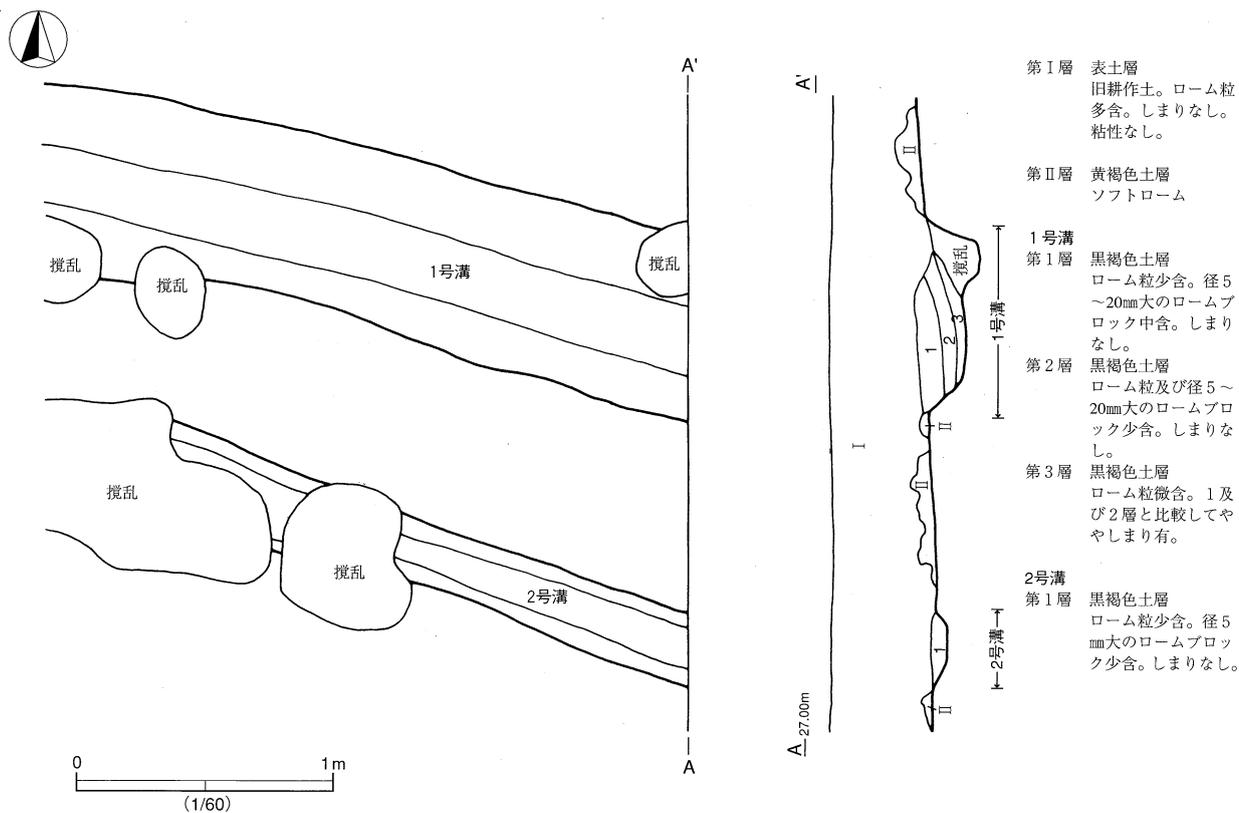
調査の概要

調査区域の土層はⅠ層が表土（旧耕作土）で、Ⅱ層がソフトローム層であった。遺構の検出作業はⅡ層上面で行った。各トレンチは約70cm～100cmの深さでロームを確認することができた。

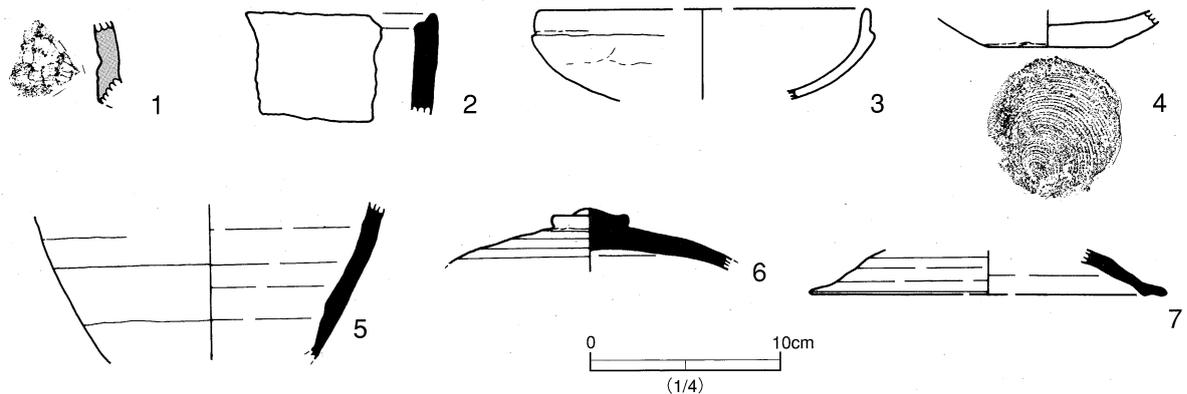
調査区からは溝が2条検出されている。覆土中から出土する遺物は混入物と判断され、時期を特定することが出来なかった。しかしながら、比較的新しいものと考えられ、近世以降と考えた。公図上の境界と平行して作られていることから、土地の境界の溝と思われる。

調査の結果、各トレンチから縄文土器や古墳時代から奈良・平安時代の遺物が出土したものの、これらの時代の遺構は全く検出することが出来なかった。

工事中に発見されたものは骨臓器1点と青銅製品2点であった。人骨は骨臓器の中に収まった状態で出土している。土器の上半部が欠損しているが周辺の調査によっても破片が全く見つかっていないことから、工事中に行われたものではない。出土位置は確認調査のトレンチの合間の出土と見られた。深さは地表下50cmから60cm位のところであった。周辺に拡張された区域を精査したが、遺構を確認することはできなかった。また、掘りあげた廃土を確認したが出土した以外の人骨及び土器等の遺物も検出することはできなかった。



第60図 持田遺跡c地点・正覚院館跡d地点溝状遺構



第61図 持田遺跡c地点・正覚院館跡d地点出土遺物

第28表 持田遺跡c地点・正覚院館跡d地点出土遺物観察表

遺物No.	種類	器種	部位	計測値(cm)〈復元〉(遺存)			色調	胎土	調整・文様等	出土位置	備考
				器高	口径	底径					
1	縄文土器		底部片	—	—	—		繊維含	底部上げ底状。外面に縄文施文。内) などで。	M1	
2	須恵器	不明	口辺部か	—	—	—	淡青灰色～暗灰色	白色長石	内外などで整形。扁平でカーブは見られない。箱状の器形か。端部内側に受け部	E5-1	
3	土師器	坏	口辺部～体部1/6片	[3.6]	[13.0]	—	内淡褐色外淡橙褐色	雲母白色粒多含	口辺部内外横などで。外) 体部ヘラ削り。内) などで。内黒色処理か。	墓東隣表採	
4	土師器	皿	底部～体部全周	[1.5]	—	5.0	淡茶褐色	雲母白色粒	ロク口成形。底部切離しは、右回転系切り未調整。体部内外面などで。内面煤付着。	北隣表採	
5	須恵器	長頸瓶	胴部1/3周	[6.1]	—	—	灰色。緑色のガラス状釉	緻密黒色斑点状物	ロク口成形。外) ヘラ削り調整。内) ロク口などで。	墓東隣表採	
6	須恵器	蓋	鈕部～天井部全周	鈕径〈3.0〉	遺存高〔2.3〕	—	淡緑灰色	緻密	ロク口成形。外天井部回転ヘラ削り。鈕部貼り付け。(扁平宝珠状) 内) ロク口などで。外面ガラス状釉付着。	墓東隣表採	
7	須恵器	蓋	口辺～天井部1/5	[1.8]	[14]	—	淡青灰色～灰色	雲母多含白色粒	ロク口成形。内面やや弱い返りをもつ。天井部外) 回転ヘラ削り調整。	墓東隣表採	

調査のまとめ

今回の調査では、現地踏査の段階で周辺において多くの遺物の散布が確認できたことから、竪穴住居跡等の遺構の検出があるものと考えていた。しかし、結果は近世以降の溝が2条検出されたのみであった。遺物の散布は遺跡の西側に多くみられることから台地の西側、新川を臨む台地縁辺側に展開しているものと想定される。また、館跡に関する遺構遺物も検出できなかった。館跡の主体部は舌状台地の先端部であり、調査区は館跡からはずれているのであろう。

また、今年度において緊急調査された遺物については今後再調査し報告を予定する。

(注1) 持田遺跡のa地点として調査が行われているが、報告書は未刊である。

(注2) 八千代市教育委員会 1996 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成7年度』

(注3) 八千代市遺跡調査会 1999 『千葉県八千代市正覚院館跡 一埋蔵文化財発掘調査報告書一』



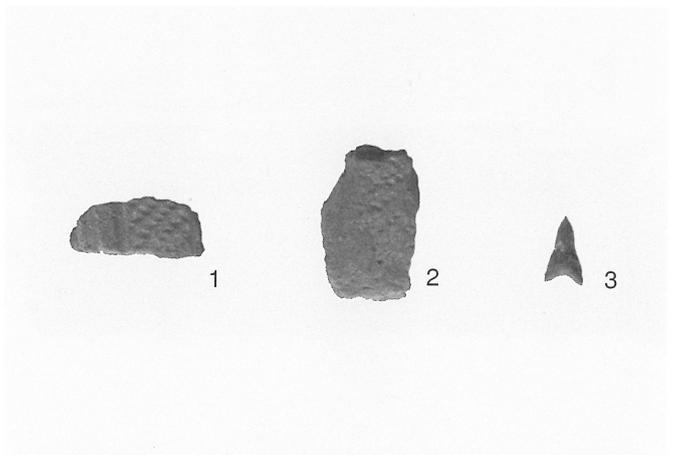
(1) 新東原遺跡 d 地点 調査区域近景



(2) 新東原遺跡 d 地点 調査風景



(3) 新東原遺跡 d 地点 調査区土層



(4) 新東原遺跡 d 地点 出土土器



(5) 池の台遺跡 e 地点 調査区域近景



(6) 池の台遺跡 e 地点 C6-1トレンチ掘削状況



(7) 池の台遺跡 e 地点 1号土坑・2号土坑



(8) 池の台遺跡 e 地点 土坑セクション

図版2



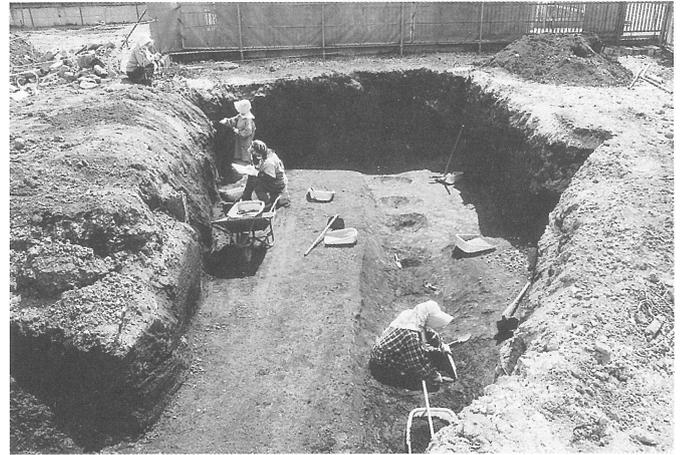
(1) 池の台遺跡 e 地点 1号溝状遺構



(2) 池の台遺跡 e 地点 2号溝状遺構



(3) 池の台遺跡 e 地点 C1-3南壁セクション



(4) 池の台遺跡 e 地点 調査風景



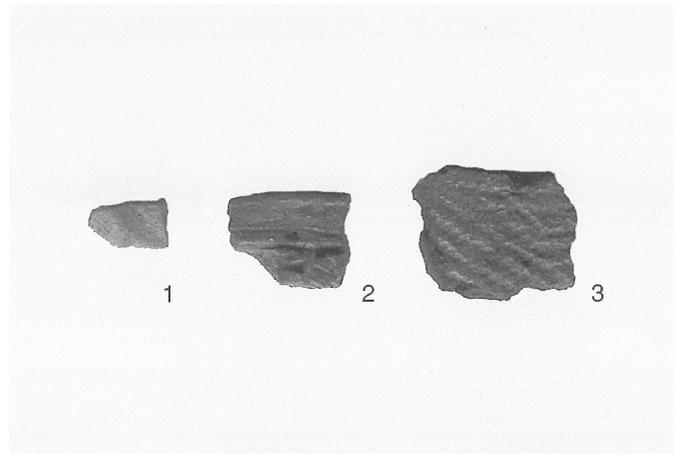
(5) 池の台遺跡 f 地点 調査区域近景



(6) 池の台遺跡 f 地点 セクション



(7) 池の台遺跡 f 地点 調査区トレンチ掘削状況



(8) 池の台遺跡 f 地点 出土遺物



(1) 一本松前遺跡 a 地点 近景



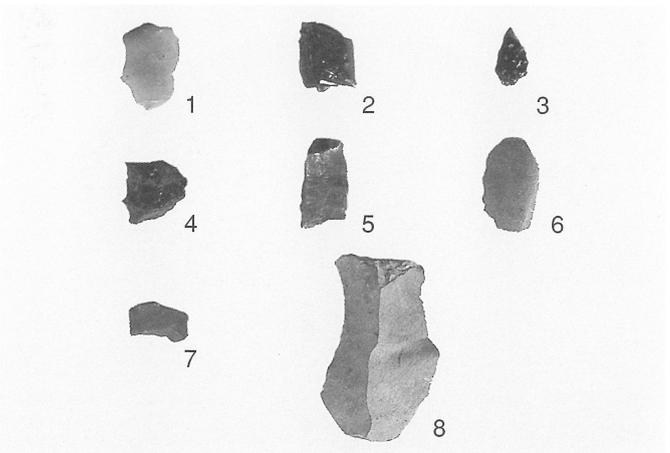
(2) 一本松前遺跡 a 地点 調査風景



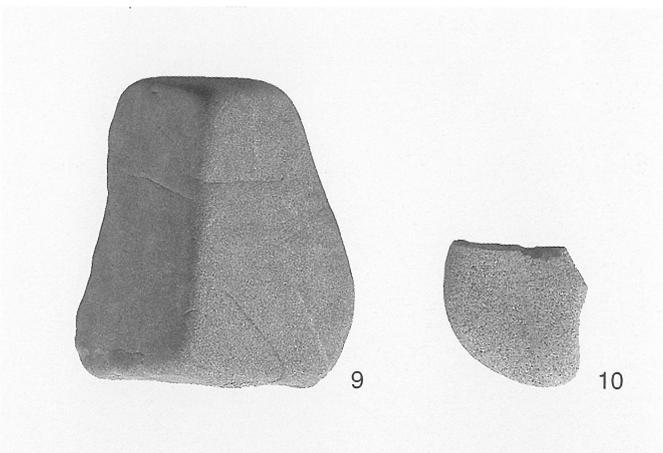
(3) 一本松前遺跡 a 地点 4区遺物出土状況



(4) 一本松前遺跡 a 地点 4区セクション



(5) 一本松前遺跡 a 地点 4区出土遺物



(6) 一本松前遺跡 a 地点 4区出土遺物

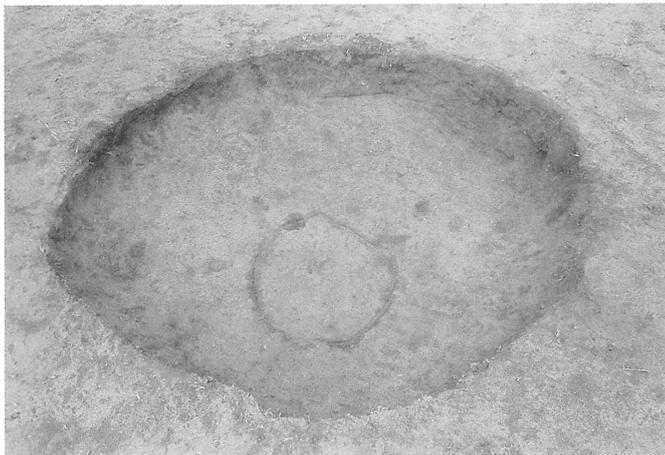


(7) 一本松前遺跡 a 地点 1区完掘状況



(8) 一本松前遺跡 a 地点 1号土坑

图版4



(1) 一本松前遺跡 a 地点 3号土坑



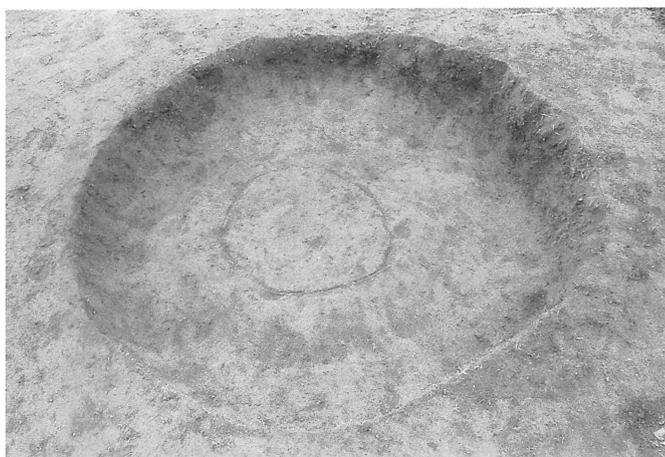
(2) 一本松前遺跡 a 地点 5号土坑



(3) 一本松前遺跡 a 地点 6号土坑



(4) 一本松前遺跡 a 地点 7号土坑



(5) 一本松前遺跡 a 地点 9号土坑



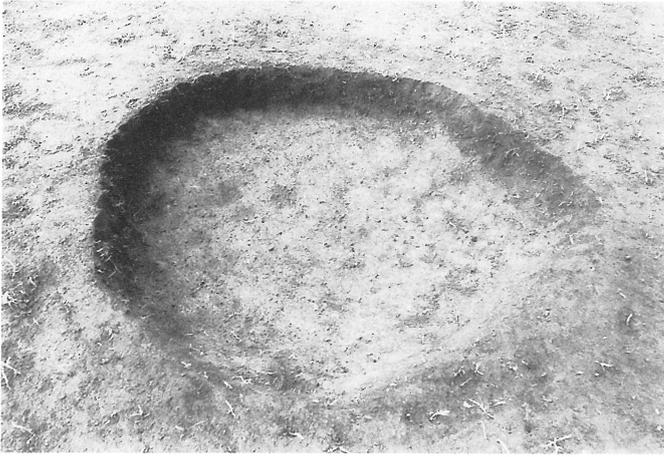
(6) 一本松前遺跡 a 地点 10号土坑



(7) 一本松前遺跡 a 地点 12号土坑



(8) 一本松前遺跡 a 地点 13号土坑



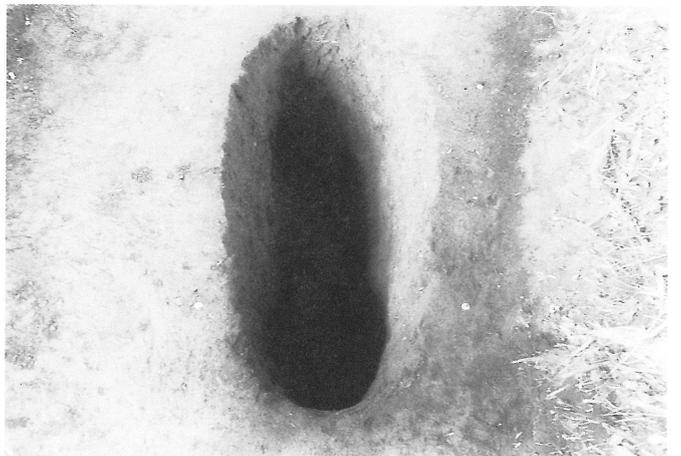
(1) 一本松前遺跡 a 地点 14号土坑



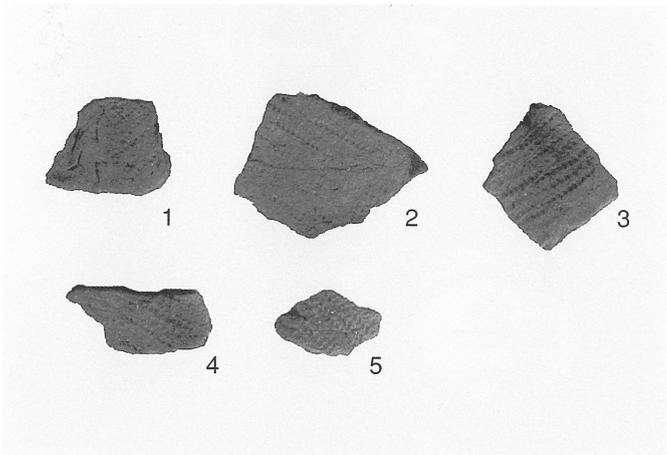
(2) 一本松前遺跡 a 地点 15号土坑



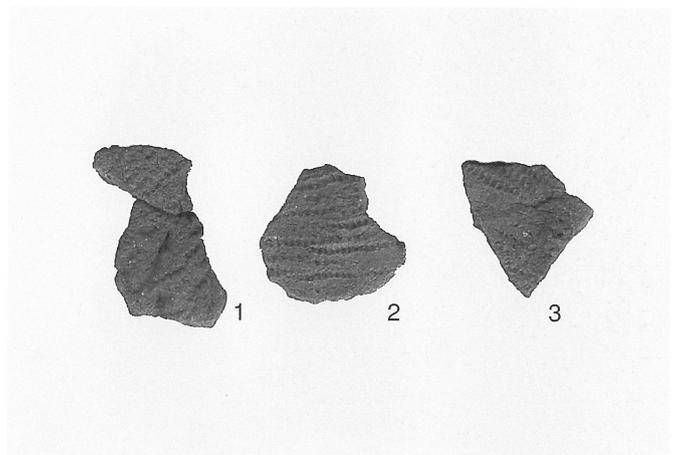
(3) 一本松前遺跡 a 地点 17号土坑セクション



(4) 一本松前遺跡 a 地点 17号土坑



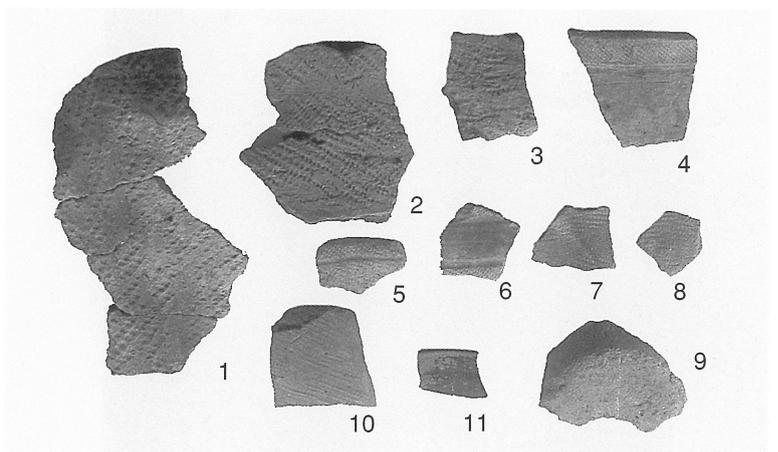
(5) 一本松前遺跡 a 地点 5号土坑出土遺物



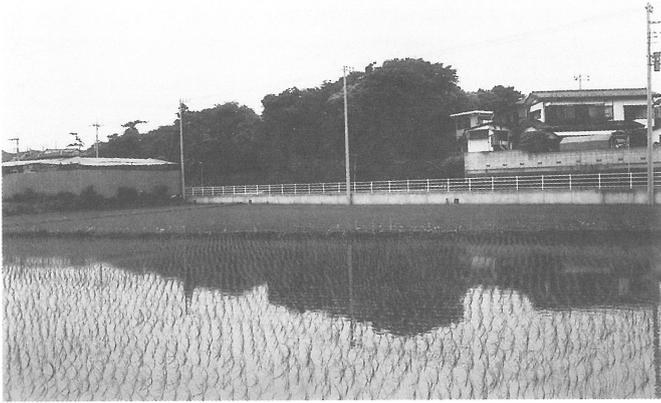
(6) 一本松前遺跡 a 地点 6号土坑出土遺物



(7) 一本松前遺跡 a 地点 9号土坑出土遺物



(8) 一本松前遺跡 a 地点 グリッド出土遺物



(1) 一本松前遺跡 b 地点 遠景



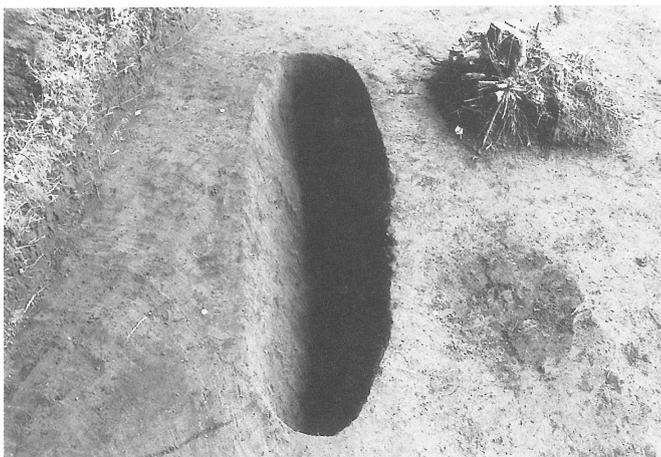
(2) 一本松前遺跡 b 地点 近景



(3) 一本松前遺跡 b 地点 1号土坑検出状況



(4) 一本松前遺跡 b 地点 1号土坑セクション



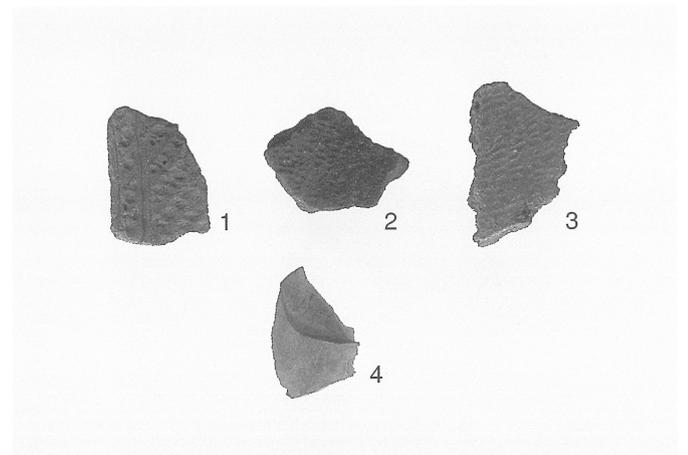
(5) 一本松前遺跡 b 地点 1号土坑



(6) 一本松前遺跡 b 地点 調査風景



(7) 一本松前遺跡 b 地点 調査風景



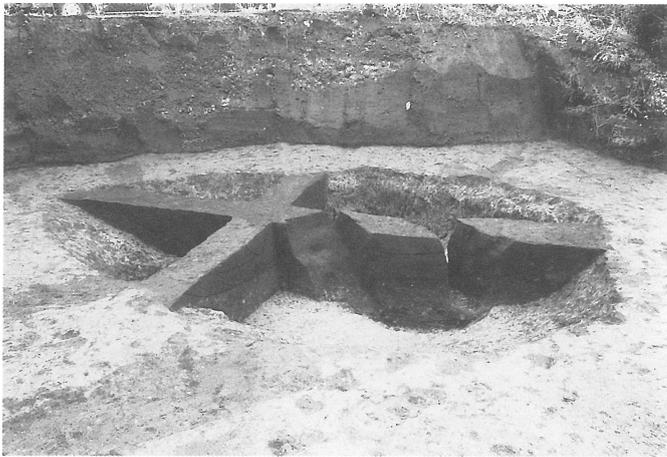
(8) 一本松前遺跡 b 地点 出土遺物



(1) 下宿東遺跡 近景



(2) 下宿東遺跡 C5-1セクション



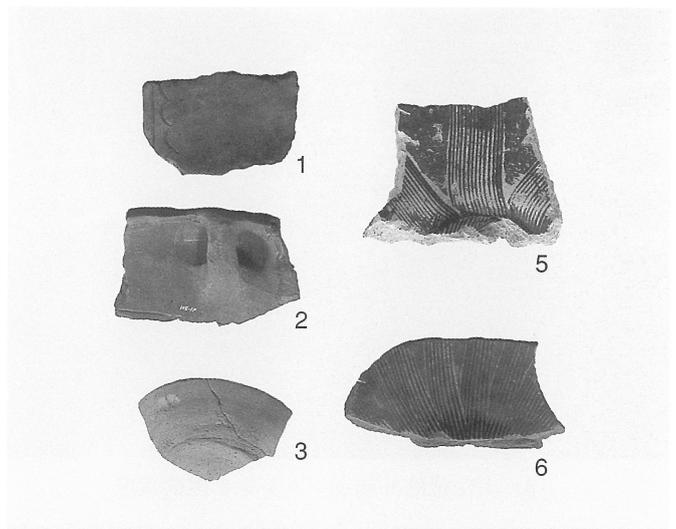
(3) 下宿東遺跡 1号土坑セクション



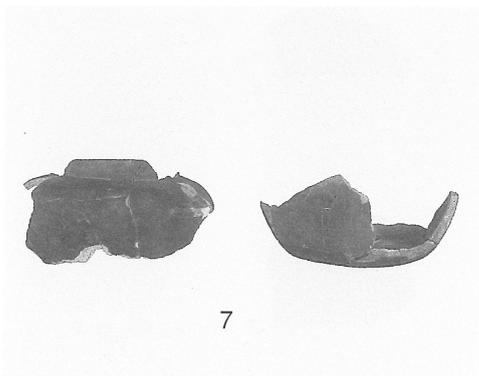
(4) 下宿東遺跡 1号土坑



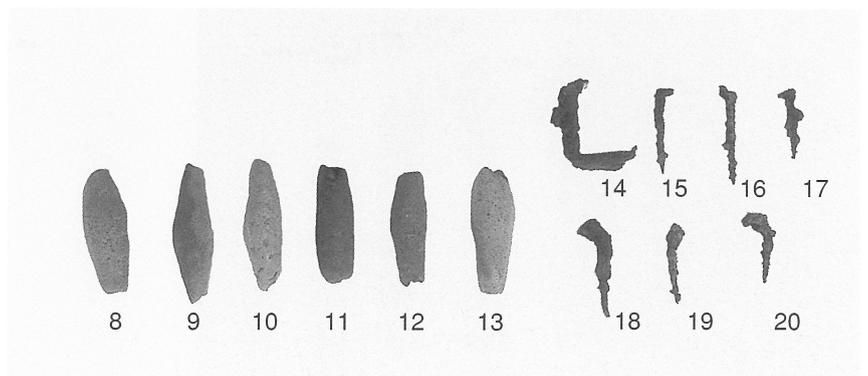
(5) 下宿東遺跡 1号土坑



(6) 下宿東遺跡 出土遺物 (1)



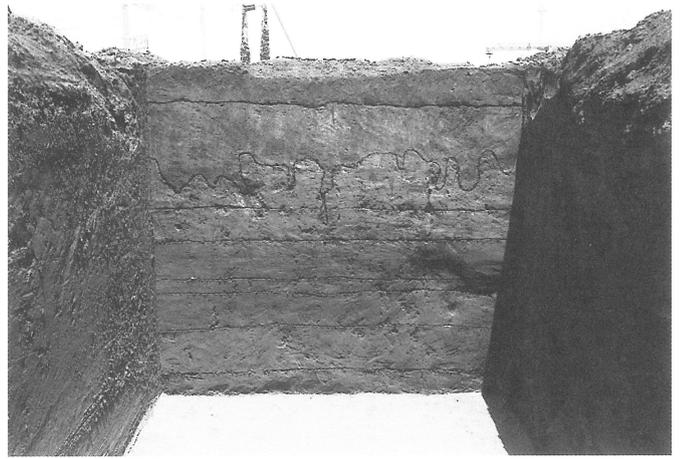
(7) 下宿東遺跡 出土遺物 (2)



(8) 下宿東遺跡 出土遺物 (3)



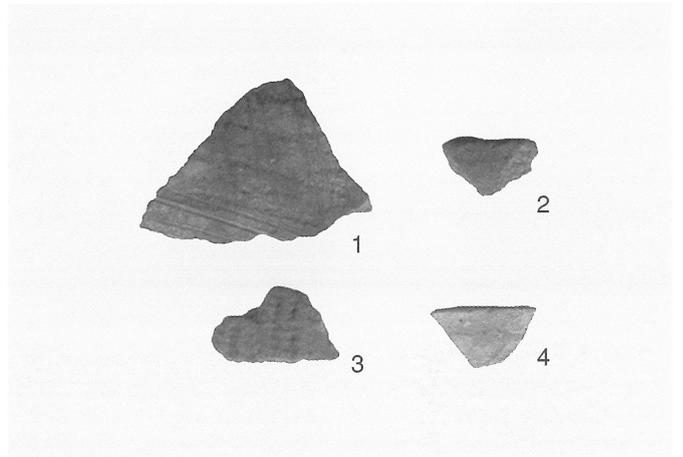
(1) 東帰久保南遺跡 近景



(2) 東帰久保南遺跡 C4-1G セクション



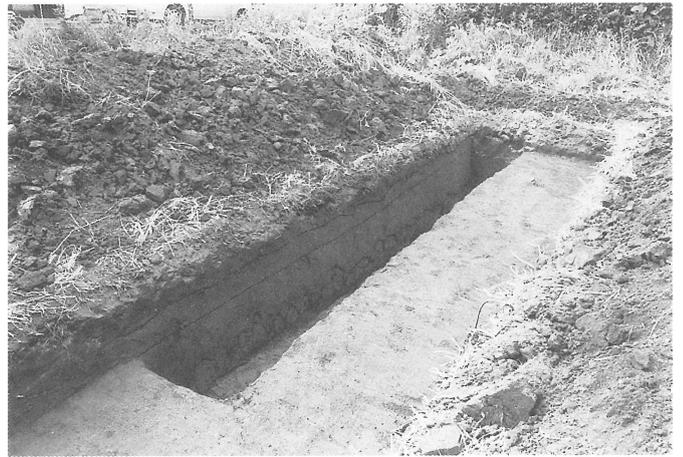
(3) 東帰久保南遺跡 1号土坑



(4) 東帰久保南遺跡 出土土器



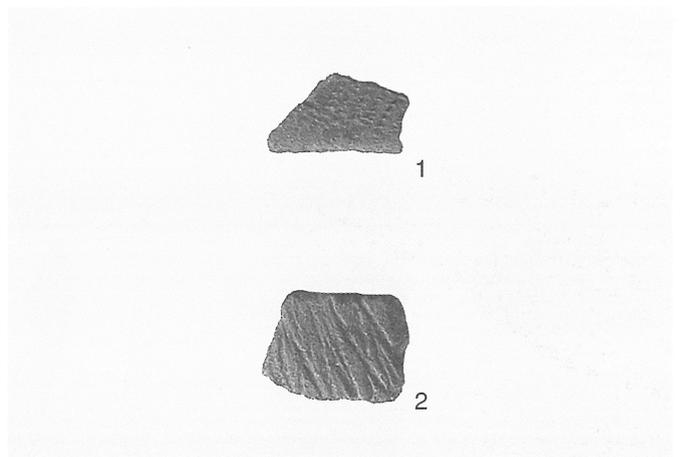
(5) 大山遺跡b地点 トレンチ掘削状況



(6) 大山遺跡b地点 セクション



(7) 大山遺跡b地点 1号土坑



(8) 大山遺跡b地点 出土遺物



(1) 島田込の内遺跡 近景



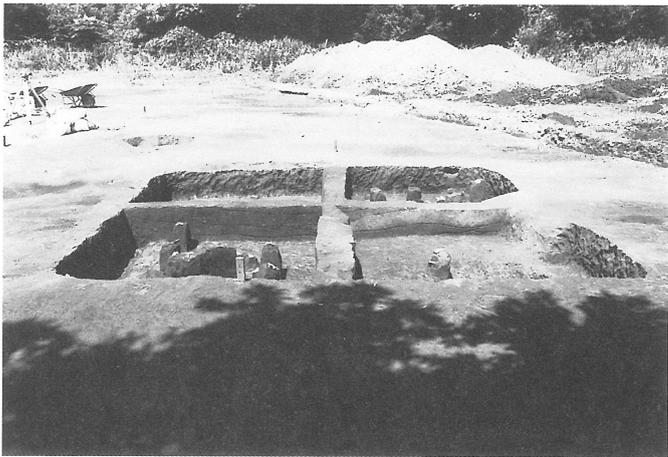
(2) 島田込の内遺跡 確認調査風景



(3) 島田込の内遺跡 1次確認調査 遺構検出状況



(4) 島田込の内遺跡 2次確認調査 遺構検出状況



(5) 島田込の内遺跡 3号住居跡セクション



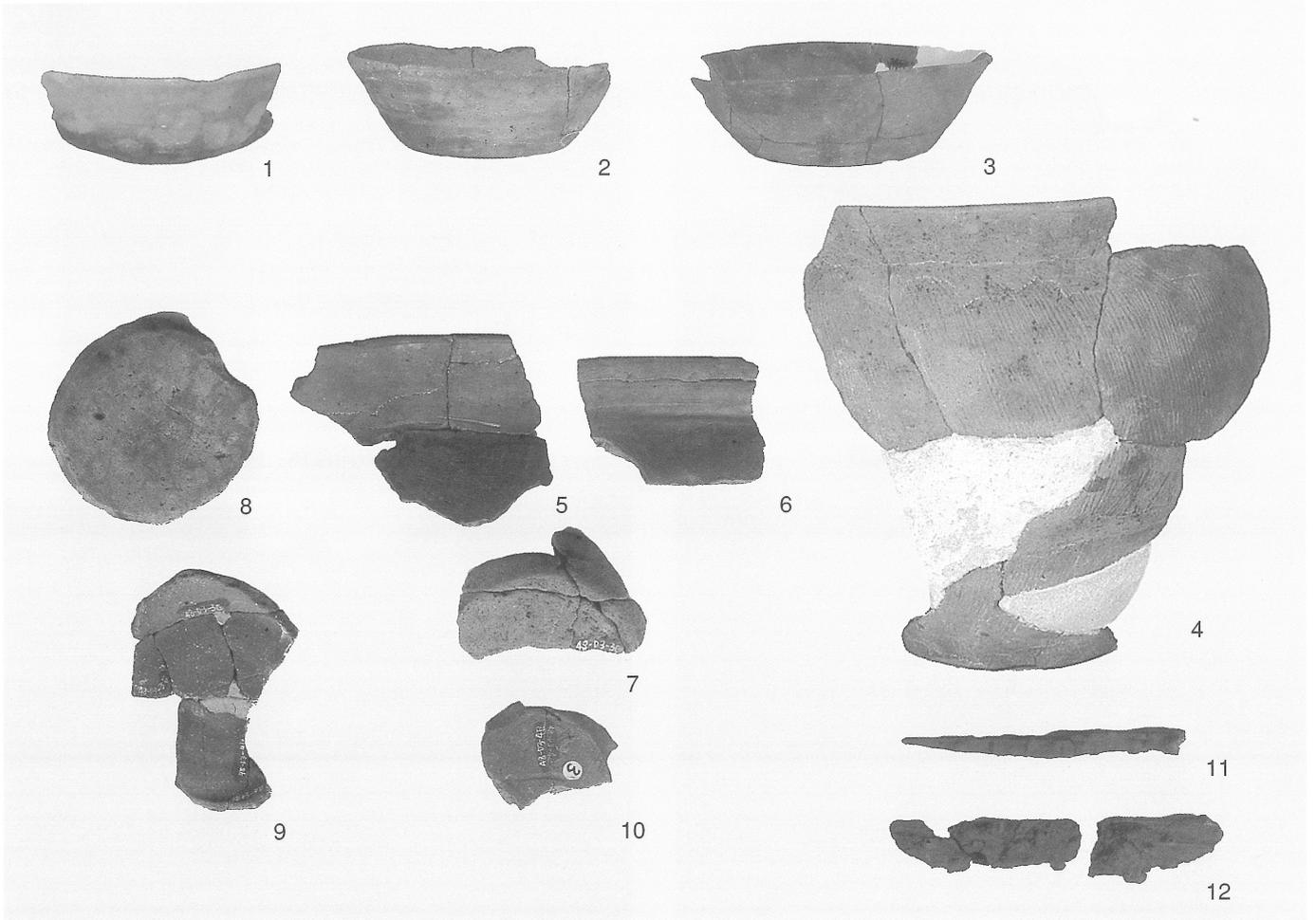
(6) 島田込の内遺跡 3号住居跡遺物出土状況



(7) 島田込の内遺跡 3号住居跡カマド



(8) 島田込の内遺跡 3号住居跡



(1) 島田の内遺跡 3号住居跡出土遺物



(2) 島田の内遺跡 4号A B住居跡セクション



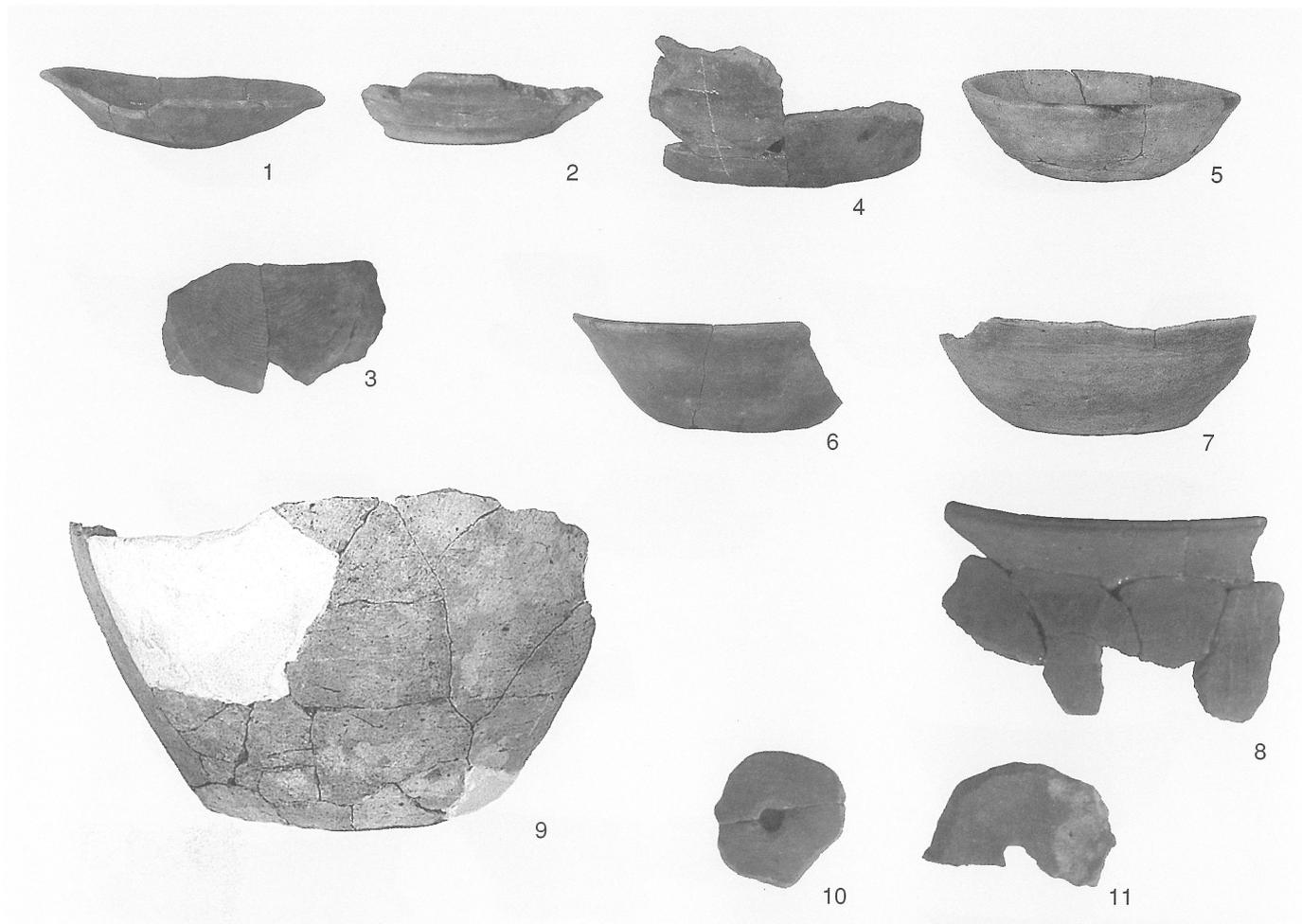
(3) 島田の内遺跡 4号A住居跡遺物出土状況



(4) 島田の内遺跡 4号A住居跡カマド



(5) 島田の内遺跡 4号A住居跡



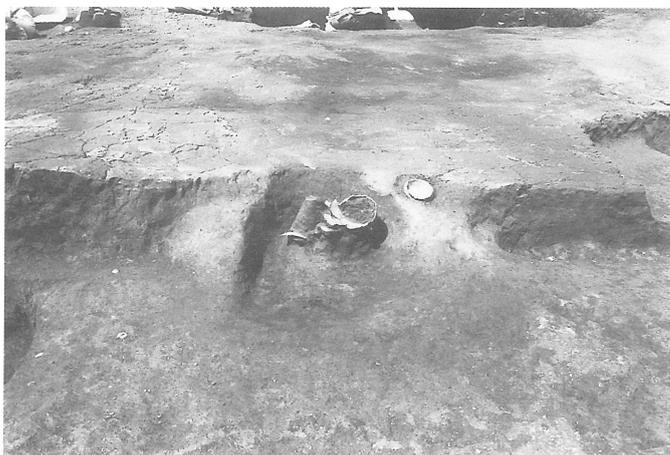
(1) 島田の内遺跡 4号A住居跡出土遺物



(2) 島田の内遺跡 4号B住居跡カマド内遺物出土状況



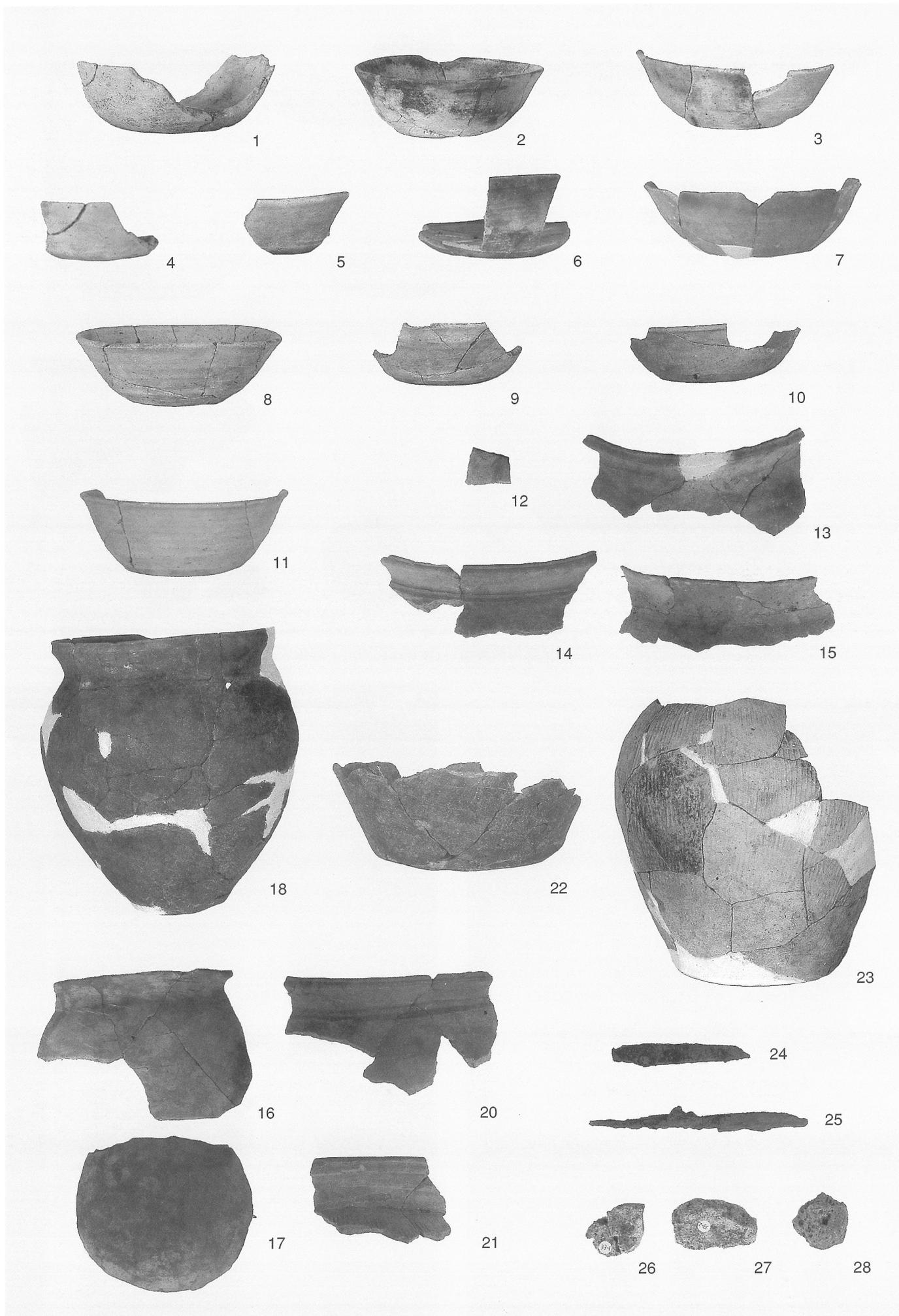
(3) 島田の内遺跡 4号B住居跡遺物出土状況



(4) 島田の内遺跡 4号B住居跡カマド



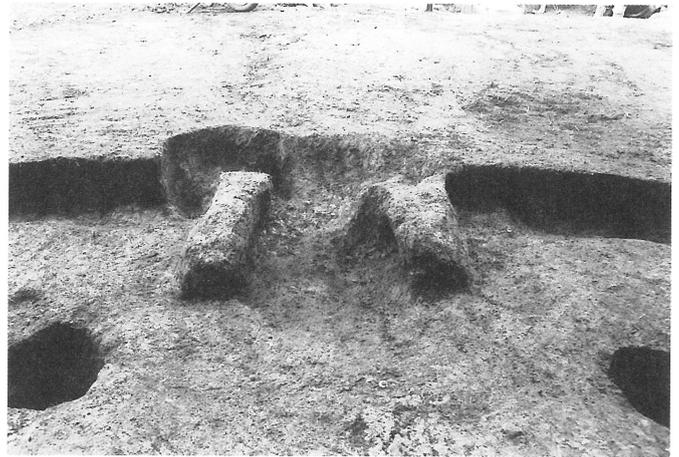
(5) 島田の内遺跡 4号B住居跡



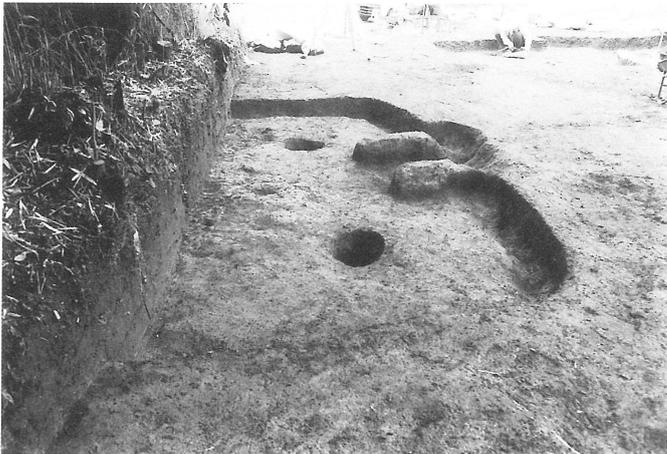
島田の内遺跡 4号B住居跡出土遺物



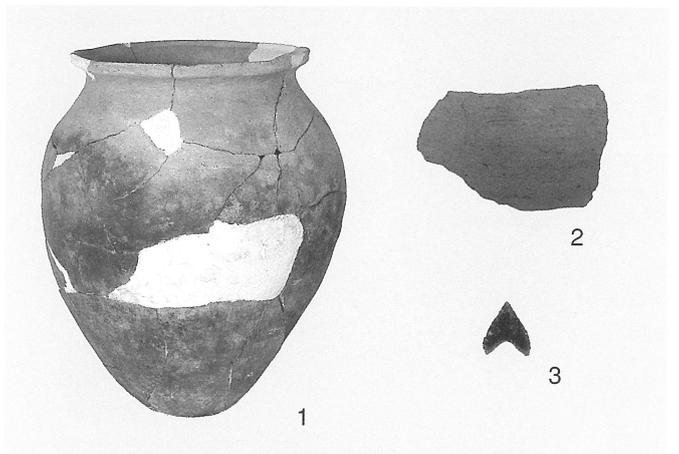
(1) 島田込の内遺跡 5号住居跡遺物出土状況



(2) 島田込の内遺跡 5号住居跡カマド



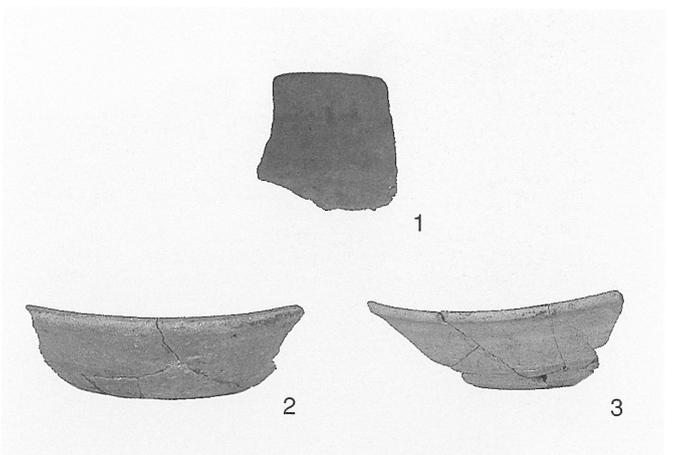
(3) 島田込の内遺跡 5号住居跡



(4) 島田込の内遺跡 5号住居跡出土遺物



(5) 島田込の内遺跡 1号土坑



(6) 島田込の内遺跡 出土遺物



(7) 島田込の内遺跡 区域全景



(8) 島田込の内遺跡 調査風景



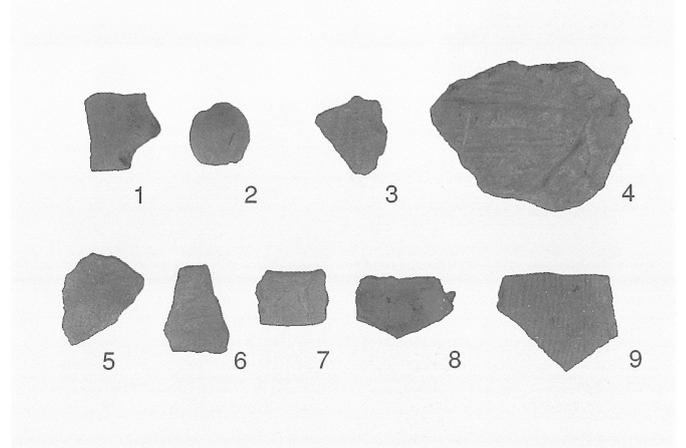
(1) 南台遺跡b地点 近景



(2) 南台遺跡b地点 作業風景



(3) 南台遺跡b地点 トレンチ掘削状況



(4) 南台遺跡b地点 出土土器



(5) 栗谷遺跡b地点 近景



(6) 栗谷遺跡b地点 1トレンチ



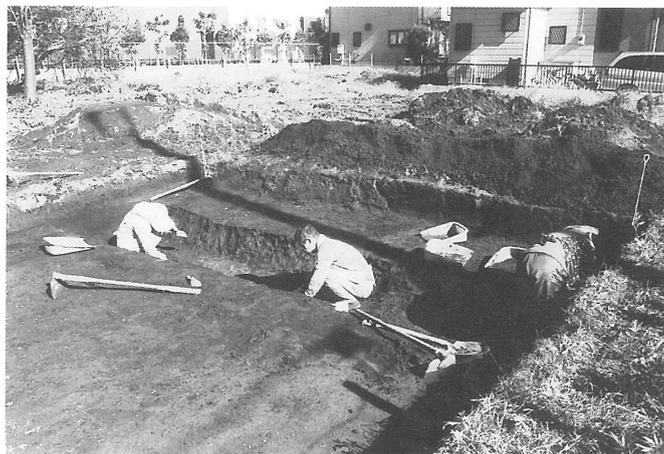
(7) 栗谷遺跡b地点 3トレンチ



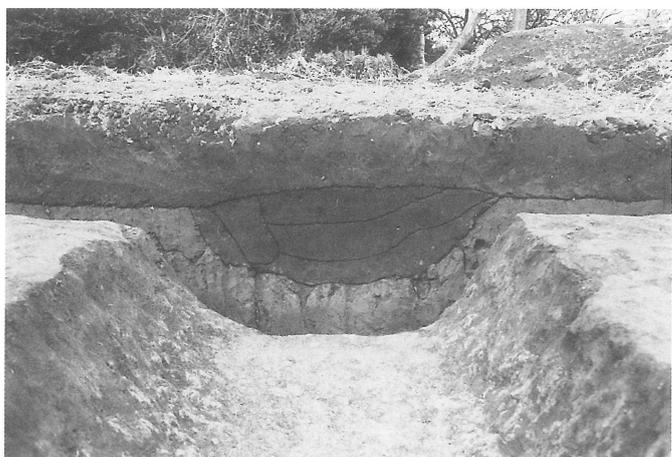
(8) 栗谷遺跡b地点 セクション



(1) 二重堀遺跡 f 地点 近景



(2) 二重堀遺跡 f 地点 作業風景



(3) 二重堀遺跡 f 地点 溝状遺構セクション



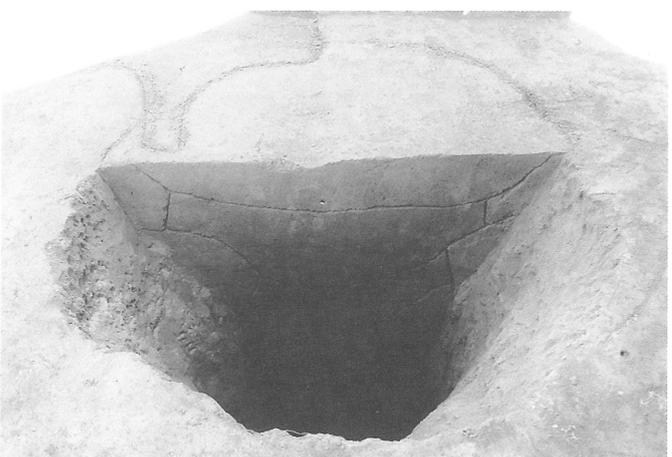
(4) 二重堀遺跡 f 地点 溝状遺構



(5) 菅地ノ台遺跡 d 地点 近景



(6) 菅地ノ台遺跡 d 地点 C3-4セクション



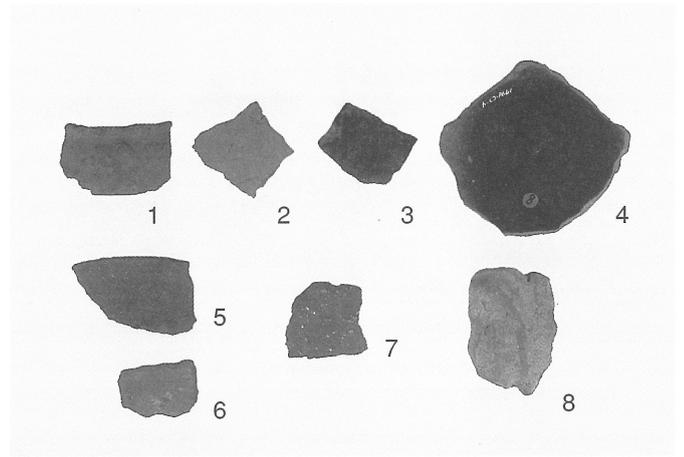
(7) 菅地ノ台遺跡 d 地点 1号土坑セクション



(8) 菅地ノ台遺跡 d 地点 1号土坑



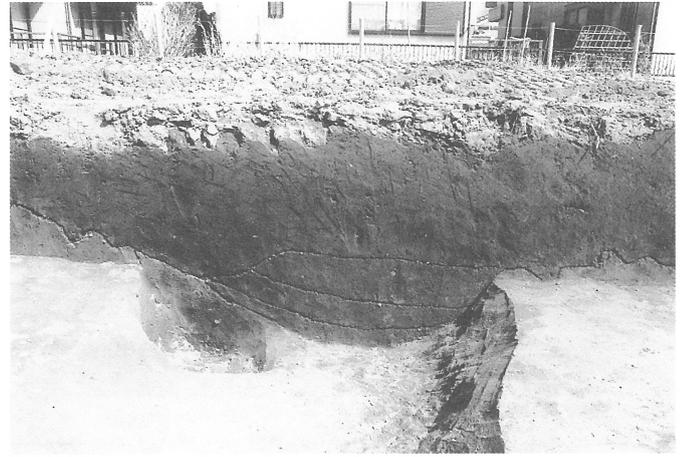
(1) 菅地ノ台遺跡 d 地点 1号土坑・溝状遺構



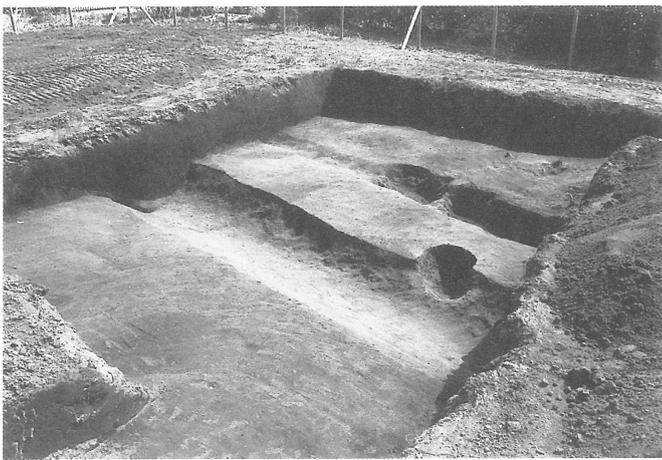
(2) 菅地ノ台遺跡 d 地点 出土土器



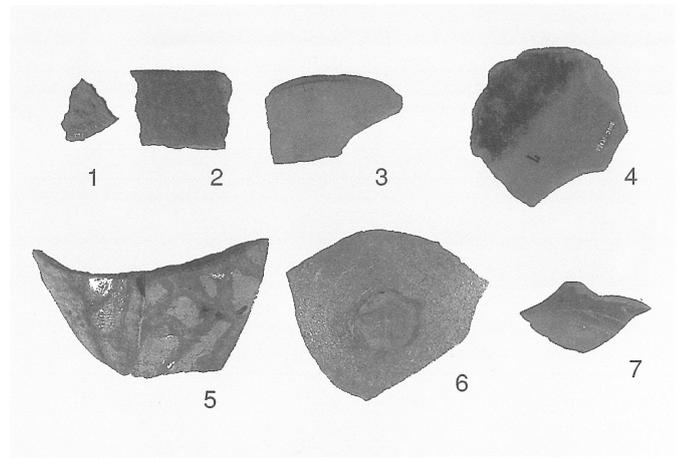
(3) 持田遺跡 C 地点・正覚院館跡 d 地点 調査風景



(4) 持田遺跡 C 地点・正覚院館跡 d 地点 溝状遺構セクション



(5) 持田遺跡 C 地点・正覚院館跡 d 地点 溝状遺構



(6) 持田遺跡 C 地点・正覚院館跡 d 地点 出土土器



(7) 持田遺跡 C 地点・正覚院館跡 d 地点 工事中の調査状況



(8) 持田遺跡 C 地点・正覚院館跡 d 地点 工事中発見遺物

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし しないいせきはつくつちようさほうこくしょ へいせい16ねんど		
書名	千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度		
副書名			
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	秋山利光 森竜哉 武藤健一		
編集機関	八千代市教育委員会		
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2		Tel 047-483-1151 内6114
発行年月日	西暦2005 (平成17年) 3月25日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
新東原遺跡 d地点	八千代市勝田字新東原 1259-2 の一部他	12221	259	35° 41' 56"	140° 08' 18"	2003040 ～ 20030411	確認調査 上層 144m ² /1,065.39m ² 下層 4m ² /1,065.39m ²	共同住宅建設
池の台遺跡 e地点	八千代市萱田町字池ノ 台2244-2 他	12221	240	35° 43' 16"	140° 06' 28"	20030421 ～ 20030506	確認調査 本調査 210m ² /1,579.35m ² 50m ²	店舗・共同住宅 建設
池の台遺跡 f地点	八千代市萱田町字出戸 660-1 の一部	12221	240	35° 43' 13"	140° 06' 28"	20040205 ～ 20040210	確認調査 上層 147m ² /708.00m ² 下層 4m ² /708.00m ²	共同住宅建設
一本松前遺跡 a地点	八千代市大和田新田字 一本松前127-1 の一部 他	12221	174	25° 43' 07"	140° 05' 26"	20030501 ～ 20030630	確認調査 上層 1,852m ² /15,839.00m ² 下層 62m ² /15,839.00m ² 本調査 363m ²	宅地造成
一本松前遺跡 b地点	八千代市高津字橋戸 1014-2	12221	174	35° 43' 03"	140° 06' 30"	20030526 ～ 20030613	確認調査 本調査 338m ² /1,983.47m ² 43m ²	宅地造成
下宿東遺跡	八千代市米本字下宿 東2554-1 他	12221	108	35° 45' 02"	140° 07' 30"	20030512 ～ 20030526	確認調査 上層 223m ² /1,384.87m ² 下層 4m ² /1,384.87m ² 本調査 75m ²	駐車場建設
東久保南遺跡	八千代市島田字寅高 入790-1 の一部	12221	42	35° 45' 21"	140° 05' 34"	20030604 ～ 20030606	確認調査 上層 273.50m ² /1,652.90m ² 下層 4m ² /1,652.90m ² 本調査 17.50m ²	店舗建設
大山遺跡b地点	八千代市米本字大山 2380-58	12221	103	35° 45' 25"	140° 07' 10"	20030611 ～ 20030613	確認調査 本調査 186m ² /528.00m ² 28m ²	宅地造成
島田込の内 遺跡	八千代市島田字込の内 996-1	12221	48	35° 45' 42"	140° 06' 24"	20030618 ～ 20030624 20030715 ～ 20030718 20030728 ～ 20030822	確認調査 199.50m ² /240.00m ² 確認調査 170m ² /170.00m ² 本調査 184m ²	資材置場出入り 口切土工事
南台遺跡 b地点	八千代市保科字栗谷 2070-4・-6	12221	72	35° 45' 43"	140° 08' 05"	20030708 ～ 20030715	確認調査 130m ² /1,678.00m ²	特別養護老人 ホーム建設

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
栗谷遺跡 b地点	八千代市保品字中代谷 1915-116の一部他	12221	75	35° 45' 24"	140° 07' 55"	20030709 ～ 20030715	確認調査 157.50m ² /777.11m ²	店舗建設
二重堀遺跡 f地点	八千代市上高野字二重 堀1235-1・-5, 1236-1	12221	231	35° 43' 08"	140° 08' 08"	20031112 ～ 20031126	確認調査 296.50m ² /2,179.00m ²	宅地造成
菅地ノ台遺跡 d地点	八千代市萱田字菅地ノ 台441-12・-13	12221	179	35° 44' 10"	140° 06' 42"	20040219 ～ 20040302	確認調査 上層 下層 本調査 118m ² /480.00m ² 4m ² /480.00m ² 38m ²	共同住宅建設
持田遺跡 c地点 正覚院館跡 d地点	八千代市村上字松葉 1193-2, 1195-2	12221	200 201	35° 45' 25"	140° 07' 10"	20040309 ～ 20040318	確認調査 243m ² /1,242.22m ²	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新東原遺跡 d地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器（中期），石鏃	
池の台遺跡 e地点	集落跡	奈良・平安時代	土坑 時期不明溝	2基 2条 土師器，須恵器	
池の台遺跡 f地点	集落跡	奈良・平安時代	なし	縄文土器（前期），土師器	
一本松前遺跡 a地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 奈良・平安時代	旧石器時代遺物集中地点 縄文時代土坑 （内 陥し穴 時期不明溝	1ヶ所 13基 1基 5条 旧石器時代（剥片，ナイフ型石器， 台石，叩き石） 縄文土器（前期・中期・後期） 須恵器	
一本松前遺跡 b地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	縄文時代陥し穴 時期不明溝	1基 4条 旧石器時代（剥片） 縄文土器（後期）	
下宿東遺跡	包蔵地	縄文時代 弥生時代 奈良・平安時代 中世	中世土坑 時期不明溝	1基 1条 縄文土器（中期） 弥生土器 土師器，須恵器 中世陶磁器（内耳土器・播鉢・土 鍋・かわらけ），土錘，鉄製品（くぎ）	
東帰久保南遺跡	包蔵地	縄文時代 奈良・平安時代 中近世	中近世土坑	1基 縄文土器（中期・後期） 土師器，須恵器 泥めんこ	
大山遺跡 b地点	集落跡	縄文時代 中近世	中世以降炭焼き窯	1基 縄文土器（前期）	
島田込の内遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	弥生時代後期～古墳時代前期 竪穴住居跡 奈良・平安時代竪穴住居跡 同土坑	1軒 6軒 4基 弥生土器 古墳時代土師器 奈良・平安時代土師器，須恵器	第1次確認調査
			縄文時代土坑 奈良・平安時代住居跡 同掘立柱建物跡 同土坑 近世以降炭焼き窯	2基 3軒 2棟 4基 1基 弥生土器 古墳時代土師器 土師器，須恵器	第2次確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥田込の内遺跡	集落跡		奈良・平安時代竪穴住居跡 同土坑	4軒 1基 縄文土器 弥生土器 古墳時代土師器 土師器（墨書土器）、須恵器 鉄製品（刀子、錐） 石器（砥石、石鏃） 紡錘車	本調査
南台遺跡 b地点	包蔵地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	なし	縄文土器（後期） 弥生土器（後期） 土師器、須恵器 土玉	
栗谷遺跡 b地点	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	なし	なし	
二重堀遺跡 f地点	包蔵地	縄文時代 奈良・平安時代 中近世	中近世以降溝	1条 縄文土器 土師器	
菅地ノ台遺跡 d地点	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代 中近世	縄文時代土坑 近世以降溝	1基 1条 縄文土器（後期） 土器片錘 土師器、須恵器	
持田遺跡 c地点 正覚院館跡 d地点	集落跡 城館跡	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代 中近世	近世以降溝	1条 縄文土器（早期・前期） 古墳時代土師器（前期） 土師器、須恵器	

千葉県八千代市
市内遺跡発掘調査報告書
平成16年度

平成17年3月25日発行

発行 八千代市教育委員会 生涯学習部生涯学習課
〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2
TEL・047-483-1151

印刷 有限会社フジ印刷
〒276-0047 千葉県八千代市吉橋1189-5